

令和3年度

日本大学学位請求論文

# 他者からの視点取得の表明に関する

## 心理学的検討

日本大学大学院文学研究科

心理学専攻博士後期課程

鈴木 雄 大

# 目次

はじめに 本論文の構成 .....	1
第一章 問題と目的 .....	6
1. 1. 視点取得 (Perspective-taking).....	7
1. 1. 1. 視点取得とは .....	7
1. 1. 2. 視点取得と共感の位置づけ .....	9
1. 2. 視点取得されることに注目した研究.....	11
1. 2. 1. 被視点取得の知覚の位置づけ .....	12
1. 2. 2. 他者からの視点取得の表明の効果 .....	13
1. 2. 3. 被視点取得の知覚の効果のメカニズム.....	18
1. 3. 被視点取得研究の課題.....	19
1. 3. 1. Goldstein et al.(2014)モデルの再検討 .....	19
1. 3. 2. 感情的視点取得と認知的視点取得を区別した検討 .....	20
1. 3. 3. 被視点取得の知覚および他者の視点取得能力の評価に関する検討 .....	22
1. 4. 本論文の目的.....	24
第二章 先行研究で示された 被視点取得の知覚の効果の確認.....	28
2. 1. 研究 1: 他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果の検討 .....	29
(1) 目的 .....	29
(2) 方法 .....	30

(3) 結果 .....	35
(4) 考察 .....	50
2.2. 研究 2: 被共感の知覚と自他の重なる知覚の関連の検討.....	52
(1) 目的 .....	52
(2) 方法 .....	57
(3) 結果 .....	59
(4) 考察 .....	72
2.3. 研究 3: 被共感の知覚尺度の作成 .....	78
(1) 目的 .....	78
(2) 方法 .....	82
(3) 結果 .....	84
(4) 考察 .....	89
2.4. 第二章のまとめ .....	91
第三章 感情的視点取得と認知的視点取得を 区別した検討 .....	94
3.1. 研究 4: 他者からの感情的視点取得および認知的視点取得を知覚することが被共感の 知覚に及ぼす影響 .....	95
(1) 目的 .....	95
(2) 方法 .....	97
(3) 結果 .....	102
(4) 考察 .....	110

3.2. 研究 5: 他者からの感情的視点取得の表明が対人認知に及ぼす影響 .....	112
(1) 目的 .....	112
(2) 方法 .....	113
(3) 結果 .....	124
(4) 考察 .....	134
3.3. 第三章のまとめ .....	138
第四章 他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果の検討.....	140
4.1. 研究 6: 人一般の感情的視点取得能力信念尺度の作成.....	147
(1) 目的 .....	148
(2) 方法 .....	149
(3) 結果 .....	153
(4) 考察 .....	159
4.2. 研究 7: 他者の感情的視点取得能力の評価に人一般の感情的視点取得能力信念が及ぼす効果の検討—相互作用相手の情報がない場面に注目して—.....	161
(1) 目的 .....	161
(2) 方法 .....	168
(3) 結果 .....	175
(4) 考察 .....	191
4.3. 研究 8: 他者の感情的視点取得能力の評価に人一般の感情的視点取得能力信念が及ぼす効果の検討—相互作用相手の情報がある場面に注目して—.....	197

(1) 目的 .....	197
(2) 方法 .....	206
(3) 結果 .....	210
(4) 考察 .....	222
4. 4. 第四章のまとめ .....	225
第五章 総合考察 .....	228
5. 1. 研究結果のまとめ .....	229
5. 1. 1. 先行研究で示された結果の検討(第二章).....	229
5. 1. 2. 感情的視点取得と認知的視点取得を区別した検討(第三章).....	231
5. 1. 3. 他者からの視点取得の表明の効果のプロセスの検討(第四章).....	234
5. 2. 本論文の意義.....	240
5. 3. 本論文の限界と展望.....	245
引用文献 .....	248
謝辞.....	254
付録.....	256

## はじめに 本論文の構成

はじめに、本論文の概略について述べたうえで、全体の構成を説明する。

本論文は、他者からの視点取得の表明をされることが対人認知に及ぼす効果、およびその効果のプロセスを検討した社会心理学研究である。とくに本論文では、Goldstein, Vezich, & Shapiro(2014)が示したモデルから出発し、その問題点を克服しつつ、他者に視点取得されることに関するモデルの理論的な発展を試みた。本論文が提案する最終的なモデルを Figure 1.に示した。

上記の目的に際して、本論文では3つのステップに基づく、全8つの研究を行った。第一に、Goldstein et al.(2014)の示した結果について確認するステップである。ここでは、3つの研究によって Goldstein et al.(2014)の結果が再現されるかどうかを検討し、また得られた結果の問題点の解決を試みた(ステップ 1)。第二に、認知的視点取得と感情的視点取得を区別した検討を行うステップであった(ステップ 2)。ここでは、2つの研究によって、他者からの視点取得の表明を受けたとき、その他者が自分の感情に注目していたのか、もしくは思考に注目していたのかによる効果の差を検討した。第三に、本論文のここまでの研究から得られたモデルを修正し、また発展を試みたステップである。ここでは、3つの研究によって、(a)Berndsen & Wenzel(2021)が示したモデルの考え方を取り入れてモデルの修正を行い、そして(b)他者に視点取得されることに関する個人差変数の提案とその効果の検討を試みた(ステップ 3)。

つぎに、上記の3ステップに対応させながら、本論文の構成について説明する。本論文は、5つの章と付録から構成される(Figure 2.参照)。第一章は、序論として、本論文の目的に至るまでの研究背景について説明する。まず、視点取得について概観する。とくに、本論文における視点取得の位置づけを明確にするため、視点取得に関する先行研究を概観した。ここで概観した先行研究は、主に視点取得することに関する研究であった。次に、視点取得されることに関する先行研究を概観した。とくに、本論文に大きく寄与するいくつかの先行研究(Berndsen & Wenzel, 2021; Goldstein et al., 2014)に注目し、詳細に議論した。これらの議論ののち、視点取得されることに関する未検討の問題を指摘し、本論文の検討課題について議論した。

第二章から第四章では、先述した本論文の目的を検討するため、全8つの研究を行った。それぞれの章は、先述した3つのステップに対応していた。第二章では、3本の研究を行い、先行研究(Goldstein et al., 2014)が示した結果が再現されるかどうかの検討、および問題点の解決を試みた(先述のステップ1)。まず、Goldstein et al.(2014)が示したモデルが再現されるかどうか検討した(研究1)。その結果、Goldstein et al.(2014)とは異なるモデルが得られたため、研究1で得られたモデルにおける変数間の関連が実際に存在しているかどうかを検討した(研究2・研究3)。また、研究3では、Goldstein et al.(2014)および、その追試を行った研究1について指摘された測定上の問題について解決するため、該当する概念を適切に測定するための尺度作成を行った。

第三章では、2つの研究によって、視点取得されることについて、他者視点で感情を想像する感情的視点取得と、他者視点で思考を想像する認知的視点取得に区別し、それぞれ

の効果を検討した(上述のステップ 2)。まず、研究 1 で得られたモデルを考慮し、他者からの感情的視点取得の表明と、他者からの認知的視点取得の表明それぞれが、共感されたと思う程度に及ぼす効果を検討した(研究 4)。そして、研究 4 の結果を踏まえ、他者からの感情的視点取得の表明の効果は、研究 1 で得られたモデルと一致するかどうかを検討した(研究 5)。

第四章では、3 つの研究を行い、ここまでの研究で得られたモデルの修正および発展を試みた(上述のステップ 3)。具体的には、これまでの知見からでは説明できない現象について説明するため、視点取得されることに関わる個人差変数を提案し、さらに Berndsen & Wenzel(2021)の指摘に基づいて、研究 5 までの知見から得られたモデルの修正・発展を試みた。まず、視点取得されることに関わる個人差変数として、人一般の感情的視点取得能力信念を提案し、その測定のための尺度を開発した(研究 6)。人一般の感情的視点取得能力信念とは、ある特定の他者や自分自身についてではなく、人は一般的に他者の視点にたって感情を想像できるものだと信じることを指す。この信念は、他者からの感情的視点取得の表明を受けた際に生じる、感情的視点取得をされたという知覚の程度が調整すると予測した。そして、研究 7 では、Berndsen & Wenzel(2021)の指摘に基づいてモデルを修正しつつ、人一般の感情的視点取得能力信念による調整効果を検討した。最後に、研究 7 で得られたモデルをより発展させるため、どのような他者からの感情的視点取得の表明を受けるかによる効果の検討を行った(研究 8)。

本論文の最終章となる第五章では、総合考察を行った。すなわち、第二章から第四章の研究で得られた知見を整理し、そして本論文の意義、および限界と展望について考察した。



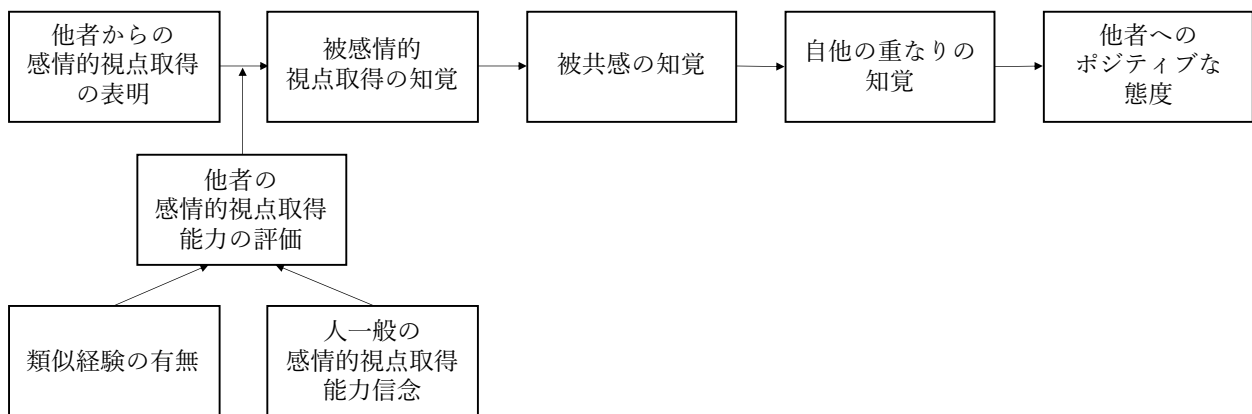


Figure 1. 本論文が検討し、提案するモデル。

第一章 序論	
本論	第二章 (研究1-3) Goldstein et al.(2014)の追試と問題の解決
	第三章 (研究4-5) 認知的・感情的視点取得を区別した検討
	第四章 (研究6-8) 得られたモデルの修正および発展
第五章 総合考察	

Figure 2. 本論文の構成

# 第一章

## 問題と目的

第一章では、序論として、本論文の背景、目的、および意義について論じる。まず、第一章一節(1. 1.)では、視点取得することに関する研究について概観する。本論文の主題は視点取得されることにあるが、これについて議論することにさきがけて、視点取得することについて議論しておく必要がある。これは、視点取得に関する研究の多くが視点取得することに注目した研究であり、また本論文が扱う概念の整理をするためである。

第一章二節(1. 2.)では、本論文の主題である視点取得されることについて検討した研究(以後、被視点取得研究とよぶ)を概観し、主要概念について整理する。そして、三節(1. 3.)で被視点取得研究の課題を指摘し、四節(1. 4.)で本問題の目的について議論する。

## 1. 1. 視点取得 (Perspective-taking)

### 1. 1. 1. 視点取得とは

人は、他者の視点に立って、その他者から見えている世界を想像することがある。たとえば、なにか悲しい出来事を経験した他者を観察したり、その経験について話を聞いたとき、その他者の視点に立って、その経験をより理解しようとすることがあるだろう。このような、他者の視点に立って世界を考えることを、視点取得という(Galinsky, Maddux, Gilin, & White, 2008)。視点取得には「あることがらについて自分自身の自己中心的な考えを押さえて、ある他者の立場を積極的に受け入れることが含まれて」おり、この行為は高度に認知的な過程だとされている(Davis, 1994 菊池訳 1999, p.19-20)。

ある人が他者の視点を取得するとき、そこには視点取得する人と視点取得される人が存在することになる。すなわち、視点取得とは、する人とされる人の双方によって成立する現象である。これまでの研究では、視点取得する側に注目した研究が多く行われてきた。そして、他者への視点取得は、おおむね対人的にポジティブな効果をもつことが指摘されている。たとえば、視点取得が社会的なバイアスやステレオタイプを抑制すること (Galinsky, & Moskowitz, 2000), 自他のポジティブな特性に関して似ていると認知させたり (Davis, Conklin, Smith, & Luce, 1996), 他者の自己の表象の重なり認知を増加させたりし (Galinsky, & Moskowitz, 2000), 自他の心的な統合を促すこと、他者への援助が促進されること (Batson et al., 1989; Maner et al., 2002), 攻撃的な反応が抑制されること (Richardson, Green, & Lago, 1998), そして視点取得のターゲットへの共感を促進すること (Batson et al., 1997; Maner et al., 2020; Stotland, 1969; 登張, 2000) が明らかになっている。

また、視点取得が共感を促進する効果については、視点取得の種類によって異なることが示されている。人が他者の視点を取って考えるとき、その他者の視点で、その他者の感情を想像したり、またその他者の考えを想像したりすることがあるだろう。このとき、「他者によって経験される情動的な反応を推測」することを感情的視点取得と言い、「他者の考えや動機、意図といったものについての推測」を認知的視点取得という (Davis, 1994 菊池訳 1999, pp.56)<sup>1</sup>。Oswald(1996)は、感情的視点取得と認知的視点取得を区別し、それ

---

<sup>1</sup>感情的視点取得と認知的視点取得は、他者視点でその他者のどの側面(i.e., 感情か思考か)に注目し、想像するのかによって区別される。感情的視点取得においても認知的視点取得においても、想像した他者の感情や思考に対しての評価や反応はその定義に含まれない。

ぞれが共感を促進する効果について検討した。その結果、特に他者の視点を取らない場合に比べて、感情的視点取得は共感を有意に促進するが、一方で認知的視点取得には共感を促進する効果が示されなかった。このことから、視点取得と共感の関連を考える際には、視点取得の種類についても考慮する必要があると考えられる。

### 1.1.2. 視点取得と共感の位置づけ

視点取得の効果として特に重要なのは、視点取得が共感を促進するという点である。視点取得研究における共感とは、他者が喚起した感情と同じ感情を経験すること(以後、感情共有とよぶ)や(Oswald, 1996)、そのターゲットとなる他者に対する感情反応(以後、他者指向的感情反応とよぶ)をさす(Goldstein et al., 2014)。他者指向的感情反応とは、次のとおりである。たとえば、悲しい出来事を経験した他者を観察したり、その経験についての話を聞いたりしたとき、その他者への同情を喚起することがあるだろう。また、ポジティブな出来事を経験した他者と接したときに、その他者を称賛することがある。このように、悲しんでいる他者や喜んでいる他者と同様の感情を経験する(i.e., 感情共有)ではなく、同情や称賛のように他者に向けた感情を喚起することを他者指向的感情反応という。他者指向的感情反応によって定義される共感は、「共感的配慮」や「共感的関心」と呼ばれることもある(e.g., Maner et al., 2002; 登張, 2000)。また、視点取得が共感を促進することを利用して、共感の強さを高めたり低めたりする操作として扱われることもある。たとえば、Batson et al.(1997)は、他者の視点にたって考えるように促す教示の有無によって共感の高

低を操作しており、他者への視点取得がその他者への共感を生じさせると考えられている (e.g., Stotland, 1969; 登張, 2000)。

しかし一方で、視点取得を共感の下位概念として扱う知見もある<sup>2</sup>。たとえば、Davis(1994 菊池訳 1999, pp.19-20)は、共感の組織的モデルにおいて、視点取得を共感の「過程」と位置付けている。ここでの共感は、「他者の経験についてある個人がい尽くす反応を扱う一組の構成概念として、広く定義」されている(Davis, 1994 菊池訳 1999, pp.15)。共感の組織的モデルにおいて、視点取得は共感の過程として位置付けられる。また、他者指向的感情反応および感情共有は、個人内的な結果として位置付けられている<sup>3</sup>。また、組織的モデルでは、その共感の定義に従い、共感に関連する概念を広く扱っている(Davis, 1994 菊池訳 1999, pp.14)。たとえば、共感の過程における単純な認知機能として古典的条件付けや、また共感の対人的な結果として、援助、攻撃、社会的行動までもがモデルに含まれている。

本論文では、視点取得を共感の下位概念とは位置付けず、それぞれ別の概念であると考えられる。具体的には、視点取得を、他者の視点に立って世界を考える認知的行為として位置

---

<sup>2</sup> 個人の共感性を測定する多くの尺度には、視点取得傾向が下位概念として含まれている (e.g., 葉山ら, 2008; 日道ら, 2017; 鈴木・木野, 2008; 登張, 2003)。しかしながら、これらの研究が扱う共感性は、実際に他者への共感が生じるかどうかを問題としておらず、他者への共感のしやすさに関する個人の傾向を扱っている。実際に共感することを扱う博士論文とは異なるため、これらの研究についてはレビューしないこととした。

<sup>3</sup> 共感の組織的モデルにおいて、他者指向的感情反応にあたる概念は「応答的結果」、感情共有にあたる概念は「並列的結果」と呼ばれている(Davis, 1994 菊池訳 1999)。ただし、概念として同様のものをさすと考えられるため、ここではそれぞれ博士論文での呼称を用いた。

付ける。そして、共感を、他者の感情を共有し、他者指向的感情反応を喚起することと定義とする。すなわち、視点取得が認知的な行為であるのに対して、共感は感情的な反応として位置づける<sup>4</sup>。したがって、本論文における共感とは、Davis(1994 菊池訳 1999)の組織的モデルにおける、「感情的な結果」にあたる概念である。本論文が視点取得を共感の下位概念に含めないのは、本論文が視点取得することではなく、視点取得されることについて検討するためである。これについては、視点取得されることに関する研究を概観したあと、本章 1.2.4. において詳しく議論する。

## 1.2. 視点取得されることに注目した研究

ある人が他者の視点を取得するとき、そこには視点取得する人と視点取得される人が存在することになる。すなわち、視点取得とは、する人とされる人の双方によって成立する現象である。前節 1.1. では、視点取得することに関する研究を概観し、視点取得の位置づけ、および視点取得に関連する概念について整理した。本節 1.2. では、視点取得される人に注目した研究(以後、被視点取得研究とよぶ)を概観する。

---

<sup>4</sup> 感情的視点取得および認知的視点取得についても、それぞれ他者視点で感情ないし思考を想像する認知的行為と考える。とくに、感情的視点取得によって生じる評価や反応は、感情的視点取得に含まれない。この意味で、他者の感情を想像しようとする感情的視点取得は、感情反応である共感とは異なる概念といえる。



### 1.2.1. 被視点取得の知覚の位置づけ

被視点取得研究では、主に被視点取得の知覚(Perceived Perspective-Taking)に注目した検討が行われている。被視点取得の知覚とは、他者に視点取得されたと思うこと(believing that another individual is taking one's perspective)をさす(Goldstein et al., 2014)。ただし、研究間で、被視点取得の知覚の概念的定義は一貫しているものの、操作的定義は異なっている(Berndsen & Wenzel, 2021; Goldstein et al., 2014; Lei, Yin, & Zhang, 2015)。

研究間における操作的定義の差異は、他者が自分に向けた視点取得をしているとフィードバックされたかどうかによって被視点取得の知覚の有無を定義するのか、もしくは他者に視点取得されたと思う程度を測定し、その程度を被視点取得の知覚とするのかである。Goldstein et al.(2014)や Lei et al.(2015)は、前者の操作的定義を採用している。すなわち、他者からの「あなたの視点にたって考えました」といった、視点取得されたことを示すフィードバックを行い、そのフィードバック内容を正確に理解していたことをもって、被視点取得の知覚と呼んでいる。一方で、Berndsen & Wenzel(2021)は、他者からの視点取得の表明と、被視点取得の知覚を区別して扱っている。すなわち、他者に「あなたの視点にたって考えました」と表明されることと、その他者に視点取得されたとの程度思っているかを区別し、被視点取得の知覚を的に測定している。Berndsen & Wenzel(2021)の操作的定義は、他者からの表明内容としての外的な刺激の認知と、その刺激によって生じた被視点取得者の内的な状態を区別できていると考えられる。

本論文では、Berndsen & Wenzel(2021)と同様に、他者からの視点取得の表明と被視点取得の知覚を区別して扱う。これは、これらを区別して扱うことが、被視点取得の知覚につ

いてより詳細に検討できると考えられたためである。Berndsen & Wenzel(2021)は、他者からの視点取得の表明があっても、状況によっては被視点取得の知覚が生じないことを指摘している。すなわち、他者に視点取得されたということを伝えられることと、他者に視点取得されたと思うことは、必ずしも一致しないと考えられる。そのため、被視点取得に関する表明を受けることと知覚することを区別することで、これらの関連について、より詳細な検討が可能になると考えられる。これ以降、本論文では、他者が自分に対して視点取得したと知らされることを他者からの視点取得の表明とよび、他者が自分に対して視点取得したと思うことを被視点取得の知覚とよぶ。

### 1.2.2. 他者からの視点取得の表明の効果

被視点取得の知覚を定義し、視点取得された人に注目した最初の研究は Goldstein et al.(2014)である。ただし、実際に 2 者間相互作用を行い、その中で視点取得の効果を検討した研究は、Goldstein et al.(2014)以前にも行われていた。

たとえば Galinsky et al.(2008)は、実際に 2 人の参加者のペアをつくり、交渉場面での視点取得の効果について検討した。具体的には、一方の参加者を買い手、もう一方の参加者を売り手とした交渉場面のロールプレイを行った。その際、買い手は実験条件にあわせた教示を受けた。すなわち、売り手に対して視点取得する条件(視点取得条件)、共感する条件(共感条件)、および視点取得や共感について教示されない統制条件が設定された。ただし、ここでいう視点取得条件とは、買い手に売り手の立場にたって目的や動機を想像するよう教示する条件であり、認知的視点取得を促すものであった。そして共感条件は、買い手に

売り手の立場にたって感情を想像するよう教示する条件であり、感情的視点取得を促すものであった。この実験の結果、買い手に感情的視点取得をされた共感条件の売り手は、他の条件と比べて交渉過程への満足度が有意に高かった。

ただし、Galinsky et al.(2008)には、被視点取得の知覚の効果を検討する上で問題があった。すなわち、実験によって示された結果が、買い手による売り手への視点取得の効果なのか、それとも売り手が買い手からの視点取得を知覚したことの効果なのか、またそれら両方による効果なのかを区別できないことであった。そのため、Galinsky et al.(2008)の結果は、2者間相互作用における視点取得の効果への言及は可能であるものの、被視点取得の知覚の効果として解釈することはできなかった。

こうした知見を踏まえ、被視点取得研究が行われるようになった。まず、Goldstein et al.(2014)について概観する。Goldstein et al.(2014)は、他者に視点取得されたと思うこと (believing that another individual is taking one's perspective)を被視点取得の知覚(Perceived perspective-taking)と定義し、6つの実験によってその効果を検討した。Goldstein et al.(2014)の実験1-4では、エッセイ課題とフィードバックによって被視点取得の知覚の効果が検討された。参加者は過去の経験をパートナーとなった他の参加者(実際には存在しなかった)に伝えるためのエッセイを書き、パートナーが参加者に対して視点取得しながらそのエッセイを読んだかどうかをフィードバックされた。すなわち、他者からの視点取得の表明が操作された。その結果、他者からの視点取得の表明によって、パートナーからの共感の知覚(以後、被共感の知覚という)、パートナーとの自他の重なる知覚、およびパートナーへの好感が高く評価されることを示した。さらに、他者からの視点取得の表明がパー

トナーへの好感を高める効果は、被共感の知覚および自他の重なる知覚が高まることによって媒介されるという、多重媒介モデルが示された。

また、Goldstein et al.(2014)の実験5-6では、他者からの視点取得の表明があった際に、その他者は視点取得をうまくできていたかどうかによる効果が検討された。実験6では、経済的背景が中間層の学生を対象に、学生会選挙の立候補者が「学費の値上げに反対する」という公約を掲げている場面が想定された。そして、他者からの視点取得の表明を受ける視点取得条件と、表明を受けない統制条件が設定された。視点取得条件では、学生会選挙に向けたインタビューにおいて、立候補者は学費の値上げに反対することについて学生の視点にたって考えており、学費が上がることによって学生が感じる不安やストレスといった苦痛を理解し、そして経済的に困難な学生の助けになりたいと答えたという記事が提示された。一方の統制条件では、立候補者は学費の値上げに反対しているということだけが記載されたインタビュー記事が提示された。さらに、立候補者からの視点取得の表明に加えて、その立候補者が経済的に中間層ないし富裕層であることが告げられた。その結果、大きく2つの知見が得られた。第一に、立候補者が富裕層の場合、立候補者が中間層の場合よりも、立候補者の視点取得能力は低いと評価され、また立候補者が富裕層の場合に限り、視点取得条件の参加者は、統制条件の参加者よりも立候補者の視点取得能力を低く評価していた。第二に、立候補者が中間層の場合には、立候補者からの視点取得の表明によって、被共感の知覚および自他の重なる知覚が高まり、またその立候補者への投票意思が高くなっていった。一方で、立候補者が富裕層の場合には、立候補者からの視点取得の表明による被共感の知覚および自他の重なる知覚の差はみられず、またその立候補者への投票意

思は視点取得されなかった条件よりも視点取得された条件の方が低くなっていた。すなわち、他者からの視点取得の表明があったとしても、その他者の視点取得能力が十分でなく、うまく視点取得できていないと判断された場合には、その他者へのポジティブな態度は促進されず、むしろ他者にとってネガティブな効果が生じる可能性を指摘した。

つぎに、Berndsen & Wenzel(2021)を概観する。Berndsen & Wenzel(2021)は、加害者と被害者の相互作用過程に注目している。すなわち、被害者が加害者からの視点取得を知覚することで、被害者は加害者を許しやすくなるのかどうかを検討した。このとき、第一章 1.3.1.で述べたように、加害者からの視点取得の表明と、加害者からの視点取得の知覚は区別されていた。また、加害者からの視点取得の表明にくわえて、加害者は被害者の気持ちを正しく想像できていたかどうかを操作された(感情の一致の有無)。具体的には、加害者が被害者の感情をどう予測したかについて、明確な感情語を用いて表明した(e.g., “anger” vs “dishonor”)。この実験の結果、被視点取得の知覚は、他者からの視点取得の表明の有無と感情の一致の有無の交互作用効果によって説明されることが明らかとなった。すなわち、被害者の感情を正しく想像できなかつた加害者から視点取得の表明を受けた場合、同様の加害者から視点取得の表明を受けなかつた場合よりも、むしろ被視点取得の知覚が抑制されていた。そして、上記のように説明された被視点取得の知覚が、被害者による加害者の認知に影響していた。この結果から、視点取得能力が低いと判断された他者からの視点取得の表明は、むしろ被視点取得の知覚を抑制し、また被視点取得の知覚が他者への信頼や許しといったポジティブな態度を促進することが示唆された。

そして、Berndsen & Wenzel(2021)が操作した感情の一致の有無は、Goldstein et al.(2014)における他者の視点取得能力の評価に相当するものであったと考えられる。Goldstein et al.(2014)は、シナリオ上の立候補者が富裕層か中間層かという経済的背景によって、立候補者の視点取得能力の評価が影響されることを示した。すなわち、参加者は、立候補者の経済的背景という情報から、その立候補者は参加者の視点をうまく取れたかどうかを間接的に判断したと考えられる。一方で、Berndsen & Wenzel(2021)は、加害者が被害者の感情を正しく想像できたかどうかをフィードバックしていた。この操作は、加害者は被害者の視点をうまく取れたかどうかを、直接的にフィードバックしたものと解釈できる。したがって、Berndsen & Wenzel(2021)における感情の一致・不一致(i. e., fit vs less fit)と、Goldstein et al.(2014)における立候補者の経済的背景(i.e., Whelthy class va Middle class)は、直接的か間接的かの違いはあるものの、どちらも他者の視点取得能力の評価を操作するものだったと考えられる。

上記の議論を踏まえると、Goldstein et al.(2014)および Berndsen & Wenzel(2021)から、他者からの視点取得の表明について次のことが指摘できる。まず、Goldstein et al.(2014)は、他者からの視点取得の表明とその他者の視点能力の評価によって、他者へのポジティブな態度が影響されることを示した。一方で、Berndsen & Wenzel(2021)は、他者からの視点取得の表明とその他者の視点能力の評価によって、被視点取得の知覚の程度が説明されることを示した。そして、被視点取得の知覚と他者へのポジティブな態度(i.e., 加害者への信頼や許し)が正の関連を示すことを明らかにした。すなわち、Berndsen & Wenzel(2021)の結果は、Goldstein et al.(2014)の他者からの視点取得の表明とその他者の視点能力の評価によって、

他者へのポジティブな態度が影響されるという結果に、媒介変数として被視点取得の知覚を投入したものと解釈できる。したがって、これらの研究から(Berndsen & Wenzel, 2021; Goldstein et al., 2014), 他者からの視点取得の表明は、他者の視点取得の評価とともに、被視点取得の知覚を説明する要因であると考えられる。

### 1.2.3. 被視点取得の知覚の効果のメカニズム

Goldstein et al.(2014)では、被視点取得の知覚は、被共感の知覚と自他の重なる知覚を促進する直接的な効果をもつことが示された。ではなぜ、被視点取得の知覚が、被共感の知覚および自他の重なる知覚を促進するのだろうか。この点について Goldstein et al.(2014)は、つぎのように説明している。すなわち、人は自身が視点取得した際、そのターゲットに共感することを経験的に知っているためだという。Goldstein et al.(2014)が指摘するように、視点取得することが他者への共感を促進するのは、数多くの研究で繰り返し指摘されていることを考えれば、もし視点取得と共感の関連を意識したことがない人であっても、他者の視点を取ることで、その他者に共感をしたという経験自体は、誰しも持っているだろう。したがって、被視点取得の知覚が被共感の知覚を高める効果は、視点取得することが共感することを促進するという前提にしていると考えられる。また、被視点取得の知覚と自他の重なる知覚は、次のように説明されている。すなわち、自分自身に向けて視点取得をした他者は、同じ視点を取ったことによって、自分自身の経験を共有するため、自分自身に向けて視点取得をしなかった他者よりも、類似した人物であるという信念を誘発するためであるという。

### 1.3. 被視点取得研究の課題

ここまで、視点取得されることに関する研究を概観し、明らかになったことを整理してきた。本節 1.3. では、これまでの議論を踏まえて、被視点取得研究について3つの課題を指摘し、議論する。

#### 1.3.1. Goldstein et al.(2014)モデルの再検討

第一の課題は、Goldstein et al.(2014)の追試を行った研究が見当たらないことである。Goldstein et al.(2014)は、被視点取得の知覚を定義し、また視点取得される人に注目した最初の研究である。その意味で、Goldstein et al.(2014)の意義は非常に大きい。しかしながら、Goldstein et al.(2014)は、いくつかの問題をはらんでいると考えられる。

ひとつめの問題は、被視点取得の知覚と他者からの視点取得の表明が混同されている可能性である。Goldstein et al.(2014)は、他者からの視点取得の表明の内容を正しく理解したことをもって、被視点取得の知覚が成立したと捉えている。しかしながら、この操作的定義では、被視点取得者の内的な状態である被視点取得の知覚と、被視点取得者が受けた情報である他者からの視点取得の表明が区別できていない。この問題を解決したのは Berndsen & Wenzel(2021)であるが、Berndsen & Wenzel(2021)は加害者・被害者間の許しという比較的限定された状況における効果を検討している。この点では、自身の経験について他者に伝えた際に他者からの視点取得の表明を受けたかどうかを操作した Goldstein et al.(2014)は、より一般的な問題について検討した研究だといえるだろう。したがって、



Goldstein et al.(2014)が示したモデルを再度検討することは、被視点取得研究の発展に必要なことだと考えられる。

Goldstein et al.(2014)がはらむふたつめの問題は、方法論的な問題である。Goldstein et al.(2014)は、被共感の知覚を単一項目で測定している。すなわち、「あなたは共感されたと思いますか」という項目である。Goldstein et al.(2014)の定義する共感の概念を考えれば、この単一項目で被共感の知覚を適切に測定できているとは言い難い。また、この単一項目に回答した参加者が、何を「共感」と捉えて回答したのかも判断できない。

### 1.3.2. 感情的視点取得と認知的視点取得を区別した検討

被視点取得研究における第二の課題は、感情的視点取得と認知的視点取得を区別した検討がなされていないことである。すでに説明したように、被視点取得の知覚が被共感の知覚を高める効果は、視点取得することが共感することを促進するということが前提であると考えられる(第一章 1.2.3.参照)。この考えに従えば、被感情的視点取得の知覚と被認知的視点取得の知覚を区別して考えた場合、被共感の知覚に対して異なる効果を示す可能性がある。

この可能性は、(a)人は感情的視点取得と認知的視点取得を区別できると考えられること、そして(b)人は感情的視点取得をした場合にはそのターゲット人物への共感を経験するが、認知的視点取得をした場合にはターゲット人物への共感を経験しない可能性が高いことから指摘できる。以下、詳述する。まず、これまでの研究から、(a)人は感情的視点取得と認知的視点取得を区別できると考えられる。他者に感情的視点取得およ

び認知的視点取得をすることの効果について検討した研究では(Oswald, 1996), ターゲット人物とは無関係な事象(i.e., 刺激ビデオの撮影に関する技術的側面)に注目した統制条件よりも感情的視点取得をした条件では共感が促進された一方で, 認知的視点取得をした条件と統制条件で示された共感の強さに有意差はなかった。このことは, 実験的な操作によって, 人は感情的視点取得と認知的視点取得を使い分けることができ, それによる効果(i.e., 共感の喚起)が異なることを示している。

また, 日常的にも, 人は感情的視点取得と認知的視点取得を使い分けている可能性がある。たとえば, 代表的な誤信念課題であるサリーとアンの課題(Baron-Cohen, Leslie, & Frith, 1985)のように, 自分自身の知っていることではなく, 他者はどう考えるのかを予測する場合には, 他者視点でその他者の考えや知識に注目して想像する必要があるだろう。この場合にも, Oswald(1996)が示した結果と同様に, 他者の考えを想像した認知的視点取得によって, ターゲット人物への共感が生じるとは考えにくい。これらのことは, 人は他者の視点に立って考えるとき, その他者の思考に注目すべき状況では認知的視点取得を行い, 一方で, 他者の感情に注目すべき状況では感情的視点取得を行うことを示唆している。したがって, 人は感情的視点取得と認知的視点取得を状況によって使い分けており, それらが異なる帰結をもたらすことについても経験的に理解している可能性がある。そして, 視点取得することがターゲット人物への共感を促進すると経験的に知っているために, 被視点取得を知覚すると被共感を知覚することから(Goldstein et al., 2014), 被感情的視点取得の知覚と被認知的視点取得の知覚は, 被共感の知覚に対して異なる効果を示す可能性があると考えられる。すなわち, 感情的視点取得は共感を促進するが, 認知的視点取得は共感

を促進しないことから(Oswald, 1996), 被感情的視点取得の知覚は被共感の知覚を促進するが, 被認知的視点取得の知覚は被共感の知覚を促進しない可能性がある。しかしながら, 上記の可能性はいまだ検討されていない。

### 1.3.3. 被視点取得の知覚および他者の視点取得能力の評価に関する検討

第三の課題は, 被視点取得の知覚および他者の視点取得能力の評価を説明する要因の実証的検討がなされていないことである。Berndsen & Wenzel(2021)や Goldstein et al.(2014)の結果から, 他者からの視点取得の表明および, 他者の視点取得能力の評価によって, 被視点取得の知覚が説明されることが指摘された。そして, 被視点取得の知覚が生じるかどうかによって, 他者へのポジティブな態度が促進されるかどうかの影響されると考えられる。したがって, 被視点取得の知覚は, 他者との円滑な対人関係の構築に影響する要因のひとつであるといえる。それにも関わらず, 被視点取得の知覚については, 未検討の問題がある。

第一の課題は, 他者からの視点取得の表明と他者の視点取得能力の評価による交互作用効果が被視点取得の知覚を説明することを, 直接検討した研究が見当たらないことである。Berndsen & Wenzel(2021)は, 加害者からの視点取得の表明, および加害者が想像した被害者の感情の一致・不一致それぞれを操作し, これらの交互作用効果によって被視点取得の知覚が説明されることを指摘している。しかしながら, 他者の視点取得能力の評価を得点化し, 他者からの視点取得の表明とその得点との交互作用効果を検討した研究は見当たらない。被視点取得の知覚を「生じた」「生じなかった」の2択ではなく, どの程度知覚し

たかという量的な問題として捉えて検討していることを考えると、他者の視点取得能力の評価も同様に、量的な問題として捉え、検討すべきだと考えられる。

他者の視点取得能力の評価を量的な問題として検討すべきと考えられる理由のひとつに、他者の視点取得能力の評価を説明する要因の検討がなされていないことがあげられる。これが、被視点取得研究における第二の課題である。被視点取得の知覚を説明する要因のひとつである他者の視点取得能力の評価は、被視点取得研究において非常に重要な要因であるといえる。それにも関わらず、他者の視点取得能力の評価について実証的に示されたことは、相互作用相手の経済的背景によって影響されるということのみである(Goldstein et al., 2014)。しかしながら、人は他者の視点取得能力を評価する際に、さまざまな手がかりを用いていることだろう。その要因について検討することは、被視点取得研究の重要な課題だと考えられる。

また、他者の視点取得能力の評価を説明する要因として、個人差要因が考慮されていないことも、課題のひとつだろう。これまでの研究では、外的に与えられた情報(i.e., 他者の経済的背景や他者の想像した感情の一致・不一致)が他者の視点取得能力の評価に及ぼす影響は指摘されているものの、視点取得された人の個人差要因による説明は検討されていない。個人差要因を考慮することによって、他者からの視点取得の表明の受け手側に依存する要因によって他者の視点取得能力の評価を説明できる可能性があると考えられる。

#### 1.4. 本論文の目的

本論文の目的は、上記で提起した問題を想定し、他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果について検討することであった。これらの問題について検討するため、本論文では全8本の研究を行った。

第二章では、他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果について、Goldstein et al.(2014)の結果が再現されるかどうかを検討する。ただし、Goldstein et al.(2014)の実験6が、他者が視点取得したかどうかについての表明(以後、視点取得の表明とよぶ)およびその他者の経済的背景を操作した一方で、研究1では視点取得の表明および他者に伝達する内容(思考や感情の伝達あり vs 客観的事実のみ伝達)を操作する。また、実験場面において相互作用相手が誰であるか明かされないことに注目し、相互作用相手へのポジティブな態度の指標として、相互作用相手との関係構築を望む程度(関係構築意思)を従属変数に加えて検討する。また、研究1では、Goldstein et al.(2014)と同様に、被共感の知覚を1項目で測定する。これは、被共感の知覚の測定上の問題として指摘されたことであった。そこで、後続の研究にさきがけて、この問題を解決すべく、被共感の知覚尺度を作成する。

第三章では、Goldstein et al.(2014)および本論文におけるこれまでの研究の問題点を解決したうえで、感情的視点取得と認知的視点取得を区別した検討を行う。視点取得の表明が被共感の知覚を促進することに注目すると、感情的視点取得と認知的視点取得を区別した場合、それぞれの視点取得の表明(以後、それぞれ感情的視点取得の表明、認知的視点取得の表明という)が異なる効果を持つ可能性があった。この可能性は、被視点取得の知覚(Perceived perspective-taking)が被共感の知覚を促進するのは、視点取得が共感を促進すると

人が経験的に知っているためであるという Goldstein et al.(2014)の指摘から予測された。感情的視点取得は共感を促進するが、認知的視点取得は共感を促進しないことから(Oswald, 1996), 人は感情的視点取得をすることのみが共感を促進することを経験的に知っているとして予測される。したがって、共感を促進する感情的視点取得については、感情的視点取得の表明が被共感の知覚を促進すると考えられる一方で、共感を促進しない認知的視点取得については、認知的視点取得の表明があっても被共感の知覚は生じないと考えられる。そこで、感情的視点取得と認知的視点取得を区別し、それぞれの視点取得の表明の効果について検討する。

第四章では、ここまでの研究で得られたモデルについて、修正および発展を試みる。具体的には、以下の2つのプロセスに注目する。第一に、被視点取得の知覚を生じさせる要因の検討である。第一章 1. 2. 2. で述べた通り、被視点取得の知覚の程度は、他者からの視点取得の表明と、向けられた視点取得がうまくいっていたという評価(以後、他者の視点取得能力の評価という)によって説明されると考えられる。他者の視点取得能力の評価に影響する要因として、他者に関する情報(e.g., 経済的背景の一致・不一致や(Goldstein et al., 2014), 自身の喚起した感情と、他者が想像した感情の一致・不一致(Berndsen & Wenzel, 2021)による効果が検討されてきた。しかしながら、他者の視点取得能力の評価を測定し、その程度が他者からの視点取得の表明から被視点取得の知覚への効果の調整変数となることを実証した研究は見当たらない。そこで、本論文では、他者の視点取得能力の評価、および被視点取得の知覚をモデルに加え、他者からの視点取得の表明の効果のプロセスの検討を試みる。

そして、他者の視点取得能力の評価は、個人差変数によっても説明される可能性が指摘された。第一章 1.3. で議論したように、相互作用相手に関する情報が得られなくても他者からの視点取得の表明の効果が示されているのは、他者に関する情報が得られなかった場合には、何らかのほかの方法によって、他者の視点取得能力を評価していたと考えられる。本論文では、他者の視点取得能力を評価するための他の方法として、人一般の視点取得能力に関する信念を提案する。人一般の感情的視点取得能力信念は、特定の他者や自分自身についてではなく、人は一般的に、他者の視点にたって感情を想像できるかどうかについての信念である。すなわち、一般的な人についての視点取得能力の評価といえる。他者に関する情報が得られなかった場合には、この信念に基づいて、他者の視点取得能力を評価している可能性がある。

また、人一般の感情的視点取得能力信念を扱うことで、他者からの視点取得の表明の効果のプロセスについて、より詳細に検討できる可能性がある。すなわち、他者からの視点取得の表明や、他者に関する情報を受け取ったことの効果の個人差を説明できるかもしれない。人一般の感情的視点取得能力信念が強い人は、人一般の視点取得能力を高く評価していることになる。そのため、人一般の感情的視点取得能力信念が弱い人と比べて、他者からの視点取得の表明に敏感に反応する可能性がある。このように、人一般の感情的視点取得能力信念を扱うことで、他者からの視点取得の表明という同じ刺激を受け取った際の個人差を説明できる可能性がある。

そこで、本論文では、人一般の視点取得能力に関する信念という、新しい概念を提案し、その程度を測定する尺度を作成する。そして、提案した新しい概念を踏まえて、他者の視点取得能力の評価、および被視点取得の知覚を加えたモデルの検討を試みる。



## 第二章

先行研究で示された

被視点取得の知覚の効果の確認

## 2.1. 研究 1: 他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果の検討<sup>5</sup>

### (1) 目的

研究 1 では、Goldstein et al.(2014)が指摘した他者からの視点取得の表明の効果およびその効果のプロセスが再現されるのか検討する。第一章 1.2.2.で述べた通り、Goldstein et al.(2014)は、他者からの視点取得の表明がもつ効果について、3つのことを明らかにした。第一に、他者からの視点取得の表明は、その他者からの被共感の知覚、自他の重なるの知覚、およびその他者へのポジティブな態度を促進することであった。第二に、他者からの視点取得の表明がその他者へのポジティブな態度を促進する効果は、被共感の知覚および自他の重なるの知覚の促進によって媒介され、多重媒介モデルが示唆された。そして第三に、経済的背景が一致しない他者から金銭的な問題において視点取得の表明があった場合など、視点取得能力が低いと評価された他者からの視点取得の表明においては、他者からの視点取得の表明の効果における多重媒介モデルが支持されないことが示唆された。研究 1 では、これらの効果が再現されるのかどうか、また再現されなかった場合、他者からの視点取得の表明が他者へのポジティブな態度に及ぼす効果はどのようなプロセスをもつのか検討する。

研究 1 は、明治学院大学心理学部倫理委員会の承認を得て実施された(承認番号 2017001)。

---

<sup>5</sup>研究 1 は、鈴木・田中(2020)をもとに修正・加筆を行い執筆した。

## (2) 方法

### 参加者と実験デザイン

首都圏にある大学に通う学部生および大学院生 54 人(男性 12 人 女性 42 人)であった。

平均年齢は 22.28 歳( $SD=2.59$  歳)であった。

実験デザインは、2(視点取得の表明：表明あり条件 vs 表明なし条件) $\times$ 2(感情と思考の伝達：伝達あり条件 vs 伝達なし条件)の二要因参加者間計画であった。

### 手続き

実験には、1 名から 5 名まで同時に参加した。参加者は、コミュニケーションについての調査と説明され、別室で待機する参加者とランダムにペアを作ると教示された。ペアを作成するためにくじを引いてもらったあと、ペアになった別室の参加者(以後、パートナーと呼ぶ)に読んでもらうためのポジティブな経験に関するエッセイを書くよう求めた。しかし実際には別室に参加者はおらず、実験者が架空のフィードバックを行うことで視点取得の表明の操作を行った。具体的な操作については後述する。また、エッセイ課題では感情と思考の伝達の有無が操作された。伝達あり条件の参加者は、記述してもらう出来事について、その経験における感情および考えを中心に記述するよう教示された。一方で、伝達なし条件の参加者は、感じたことや考えたことには一切触れずに、日時や場所、その他の具体的な情報について、その出来事を詳細に記述するよう教示された。エッセイ課題は 5 分間であった。

エッセイ課題のあと、参加者は被視点取得欲求および記述した経験のポジティブさ(嬉しかった程度・楽しかった程度各 1 項目)に回答した。その後、参加者が記述して文章をパートナーに読んでもらおうと説明し、5 分間の待機時間を設けた。待機時間中、参加者は実験者の知人の予備調査だと説明された迷路課題に取り組んだ。これは、待機時間中の状況を統制するために行われた。

待機時間のあと、参加者はパートナーがエッセイを読んだ際に視点取得したか否かについて、視点取得の表明を操作するための架空のフィードバックを受けた。フィードバックを確認したあと、参加者はパートナーからの共感の知覚、パートナーとの自他の重なる知覚、パートナーへの好感およびパートナーとの関係構築意思や、視点取得の表明の操作チェック項目、参加者の年齢および性別について回答した。最後にディブリーフィングが行われた。

### 視点取得の表明の操作

視点取得の表明は、参加者が記述したエッセイを読んだパートナーの反応をフィードバックすることで操作された。フィードバックは、パートナーが回答した質問紙として参加者に配布された。ただし、実際には実験者が作成した架空のものであった。この架空の質問紙には、参加者のくじ番号、パートナーが参加者の記述した文章を読んだときに視点取得した程度、および参加者の性別にあわせてパートナーの性別が記載されていた。

パートナーが参加者の視点を取得した程度は 3 項目 7 段階評定で構成された。具体的には、(a)パートナーが参加者の記述したエッセイを読む際に、心の中で参加者の立場に立

ったと思う程度、(b)記述された出来事を実際に経験するかのように想像したと思う程度、および(c)参加者がどのように感じたかを想像したと思う程度が測定された。これらの項目は、数値が大きいほど視点取得したと解釈できるようになっており、表明あり条件では、平均 6(順に(a)7, (b)5, (c)6)になるよう設定された。一方で、表明なし条件では、平均 2(順に(a)1, (b)3, (c)2)になるよう設定された。

項目は、Davis et al.(1996)における視点取得を促進する教示文を参考に作成された。具体的には、”Try to take [his/her] perspective in the interview, imagining how [s/he] is feeling about what is happening”という教示文から項目 1 および項目 3 を作成し、また”In your mind’s eye, trade places with Lisa/Steve and watch the tape as if the events were actually happening to you”という教示文から項目 2 を作成した<sup>6</sup>。

### 被視点取得欲求

エッセイ課題後の質問紙で測定された。記述してもらったエッセイについて、パートナーに心の中で参加者の立場に立って読んでもらいたい程度、パートナー自身が実際にその出来事を経験したかのように想像して読んでもらいたい程度、および記述した出来事を参加者自身が経験した際にどう感じたかをパートナーに想像して読んでもらいたい程度の 3 項目 7 段階評定(1:全くあてはまらないー7:非常にあてはまる)で測定した。項目は、

---

<sup>6</sup>Davis et al.(1996)は、Lisa ないし Steve へのインタビュー映像を見る際に、視点取得するように促す教示を行った。教示文中に登場する Lisa/Steve, [his/her], [s/he]は、インタビュー映像の登場人物を指す。

Goldstein et al.(2014)における被視点取得の知覚の定義(i.e., believing that another individual is taking one's perspective)から，他者からの視点取得の表明の操作のために Davis et al.(1996)を参考にして作成された3項目それぞれについて，視点取得をしてもらいたい程度として解釈できるように変更した。

### 従属変数

従属変数は，パートナーの反応のフィードバック後に質問紙を用いて測定された。

**被共感の知覚** 参加者が記述した文章をパートナーが読み，パートナーは参加者にどの程度共感したと思うかについて，1項目7段階評定(1:全く共感しなかったー7:非常に共感した)で回答を求めた。本項目は Goldstein et al.(2014)を和訳して作成された。

**自他の重なり**の知覚 参加者がパートナーとの自己概念の重なり(Self-other Overlap)をどの程度知覚しているかについて，似ている程度，親密さを感じる程度，パートナーの持っているパートナー自身の自己イメージと参加者の自己イメージが似ている程度，身近な存在である程度，およびパートナーとの絆があると感じる程度の5項目7段階評定(1:全くあてはまらないー7:非常にあてはまる)で回答を求めた。これらの項目は，Goldstein et al.(2014)で自他の重なりを測定するために用いられた8項目を和訳し，その中から日本語として意味を解釈しにくい3項目を排除して作成された。加えて，Goldstein et al.(2014)と同様に，自己を表現する円と他者を表現する円について，その重なる程度によって知覚された自他の重なりを測定するIOS尺度(Aron, Aron & Smollan, 1992)を1項目7段階評定で設定した。

**好感** 参加者がパートナーに対して、どの程度好感を抱いているかについて、1項目7段階評定(1:全く好感を抱いていない—7:非常に好感を抱いている)で回答を求めた。本項目は、Goldstein et al.(2014)で用いられた他者への好感を測定する1項目を和訳して作成された。

**関係構築意思** 参加者がパートナーとの関係を構築したいと思う程度について、パートナーに話をまた聞いてもらいたい程度、パートナーと友達になりたい程度、およびパートナーと実際に会いたい程度の3項目7段階評定(1:全くあてはまらない—7:非常に当てはまる)で回答を求めた。これらの項目は、関係構築意思の定義(i.e., 初対面の他者との相互作用のあと、その他者と友人になり、交流を持ちたいと思うこと)から、その程度を測定するために考案、作成された。

### 操作チェック項目と統制変数

感情や思考の伝達の有無についての操作チェック項目として、記述課題において感情および思考についての記述がどの程度であったか回答を求めた。感情および思考それぞれ1項目7段階評定(1:記述していない—7:記述した)であった。

視点取得の有無についての操作チェック項目として、フィードバック確認後の質問紙で被視点取得の知覚の程度について回答を求めた。参加者が記述した文章を読んだときのパートナーが、心の中で参加者の立場に立ったと思う程度、パートナー自身が実際にその出来事を経験したかのように想像したと思う程度、および記述した出来事を参加者自身が経

験した際にどう感じたかを想像したと思う程度の3項目7段階評定(1:全くあてはまらない～7:非常にあてはまる)であった。

統制変数として、記述内容のポジティブさの評価を回答してもらった。これは、記述課題における記述内容がよりポジティブな経験であるほど、その経験を思い出したことによって参加者にポジティブ感情が生じ、その感情がパートナーの評価に影響する可能性が考えられたため採用された。記述課題の際、楽しかったことや嬉しかったことを思い出して記述するよう教示したことに合わせて、記述してもらった経験の嬉しかった程度および楽しかった程度についてそれぞれ1項目7段階評定(1:全くあてはまらない～7:非常にあてはまる)で測定した。

### (3) 結果

#### 操作チェック

記述課題における教示による操作について確認するため、記述してもらったエッセイに参加者自身の感情や思考についての表現が含まれているかどうかを、すべての参加者の記述文を読んで確認した。その結果、感情や思考の伝達なし条件では、それらの表現を含む記述文は見当たらず、感情や思考の伝達あり条件では、それらの表現を一切含まない記述文は見当たらなかった。したがって、操作はうまくいっていたと判断された。くわえて、記述課題で感じたことおよび考えたことをどの程度記述したかについてたずねた2項目( $r = .73, t(52) = 7.71, p < .001$ )の項目平均値を従属変数として、2(視点取得の表明)×2(感情と思考の伝達)の2要因参加者間分散分析を行った。その結果、感情と思考の伝達の有無の主



効果が有意であり( $F(1, 49) = 215.41, p < .001, \eta_p^2 = .81$ ), 伝達あり条件( $M = 5.77, SD = 1.97$ )は伝達なし条件( $M = 1.33, SD = 1.92$ )よりも記述課題における感情および思考についての記述量が多かった。視点取得の表明の主効果( $F(1, 49) = 0.15, p = .70, \eta_p^2 = .00$ )および交互作用効果( $F(1, 49) = 0.47, p = .50, \eta_p^2 = .01$ )に有意な差はみられなかった。

つぎに、視点取得の表明の操作について確認するため、被視点取得の知覚の程度について検討した。まず、被視点取得の知覚の程度の3項目( $\alpha = .91$ )の項目平均を被視点取得の知覚得点とし、その得点が尺度の midpoint(4)を超えているか否かを確認した。具体的には、表明なし条件では被視点取得の知覚得点が尺度の最小値(1)から midpoint(4)までの間であることを、表明あり条件では midpoint(4)を超えていることを基準とした。その結果、表明なし条件ではすべての参加者が基準を満たし、表明あり条件では基準に満たない参加者が1名であった。基準に満たなかった参加者は本操作チェックの3項目において7段階評定における5以上の回答が1項目もみられなかったため、うまく操作できていなかったと判断し、これ以降の分析から除外した。その結果、分析対象者は53名(男性11名 女性42名)となった。分析対象者の平均年齢は22.30歳( $SD = 2.61$ 歳)であった。また、分析対象者となった53名について、被視点取得の知覚得点を従属変数とした2(視点取得の表明)×2(感情と思考の伝達の有無)の2要因参加者間分散分析を行った。その結果、視点取得の表明の主効果が有意であり、表明あり条件( $M = 5.62, SD = 0.48$ )は、表明なし条件( $M = 1.92, SD = 0.75$ )よりも強くパートナーからの視点取得を知覚していた( $F(1, 49) = 421.94, p < .001, \eta_p^2 = .90$ )。感情と思考の伝達の有無の主効果( $F(1, 49) = 0.41, p = .53, \eta_p^2 = .01$ )と交互作用効果( $F(1, 49) = 0.12, p = .73, \eta_p^2 = .00$ )は有意でなかった。

## 視点取得の表明の効果の検討

視点取得の表明が被共感の知覚、自他の重なるの知覚、他者への好感および関係構築意思を高めるのか、またその効果を感情と思考の伝達の有無および被視点取得欲求が調整するのか検討するため、重回帰分析を行った。視点取得の表明および感情と思考の伝達の有無はダミー変数(それぞれ、あり = 1 なし = 0)に変換され、被視点取得欲求は、3 項目の項目平均( $\alpha = .65$ )をその得点とした。すべての変数は標準化された<sup>7</sup>。分析には、統制変数として性別(女性 = 0 男性 = 1)、記述した経験の嬉しかった程度および楽しかった程度が、説明変数として視点取得の表明、感情と思考の伝達の有無、被視点取得欲求得点、およびこれらの説明変数のすべての組み合わせによる交互作用項が投入された。

視点取得の表明および感情と思考の伝達の有無による条件ごとの従属変数(被共感の知覚・自他の重なるの知覚・他者への好感・関係構築意思)の平均値および標準偏差を Table 2.1.1.1.に示した。

---

<sup>7</sup> 視点取得の表明および感情と思考の伝達の有無をダミー変数化し、かつ標準化したのは、重回帰分析にこれらのダミー変数から作成された交互作用項を投入したためであった。交互作用項を作成する際に 0, 1 でコーディングされた 2 値変数をそのまま用いた場合、多重共線性が生じやすい。これを避けるため、ダミー変数は標準化された。

Table 2.1.1.

条件ごとの被共感の知覚, 自他の重なるの知覚, 好感および関係構築意思の平均値(*SD*)

視点取得の表明	あり		なし	
	あり	なし	あり	なし
感情と思考の伝達				
被共感の知覚	5.00 (0.78)	5.15 (0.77)	2.08 (0.62)	2.00 (1.07)
自他の重なるの知覚	3.24 (0.87)	3.73 (1.06)	1.60 (0.55)	2.50 (0.64)
好感	5.23 (0.80)	4.69 (1.38)	2.85 (1.17)	3.21 (1.57)
関係構築意思	4.03 (1.32)	3.56 (1.48)	2.56 (1.36)	2.64 (1.37)

**被共感の知覚** パートナーからの共感を知覚した程度を測定した 1 項目の得点を被共感の知覚得点として、その得点を従属変数とした重回帰分析を行った。説明変数は、先述の重回帰分析と同様であった。すなわち、すべての変数が標準化されたうえで、統制変数として性別(女性 = 0 男性 = 1)、記述した経験の嬉しかった程度および楽しかった程度が、説明変数として視点取得の表明(表明あり = 1, 表明なし = 0)、感情と思考の伝達の有無(伝達あり = 1, 伝達なし = 0)、被視点取得欲求得点、およびこれらの説明変数のすべての組み合わせによる交互作用項が投入された<sup>8</sup>。その結果、視点取得の表明のみに有意な偏回帰係数がみられた( $\beta = 0.88, t = 12.22, p < .001$ )。表明あり条件( $M = 5.08, SD = 0.78$ )は、表明なし条件( $M = 2.04, SD = 0.88$ )よりも被共感の知覚得点が高かった。決定係数は有意であった( $R^2 = .79, F(10,42) = 15.91, p < .001$ )。また、多重共線性はみられなかった( $VIFs < 1.58$ )。重回帰分析の結果を Table 2.1.2. に示した。

**自他の重なるの知覚** パートナーとの自他の重なるの知覚の程度を測定した 6 項目( $\alpha = .88$ )の項目平均点を自他の重なるの知覚得点として、その得点を従属変数とした重回帰分析を行った。説明変数は、先述の被共感の知覚得点を目的変数とした重回帰分析と同様であった。その結果、視点取得の表明の標準偏回帰係数が有意であった( $\beta = 0.73, t = 6.93, p < .001$ )。表明あり条件( $M = 3.49, SD = 1.00$ )は、表明なし条件( $M = 1.83, SD = 0.64$ )よりも自他の重なるの知覚得点が高かった。決定係数は有意であった( $R^2 = .56, F(10,42) = 5.26, p$

---

<sup>8</sup> ダミー変数が標準化されたのは、交互作用項の投入による多重共線性を避けるためであった。

< .001)。また、多重共線性はみられなかった(VIFs < 1.58)。重回帰分析の結果を Table 2.1.2. に示した。

**好感** パートナーへの好感を測定した 1 項目の得点を好感得点として、その得点を従属変数とした重回帰分析を行った。説明変数は、先述の被共感の知覚得点を目的変数とした重回帰分析と同様であった。その結果、記述内容の評価「楽しかった」( $\beta = 0.42, t = 3.51, p = .001$ )、視点取得の表明( $\beta = 0.65, t = 6.15, p < .001$ )および被視点取得欲求( $\beta = 0.29, t = 2.22, p = .032$ )に、有意な標準偏回帰係数がみられた。表明あり条件( $M = 4.96, SD = 1.16$ )は、表明なし条件( $M = 3.04, SD = 1.40$ )よりも好感得点が高かった。また、被視点取得欲求得点が高いほど、好感得点は高かった。決定係数は有意であった( $R^2 = .56, F(10,42) = 5.25, p < .001$ )。また、多重共線性はみられなかった(VIFs < 1.58)。重回帰分析の結果を Table 2.1.2. に示した。

**関係構築意思** パートナーとの関係構築意思を測定した 3 項目( $\alpha = .85$ )の項目平均を関係構築意思得点として、その得点を従属変数とした重回帰分析を行った。説明変数は、先述の被共感の知覚得点を目的変数とした重回帰分析と同様であった。その結果、視点取得の表明の標準偏回帰係数が有意であった( $\beta = 0.42, t = 3.20, p = .003$ )。表明あり条件( $M = 3.79, SD = 1.42$ )は、被表明なし条件( $M = 2.60, SD = 1.36$ )よりも関係構築意思得点が高かった。決定係数は有意傾向であった( $R^2 = .32, F(10,42) = 1.94, p = .066$ )。また、多重共線性はみられなかった(VIFs < 1.58)。重回帰分析の結果を Table 2.1.2. に示した。

Table 2.1.2.

被共感の知覚, 自他の重なるの知覚, パートナーへの好感,

	被共感の知覚			自他の重なるの知覚		
	$\beta$	SE	t値	$\beta$	SE	t値
性別	-0.03	0.08	-0.32	0.12	0.11	1.04
記述評価(嬉しかった)	0.02	0.08	0.22	-0.05	0.11	-0.44
記述評価(楽しかった)	0.05	0.08	0.64	0.02	0.12	0.19
感情と思考の伝達の有無(A)	-0.01	0.07	-0.16	-0.20	0.10	-1.94 †
視点取得の表明(B)	0.88	0.07	12.22 ***	0.73	0.11	6.93 ***
被視点取得欲求(C)	0.10	0.09	1.11	0.10	0.13	0.75
交互作用項A×B	-0.04	0.07	-0.52	-0.01	0.11	-0.11
交互作用項A×C	0.10	0.08	1.35	-0.07	0.11	-0.64
交互作用項B×C	0.06	0.08	0.69	-0.05	0.12	-0.39
交互作用項A×B×C	-0.02	0.08	-0.27	0.02	0.12	0.18
	好感			関係構築意思		
	$\beta$	SE	t値	$\beta$	SE	t値
性別	-0.07	0.11	-0.66	-0.09	0.14	-0.66
記述評価(嬉しかった)	-0.01	0.11	-0.07	0.05	0.14	0.39
記述評価(楽しかった)	0.42	0.12	3.51 **	0.17	0.15	1.15
感情と思考の伝達の有無(A)	0.00	0.10	0.03	0.07	0.13	0.56
視点取得の表明(B)	0.65	0.11	6.15 ***	0.42	0.13	3.20 **
被視点取得欲求(C)	0.29	0.13	2.22 *	0.27	0.16	1.69 †
交互作用項A×B	0.07	0.11	0.68	0.04	0.13	0.29
交互作用項A×C	0.17	0.11	1.54	-0.24	0.14	-1.74 †
交互作用項B×C	-0.00	0.12	-0.03	0.03	0.15	0.21
交互作用項A×B×C	-0.06	0.12	-0.56	0.18	0.14	1.27

Note : \*\*\*  $p < .001$  \*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$  †  $p < .10$

性別および記述評価の2項目は, 統制変数として投入された。

交互作用項は, 単独の要因に割り当てた記号によって示した。

## 他者からの視点取得の表明が対人認知に影響するプロセスの検討

他者からの視点取得の表明が対人認知に影響するプロセスの検討にさきがけ、被共感の知覚、自他の重なる知覚、好感および関係構築意思それぞれの得点間の関連を検討した。相関分析の結果、すべての得点間に有意な相関がみられた( $r_s > .42, p_s < .001$ )。相関分析の結果を Table 2.1.3. に示した。

相関分析の結果から変数間の関連が確認されたため、視点取得の表明が他者への好感および関係構築意思に影響するプロセスについて検討する媒介分析を行った。この際、分析に投入されたすべての変数は標準化された。したがって、分析では標準化係数が算出された。検討されたモデルは、視点取得の表明が他者への好感および関係構築意思に与える影響が被共感の知覚および自他の重なる知覚に媒介される多重媒介モデルであった(Figure 2.1.1.)。また、先述の重回帰分析では、すべての従属変数において感情と思考の伝達の有無および被視点取得欲求に視点取得の表明との有意な交互作用効果はなく、視点取得の表明の効果を調整する効果がみられなかった。このことから、媒介分析では独立変数として視点取得の表明のみを採用した。

Table 2.1.3.  
被共感の知覚, 自他の重なり, 好感および関係構築意思の相関行列

	被共感の知覚	自他の重なりの知覚	好感
自他の重なりの知覚	.76***	—	—
好感	.65***	.67***	—
関係構築意思	.42***	.57***	.45***

Note: \*\*\*  $p < .001$



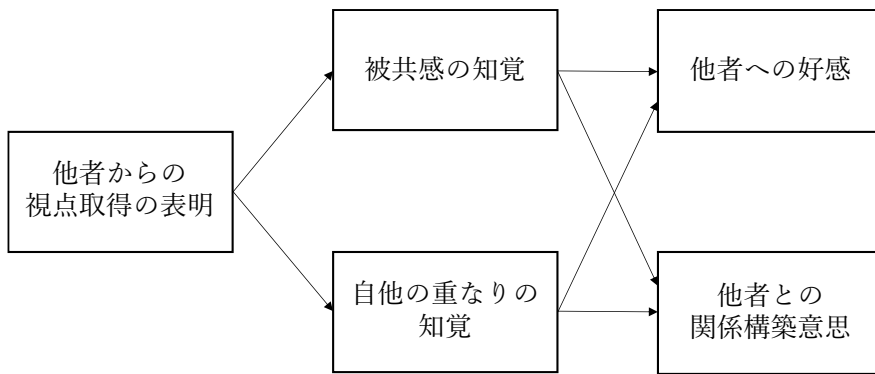


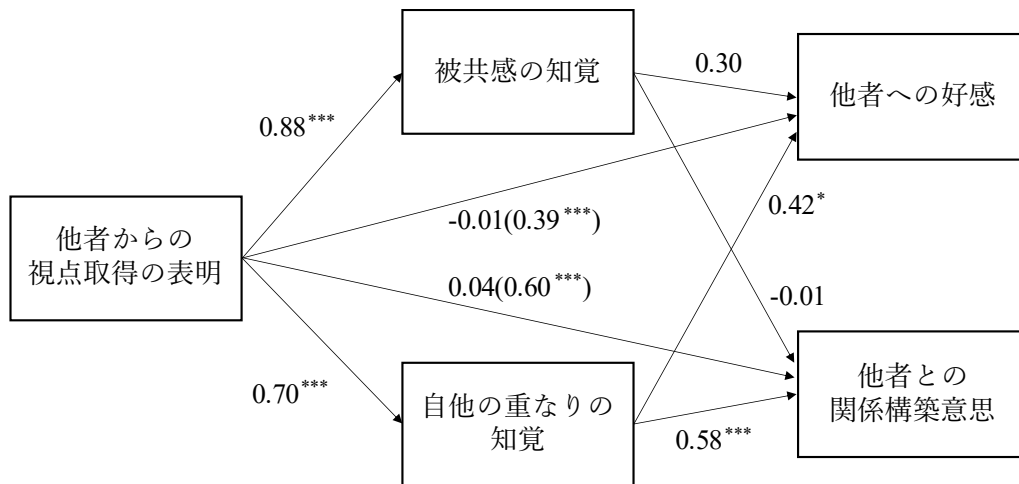
Figure 2.1.1. 被視点取得の知覚が他者へのポジティブな評価を促進するプロセスの仮説

モデル。

まず、視点取得の表明から好感得点および関係構築意思得点への直接効果のパスを検討した。その結果、視点取得の表明から好感得点および関係構築意思得点へのパスは共に有意であった(順に  $\beta = 0.60, p < .001$  ;  $\beta = 0.39, p < .001$ )。次に、媒介変数として被共感の知覚得点および自他の重なるの知覚得点を投入して、視点取得の表明が好感得点および関係構築意思得点に及ぼす影響を検討した。その結果、視点取得の表明から被共感の知覚得点へのパスおよび自他の重なるの知覚得点へのパスは有意であった(順に  $\beta_1 = 0.88, p < .001$  ;  $\beta_2 = 0.70, p < .001$ )<sup>9</sup>。自他の重なるの知覚得点から好感得点および関係構築意思得点へのパスは有意であったものの(順に  $\beta_5 = 0.42, p = .017$  ;  $\beta_6 = 0.58, p = .002$ )、被共感の知覚得点から好感得点および関係構築意思得点へのパスは有意でなかった(順に  $\beta_3 = 0.30, p = .195$  ;  $\beta_4 = -0.01, p = .978$ )。そして、視点取得の表明から好感得点および関係構築意思得点への直接効果のパスは共に有意でなくなった(順に  $\beta = -0.01, p = .969$  ;  $\beta = 0.04, p = .828$ )。このことから、完全媒介モデルであることが示された。媒介分析の結果を Figure 2.1.2. に示した。そして、好感得点および関係構築意思得点のどちらについても被共感の知覚得点による間接効果は有意でなく(好感得点, 関係構築意思得点の順に  $\beta_1 \times \beta_3 = 0.27, p = .211, 95\%IC[-0.13, 0.69]$  ;  $\beta_1 \times \beta_4 = -0.01, p = .978, 95\%IC[-0.37, 0.46]$ )、自他の重なるの知覚得点による間接効果のみ有意であった(好感得点, 関係構築意思得点の順に  $\beta_2 \times \beta_5 = 0.29, p = .019, 95\%IC[0.08, 0.56]$  ;  $\beta_2 \times \beta_6 = 0.41, p = .006, 95\%IC[0.14, 0.72]$ )。

---

<sup>9</sup> 後述した間接効果の検討にむけて、標準化係数  $\beta$  に添え字をつけた。間接効果についての記述では、各標準化係数の添え字を参照されたい。なお、研究 2 におけるこれ以降の分析結果において、間接効果を検討する標準化係数には通し番号での添え字をつけた。



Note: \*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Figure 2.1.2. 視点取得の表明が他者へのポジティブな評価を促進するプロセスについての多重媒介分析(括弧内は媒介変数投入前の直接効果)。

相関分析の結果(Table 2.1.3.)では、すべての変数間に有意な関連がみられた。それにもかかわらず、媒介分析では被共感の知覚得点から好感得点および関係構築意思得点へのパスが有意でなかった。このことから、媒介分析に用いられた変数間には、何らかの疑似相関がみられている可能性が指摘された。そこで、先述の媒介モデル(Figure 2.1.2.)を分割して、それぞれの関連を検討した。

まず、視点取得の表明、被共感の知覚得点および自他の重なる知覚得点の3変数について、視点取得の表明が自他の重なる知覚得点を高める効果は、被共感の知覚得点によって媒介されている可能性を検討した。そこで、視点取得の表明を独立変数、自他の重なり得点を従属変数、そして被共感の知覚得点を媒介変数とした媒介分析を行った。視点取得の表明から自他の重なる知覚得点への直接効果を検討したところ、有意なパスが示された( $\beta = 0.70, p < .001$ )。媒介変数として被共感の知覚得点を投入したところ、視点取得の表明から被共感の知覚得点へのパスは有意であり( $\beta_7 = 0.88, p < .001$ )、被共感の知覚得点から自他の重なる知覚得点へのパスは有意であった( $\beta_8 = 0.61, p = .002$ )。そして、視点取得の表明から自他の重なり得点への直接効果のパスは有意でなくなった( $\beta = 0.17, p = .348$ )。このことから、本モデルは完全媒介モデルであることが示された。なお、間接効果は有意であった( $\beta_7 \times \beta_8 = 0.53, p = .002, 95\% \text{IC}[0.20, 0.88]$ )。

次に、自他の重なる知覚得点、好感得点および関係構築意思得点の3変数それぞれにおける偏相関分析を行った。その結果、自他の重なる知覚得点を統制変数とした際の好感得点と関係構築意思得点に有意な偏相関はみられなかった( $pr = .11, t(50) = 0.79, p = .500$ )。好感得点を統制変数とした際の自他の重なる知覚得点と関係構築意思得点、関係構築意

思得点を統制変数とした際の自他の重なるの知覚得点と好感得点にはそれぞれ有意な正の関連がみられた(順に  $pr=.40, t(50)=3.09, p=.003$  ;  $pr=.57, t(50)=4.90, p<.001$ )。

これらの媒介分析および偏相関分析の結果から、他者からの視点取得の表明によって被共感の知覚得点が高まり、それによって他者との自他の重なり得点が高くなること、そしてその結果として好感得点および関係構築意思得点が促進されると考えられた。そこで、この仮説モデルを想定しパス解析を行った。その結果、視点取得の表明から被共感の知覚得点へのパスは有意であった( $\beta = 0.88, p < .001$ )。次に、被共感の知覚得点から自他の重なるの知覚得点へのパスは有意であった( $\beta = 0.76, p < .001$ )。最後に、自他の重なるの知覚得点から好感得点および関係構築意思得点へのパスはともに有意であった(順に  $\beta = 0.67, p < .001$  ;  $\beta = 0.57, p < .001$ )。この結果から、表明あり条件は、表明なし条件よりもパートナーからの共感をより高く知覚し、高い被共感の知覚によりパートナーとの自他の重なりが促進され、自他の重なるの知覚が促進されたことによってパートナーへの好感およびパートナーとの関係構築意思が高く評価されていたことが示された。モデルの適合度指標を確認したところ、本モデルは十分にデータと適合していたと判断された( $\chi^2(5) = 5.85, p = .32$ ;  $CFI = .995$ ;  $RMSEA = .057$ ;  $SRMR = .047$ )。パス解析の結果を Figure 2.1.3. に示した。

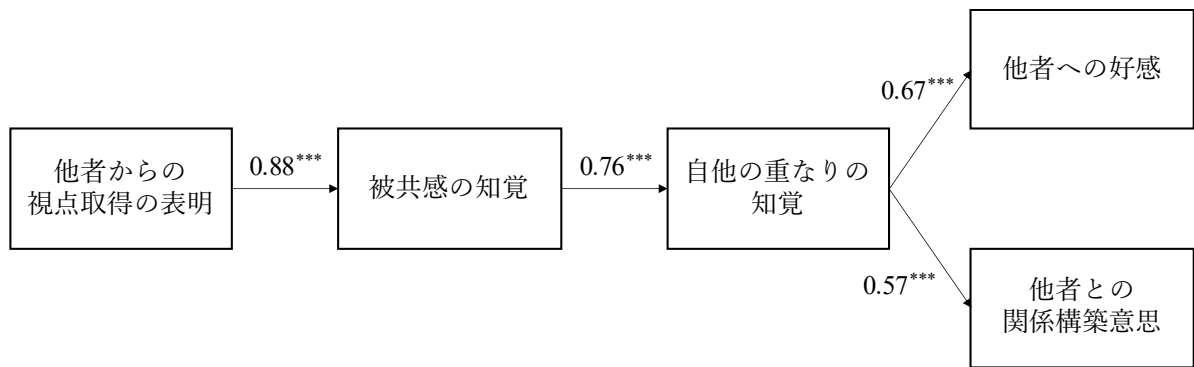


Figure 2.1.3. 視点取得の表明が他者へのポジティブな評価を促進するプロセスについて

のパス解析の結果。すべてのパスが 0.1%水準で有意であった(\*\* $p < .001$ )。

#### (4) 考察

研究1では、他者からの視点取得の表明が被共感の知覚、自他の重なる知覚、他者への好感および他者との関係構築意思に及ぼす効果を検討した。その際、視点取得される前のコミュニケーションにおいて、感情と思考の伝達をしていたかどうか、および視点取得されたいという欲求が先述の視点取得されることがもつ効果を調整するかどうかを検討した。くわえて、被視点取得の知覚が他者への好感や関係構築意思を高める効果は、被共感の知覚および自他の重なる知覚に媒介されるのかどうかを検討した。

まず、他者に視点取得されたことをフィードバックされた表明あり条件は、視点取得されなかったことをフィードバックされた表明なし条件よりも、被共感の知覚得点、自他の重なる知覚得点、好感得点および関係構築意思得点すべてを高く評価していた。このことから、他者からの視点取得の表明が、他者からの共感や他者との自己概念の重なりを高く知覚させ、また他者へのポジティブな評価を高めることが示唆された。したがって、Goldstein et al.(2014)と同様の結果が得られた。また、重回帰分析において示された上記の視点取得の表明の効果は、感情と思考の伝達の有無および被視点取得欲求の効果を統制した状態で示された。このことは、他者に伝達する内容に自身の感情と思考が含まれているかどうか、および視点取得されたいという欲求の程度に関わらず、視点取得の表明は他者からの共感の知覚、他者との自他の重なる知覚、他者へのポジティブな態度を促進することを示唆していると考えられた。

また、他者からの視点取得の表明が対人認知に影響するプロセスについて媒介分析によって検討した結果、Goldstein et al.(2014)と同様の変数間の関係性はみられず、異なるプロセスが示唆された。具体的には、視点取得されることが被共感の知覚を高め、それによって自他の重なる知覚が高まり、その結果として他者への好感や関係構築意思が高まるというモデルが示された。



## 2.2. 研究 2: 被共感の知覚と自他の重なる知覚の関連の検討<sup>10</sup>

### (1) 目的

研究 2 では、被共感の知覚が自他の重なる知覚を促進するという現象が実際に生じるのかどうかを確認した。

研究 1 では、Goldstein et al.(2014)の示した結果が再現されるかどうかを検討した。その結果、他者からの視点取得の表明が被共感の知覚、自他の重なる知覚、および他者へのポジティブな態度に及ぼす効果は再現された。しかしながら、他者からの視点取得の表明の効果のプロセスについては、Goldstein et al.(2014)とは異なるモデルが示された(Figure 2.1.3. 参照)。

研究 1 で示されたモデル(Figure 2.1.3.参照)では、他者からの視点取得の表明が自他の重なる知覚を促進する効果は、被共感の知覚に完全媒介されていた。すなわち、自他の重なる知覚を促進するのは、被共感の知覚のみであることが示唆された。しかしながら、被共感の知覚と自他の重なる知覚の関連について、次の問題があった。すなわち、被共感の知覚が自他の重なる知覚を促進するという因果関係について、実証できていない点である。まず、Goldstein et al.(2014)において、被共感の知覚と自他の重なる知覚には関連が見られていない。一方で、被共感の知覚と自他の重なる知覚に正の関連がみられるという報告もある(Kimmes, 2013)。しかしながら、Kimmes(2013)は被共感の知覚と自他の

---

<sup>10</sup> 研究 2 は、鈴木・坂本(2021)をもとに修正・加筆を行い執筆した。

重なる知覚の関連を指摘するまでにとどまっており、被共感の知覚が自他の重なる知覚を促進するという因果関係については言及できていない。したがって、研究1で示されたモデルにおける、被共感の知覚が自他の重なる知覚を促進するという因果関連を支持する根拠は乏しいと言わざるを得ない。

そこで研究2では、被共感の知覚が自他の重なる知覚を促進するという現象の存在を確認することを目的とし、他者に共感された際に個人内で生じた変化について検討を行った。具体的には、他者に共感された経験(以後、被共感経験とよぶ)を思い出してもらい、その際の認知および感情に関する内的な変化について回答してもらった。また、被共感の知覚の効果については、自他の重なる知覚を促進する効果が実証されていないことをはじめとして、いまだ十分な知見が蓄積されているとは言い難い。そこで、被共感の知覚が自他の重なる知覚を促進することの確認にくわえて、他者に共感されることの効果について資料的知見を得ることを目的とした。

被共感の知覚についての資料的知見を得ることに関しては、主に2つの可能性に注目した。第一に、被共感の知覚が他者についての知識を増加させる可能性である。他者に共感されたことと知覚することは、他者が自身と同じ感情を経験していると思うことである。被共感の知覚が生じたとき、すわなち他者に共感されたと思ったとき、人はその他者についていくつかの情報を得ることができると考えられる。たとえば、ある経験について他者に話をし、共感してもらえたとき、その他者は自分自身と同じように感じてくれた人になる。そのため、人はその他者を同じような感じ方や考え方をする人であると考え、その他者の

感じ方や考え方を知る可能性がある。そこで、第一の被共感の知覚に関する資料的知見として、被共感経験における他者の情報量の変化に注目した。

第二に、被共感の知覚によって生じるポジティブな変化は認知のみならず、感情まで表れる可能性である。研究1で扱った自他の重なる知覚は、他者の類似性や関係性についてどう考えるかを指す概念である。したがって、認知的な要素であるといえる(Goldstein et al., 2014)。このような認知的な要素への影響にくわえて、感情的な要素への影響も生じる可能性がある。たとえば、対人ストレスを身近な他者に相談する過程について検討した高橋(2013)は、知覚された相談相手の反応として、共感・受容因子を見出している。この因子は、「痛みを分かち合ってくれた」、「なぐめてくれた」という項目を含んでおり、本論文が定義する被共感の知覚と一部類似する要素を持つ因子だと考えられる。そして、共感・受容因子は、「嬉しかった」や「安心した」という感情喚起についての項目を含む「感情の回復」因子の得点と、正の相関をもつことが示されている。このことは、被共感経験において、人は何らかの(おそらくポジティブな)感情関係を経験する可能性を示唆すると考えられた。そこで、第二の被共感の知覚に関する資料的知見として、被共感経験における感情喚起に注目した。

研究2で検討したことについて、実施した調査における質問内容に関連づけて具体的に記述する(Table 2.2.1)。まず、研究2では、過去の具体的な経験に即して回答してもらうために、被共感のエピソードを想起してもらった(項目1)。その後、研究2の主な目的である、被共感の知覚が自他の重なる知覚を促進するのかを検討すること、そして被共感の知覚に関する資料的知見を得ることを目的として、項目1で想起した被共感のエピソード

について、自他の重なる知覚(項目2)と共感者についての情報量の増加(項目5)を質問した。これらの回答は、共感者と被共感者の、エピソード以前の関係性によって変わると考えられる(e.g., 旧知の仲という関係性では、共感者についての情報量の増加は少ないだろう)。そこで、項目1の共感者との関係性の質問②に加えて、被共感経験前後での自他の重なる評定(項目3)および自他の重なりにおける変化が生じた理由(項目4)についても尋ねた。そして最後に、前述の「(b)被共感によって生じるポジティブな変化は認知のみならず感情まで表れるのか」と「(c)もし感情にも表れるならばどのような感情なのか」という未解決の点に関連して、被共感のエピソードを経験したあとで喚起された感情、およびその強度評定(項目6)を尋ねた。

Table 2.2.1.

研究 2 における調査項目<sup>1</sup>

---

項目 1 エピソードの記述

- ①経験や出来事の内容
- ②共感者との関係性
- ③時期

項目 2 自他の重なるの知覚

- ①共感者との類似性の知覚
- ②自己イメージの共有
- ③親密さの知覚

項目 3 被共感経験前後での自他の重なり評価(0-100)

項目 4 自他の重なるの知覚の変化が生じた理由

項目 5 共感者についての情報量の増加

項目 6 喚起された感情, およびその強度評価(0-100)

---

Note:<sup>1</sup> 項目 3 と項目 6 の一部を除き, すべて自由記述回答であった。

## (2) 方法

### 回答者

都内大学と大学院に所属する学生 33 名(男性 14 名, 女性 19 名)。平均年齢は 22.03 歳( $SD = 4.39$  歳)であった。回答者は, 調査実施者からのメールおよび, 講義終了後の告知によって募集された。回答期間は, 2020 年 8 月 5 日から 2020 年 8 月 13 日であった。

### 手続き

オンライン回答フォームを用いて調査を行った。回答フォームの URL にアクセスした参加者は, まず本調査への協力を同意するか否かを回答した。回答者には, 本調査についての説明が示され, それをよく理解したうえで調査参加に同意する者のみが後続の回答ページに進んだ。回答者は, 次項に示す調査項目と性別・年齢について答えた後, 回答を送信し, 調査は終了した。

### 調査内容

回答ページは, 全 2 ページで構成された。第 1 ページでは, まず「ここ数年の間で, あなたが『もっとも共感されたと感じたエピソード』について思い出し, 以下の問いにお答えください」と教示された。この教示に続き, 以下の 4 つの大問(全 6 項目)が設けられた。

**被共感エピソード(項目 1)** もっとも共感されたと感じたエピソード(以下、被共感エピソードという)について、具体的に記述するよう求めた。その際、「①あなたのどんな経験や出来事に対して共感されたのか(例：資格試験に合格した、愛犬が亡くなった)、②誰からの共感か、その人との関係性、③共感されたのはいつ頃だったか(例：2018年5月頃)」については必ず記述するよう求めた。

**自他の重なるの知覚(項目 2-4)** 共感者との自他の重なりを感じたかどうかに関して尋ねた。項目 2 では、上記の項目 1 で記述してもらった被共感エピソードにおいて、共感者との自他の重なりを知覚したか回答してもらった。その際、鈴木他(2020b)の自他の重なるの知覚を測定する項目を参考に、共感者との類似性を知覚したか、回答者自身と共感者自身がおなじような自己イメージを持っていると思ったか、そして共感者と親密な関係であるように感じたかについて、できるだけ具体的に記述するよう求められた。項目 3 では、被共感経験前と被共感経験後それぞれについて、共感者との自他の重なるの知覚の程度を回答してもらった。共感者との自他の重なりを全く感じていない状態を 0 点として、0 点から 100 点満点で回答するよう求めた。項目 4 では、項目 2 および項目 3 で回答してもらった自他の重なるの知覚について、なぜそのような変化が生じたと思うかを回答してもらった。

**共感者についての情報量の増加(項目 5)** 共感者についての情報量が増加したかについて回答してもらった。具体的には、「あなたが共感されたとき、共感者の性格、感じ方、考え方や、共感者の過去の経験についてなど、共感者についてより多く、あるいはより深く知ることができたと思いませんか。具体的にどのような点について知ることができたか

をお答えください。」と教示した。また、特にない場合には、特にないと回答するように指示した。

**喚起された感情(項目 6)** 被共感経験において喚起された感情について回答してもらった。また、喚起された感情それぞれについて、全く感じなかった場合を 0 点として、100 点満点で感情の強さを採点してもらった。

### 研究参加者への配慮

調査実施にあたり、被共感経験について記述してもらう研究 2 の手続きが、侵襲性が非常に低いと考えられること、記述してもらう経験が比較的ポジティブなものであり、研究協力者にネガティブな影響を及ぼす可能性は低いと考えられた。また、調査開始前に文章で(a)研究 2 の目的、(b)プライバシーの保護、(c)研究への参加は任意であり、参加に際して利益や不利益は生じないこと、(d)研究終了後でもデータの提供を断る権利があることを説明し、承諾を受けたうえで実施した。調査は、指導教員の監督のもとで実施された。

### (3) 結果

#### 被共感エピソード(項目 1 ; Table 2.2.2.)

記述された被共感エピソードについて、誰に共感されたのか(以後、共感者という)について集計した。その結果、友人(「友人」「親友」「チームメイト」)からの被共感エピソードが最も多く、16 名(うち 1 名は「家族・友人」)の回答があった。次に回答が多かったのは、家族(「家族」「姉」「双子の妹」)であった。7 名(うち 1 名は「家族・友人」)の回答が



あった。これ以外では、先輩からの共感エピソードが4件、教員が2件、恋人および知らない人がそれぞれ1件であった。また、未回答が3件であった。

それぞれのエピソードについては、進路に関すること(e.g., 進路の不安・ES 通らない・就職先が決まった), 所属組織や政治に対する不満・不信感(e.g., 政治不信・学校や政治への不信), また新型コロナウイルスによる社会情勢の変化に伴い、大学の講義がリモート授業になったことへの不安や意見(e.g., リモート授業とサークルの中止)といった回答が確認された。また、特定の人物に対する不満(e.g., 親とのけんか・バイトの愚痴・両親への葛藤)や、何らかの喪失経験(e.g., 彼氏にふられた・愛犬の死・仲間が病気になり、亡くなるまでのこと)も挙げられていた。

Table 2.2.2.  
被共感エピソードの要約一覧

共感者	エピソード	時期	
家族	一緒に旅行	2018年11月	
	実家の猫の死	2020年5月	
	自身の病気の発覚	2020年2月	
	リモート授業とサークルの中止	2020年5月	
姉	進路の不安	2019年7月	
双子の妹	彼氏に約束を破られて泣いた	2019年7月	
家族・友人	大学合格	2017年11月	
友人	政治不信	2019年10月	
	学校や政治への不信	2020年4月	
	交通事故を起こした	2020年2月	
	ES通らない	2020年6月	
	親とのけんか	2020年3月	
	ゲームの感想	2020年8月	
	彼氏にふられた	2020年3月	
	最初のリモート授業への不安	2020年5月	
	リモート授業による生活の変化	2020年8月	
	好きなサッカーチームの勝利	2019年8月	
	自身の性格・傾向	2019年10月	
	友人数人	バイトの愚痴	2020年7月
	親友	リモート授業	2020年8月
地元の親友	大学受験の失敗	2018年2月	
チームメイト	日大タックル事件	2018年5月	
恋人	愛犬の死	2018年9月	
先輩	スマホゲームのしにくさ	2019年9月	
	ある作品鑑賞後の感想等	2020年2月	
バイト先の先輩	バイト先の店長の愚痴	2020年	
過去のアルバイト先の先輩	両親への葛藤	2020年7月	
大学と実習先の教員	就職先が決まった	2020年7月	
指導教員	ゼミの課題	2020年6月	
知らない人	youtubeのコメント	2019年6月	
未記入	仲間が病気になり、亡くなるまでのこと	未記入	
	バイトでミスをした時	2017年	
	免許取得	2018年1月	

#### 自他の重なるの知覚(項目 2—4)

まず、被共感経験の際に共感者との自他の重なるを知覚したかどうかについて集計した。共感者との類似性、自己イメージの共有、そして親密さを感じたかどうかを尋ねた項目 2 の回答から、集計対象者 33 名のうち 24 名(73%)の回答で自他の重なるを感じたことが確認された。具体的には、類似性を感じたという回答が 33 件中 21 件(64%)、親密さを感じたという回答が 18 件(55%)、そして自己イメージの共有があったという回答は 10 件(30%)であった。

項目 2 では被共感エピソードにおける自他の重なるの知覚について回答するよう求めたが、上記の結果だけでは、回答者が被共感経験前から知覚していた共感者との自他の重なるを回答したのか、被共感経験によって促進された自他の重なるを回答したのかについて言及できない。そこで、被共感経験前後での自他の重なるの知覚の程度を 0 点から 100 点で回答してもらった項目 3 の回答を集計した( $N=33$ )。その結果、自他の重なり得点は被共感経験前の得点( $M=50.06$ ,  $SD=25.90$ )から、経験後( $M=70.64$ ,  $SD=23.97$ )に有意に増加していた( $t(32)=5.51$ ,  $p<.001$ )。得点分布の変化に示すように、被共感経験前(Figure 2.2.1.)は、0-10 点を除けば 51-60 点を中心とした分布を示していたが(中央値 = 60)、経験後(Figure 2.2.2.)では、中央値が 80 点にうつり、全体的に自他の重なるの知覚得点が増加したことがわかる。なお、経験後でも 0-10 点に度数 2(6%)が含まれており、被共感のエピソードを経験したあとでも、自他の重なりが増加しない場合も少数だがあることが示されたが、被共感経験前よりも被共感経験後の得点が低い回答はなかった。このように、33 名中 24 名

(73%)が自他の重なりを感じたこと(項目 2), 加えて被共感経験前よりも経験後の方が自他の重なりの知覚の程度が高かったことから(項目 3), 得られた回答は被共感経験前から知覚されていた自他の重なりではなく, 被共感経験によって促進された自他の重なりの知覚であると考えられた。

自他の重なりが変化した理由について尋ねた項目 4 の回答について, どのような理由によって自他の重なりが変化したのかを集計した(Table 2.2.3.参照)。この際, 上記の集計で自他の重なりを感じたと回答していた 24 件を集計対象とした。2 つ以上の理由を述べていた回答は, 重複して集計された。その結果, 被共感経験において自他の重なりの知覚が促進されたのは, 回答者と共感者の経験・境遇, 考え方, 感じ方が同じであったこと(計 16 件), つながりを感じたこと(3 件), 共感されたこと(2 件)によることが示された。また, 自他の重なりの知覚が促進された理由が分からないという回答も見られた(2 件)。

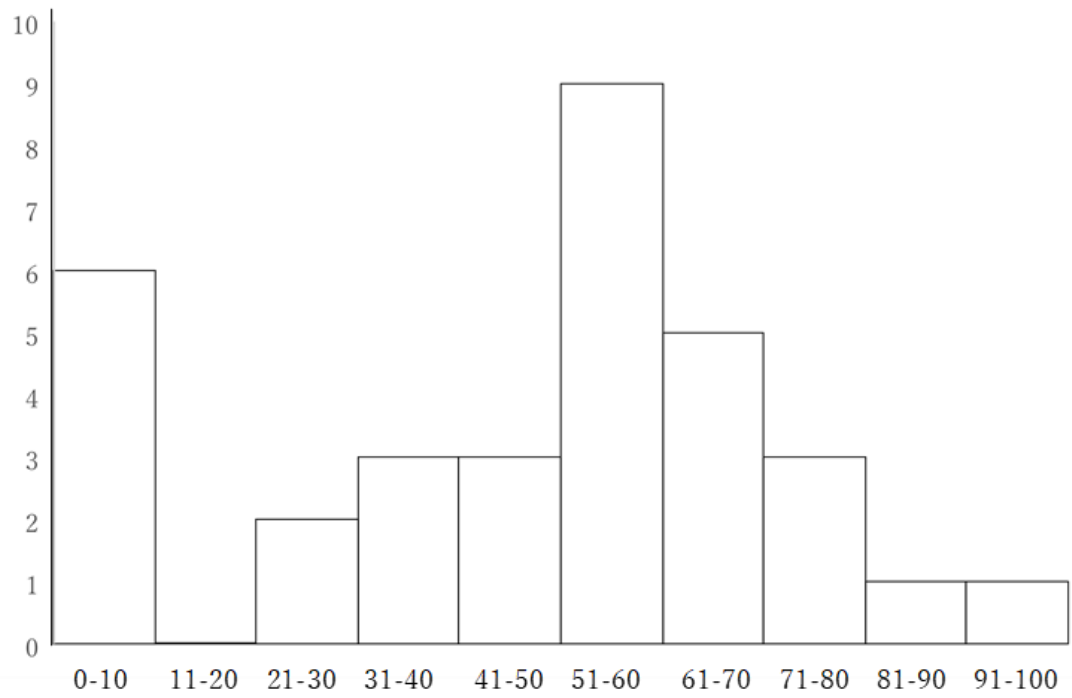


Figure 2.2.1. 被共感経験前の共感者との自他の重なるの知覚得点。

注) 0点をまったく自他の重なりを感じていない状態とし，100点満点で回答してもらった。

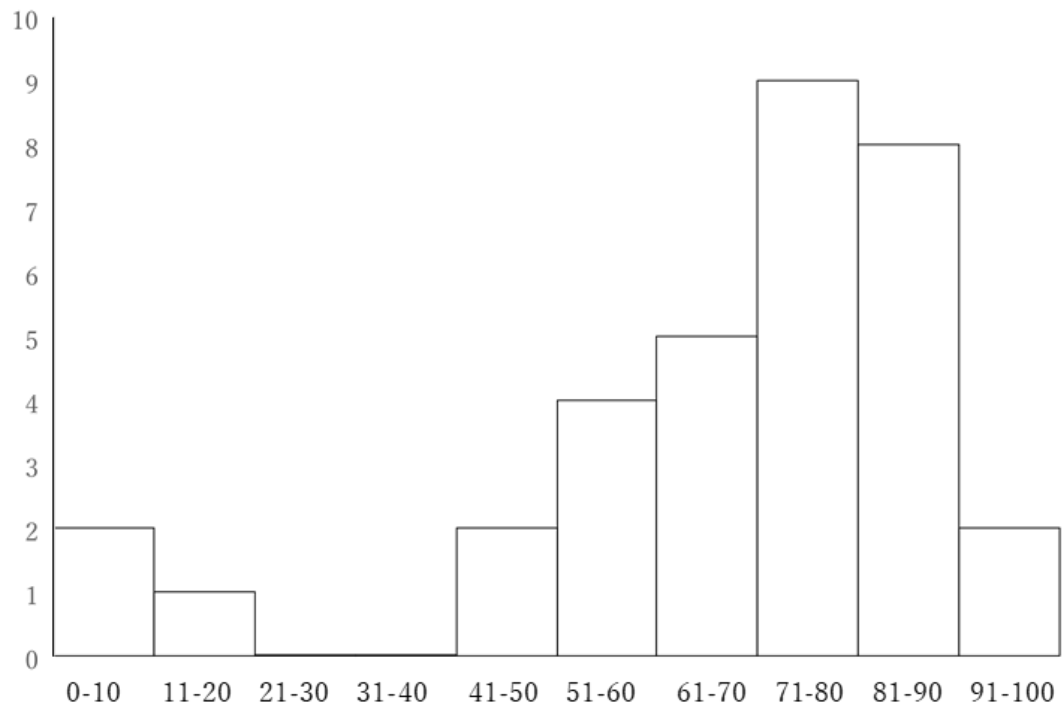


Figure 2.2.2. 被共感経験後の共感者との自他の重なりを知覚得点。  
 注) 0点をまったく自他の重なりを感じていない状態とし、100点満点で回答してもらった。

Table 2.2.3

自他の重なるの知覚が変化した理由( $n=24$ )<sup>1</sup>

理由	度数	具体例
同じ経験・境遇であったこと	9	同じような状況下にある中で、 同じ思いを持っていると感じられたためだと思う
同じ考え方であったこと	4	あまり政府の話がしないため、意外なところで 同じ考えを持つんだなと思ったからです
同じ感じ方であったこと	3	体験したのが自分だったとしても 同じように感じるよと言ってくれたから
つながりを感じたこと	3	共感することで仲間意識が強くなるから
共感されたこと	2	両親が高齢ということによる悩みを持っている人が 身近にいなかったため、今までは話をしても あまり共感されなかったことが影響していると感じる。 また、共感された相手と結婚や子どもに関する 将来像も近いものがあったため共感されたこと によって重なりを感じた。
その他	6	今まで思っていた一面と違う一面が自分と同じよ うな一面だったから
理由はわからない	2	
合計 <sup>2</sup>	29	

Note: <sup>1</sup> 自他の重なりを感じたと回答した 24 名が集計の対象となった。<sup>2</sup> 集計対象者数よりも合計数が大きいのは、複数の理由をあげた回答がそれぞれの理由に計上されたためである。

### 共感者についての情報量の増加(項目 5 ; Table 2.2.4.)

まず、共感者についての情報量が増加したという回答数と、特に変わらなかったという回答数を集計した。その結果、被共感エピソードにおいて共感者のことをより良く、ないしより深く知ることができたと答えた人は、回答者 33 名のうち 18 名(55%)であった。15 名(45%)は、被共感エピソードにおいて、共感者についての情報量は特に変化がなかったと答えた。

共感者についての情報が増加したと回答した 18 名について、具体的にどのような側面についての情報が得られたのかを集計した。その結果、被共感経験において、共感者の感じ方・考え方(e.g., 「以前よりも深く知ることができたと思う。特に過去の体験や自分と同じ悩みを抱えていると分かったことで相手の感じていることや考え方が今まで以上にわかった気がした」)や、性格(e.g., 「改めて意見をはっきりと伝える性格だと感じた」), 経験(e.g., 「共感者の感じ方と過去の経験を多く知ることができた」)といった側面について知ることができていたことがわかった。特に、共感者の感じ方・考え方について知ることができたという回答が多かった。各側面について対応する具体的な回答を、Table 2.2.4.に示した。



Table 2.2.4.  
共感者についての情報量の増加の有無と回答例 (n=33)

情報量増加の有無(内訳) <sup>1</sup>	度数	回答例 <sup>2</sup>
増加した	18	
感じ方	6	「共感者の <u>感じ方</u> や <u>考え方</u> を少し知ることが出来たと思った。」 「辛い物を食べたくなくなるという点において <u>感じ方</u> が自分と同じだと感じ、より相手のことを深く知れたと思う。」
考え方 (物事の捉え方含む)	6	「 <u>考え方</u> や感情の生起の順序が同じであることが分かった。」 「 <u>政治観</u> を学びました。」 「ゼミの教授がどんなことを学んでいるのか、どんなことをしているのか、課題に対して <u>どう</u> 考えているのか、教授の <b>人柄</b> が知れた。」
性格 (人柄含む)	4	「改めて意見をはっきりと伝える <u>性格</u> だと感じた。」 「優しい人だと知っていたものの、更に深く、とても <b>優しい人</b> だなと気付く。自分の知らない考え方にも、 <b>共感</b> を示してくれる人だなと思う直す。」
経験	3	「以前よりも深く知ることができたと思う。特に <u>過去の体験</u> や自分と同じ悩みを抱えていると分かったことで相手の感じていることや考え方が今まで以上にわかった気がした。」 「共感者の感じ方と過去の <b>経験</b> を多く知る事ができた。」
行動の仕方	2	「ある出来事にどのように感じて <u>どう</u> 行動を起こしたか <b>知</b> ることができたと思う。今回のケースでは特に、勉強や学校に対する姿勢の話から、自身の <b>性格</b> による取り組み方の違いを知ることができたと思う。」 「その <b>先輩の性格</b> や <b>行動力</b> などたくさん知った」
その他	4	「とてもそのように感じます。生死、病氣を通じ、家族のとらえ方、仕事、趣味、生き方など、知り合ってから全く知らなかったことを知り合うことができたように思う」 「自分と似ていると感じた。」 「より知ることができたと思った」 「多少は知ることができたと思う」
情報量は特に変化なし	15	

Note: <sup>1</sup> 内訳の総数が18を超えるのは、複数の側面について回答していた場合、それぞれの側面に計上されたためであった。<sup>2</sup> 回答例には、分類の基準となった部分に下線を引いた。

### 自他の重なる知覚の有無と共感者についての情報量の増加の関連

共感者についての情報量の増加がみられた 18 名と、それがみられなかった 15 名それぞれを対象に、自他の重なる知覚が生じていた割合について分析を行った。具体的には、それぞれの群を対象に、自他の重なる知覚が生じていたかどうかの 2 択(項目 2 の集計からコーディングした)におけるチャンスレベル 50%と比較して、自他の重なる知覚が生じていた人数の割合が高いかどうか検討した。その結果、共感者についての情報が増加していた 18 名のうち 15 名は自他の重なる知覚が生じており(83%)、その割合はチャンスレベルよりも有意に高かった( $p = .008$ )。一方で、共感者についての情報が増加していなかった 15 名のうち自他の重なる知覚が生じていたのは 9 名であり(60%)、チャンスレベルとの有意な割合の差はみられなかった( $p = .607$ )。

### 喚起された感情(項目 6 ; Table 2.2.5.)

被共感経験の際に喚起された感情について、感情に関連する記述それぞれの回数を集計した。33 名の回答者のうち、得点と思われる数値のみが記述され、どのような感情が喚起されたのか分からなかった 5 名は集計から除外された。その結果、28 名が集計対象となった。

特に多くの回答が得られたのは、安心感・安堵であった。28 名中 18 名(64%)が回答していた。その程度について回答してもらった得点の平均値は 71.18( $SD=21.73$ )であった 2。次に記述が多かったのは、嬉しさについての回答であった。12 名(43%)が回答していた。そ

の得点の平均は、86.36( $SD = 17.20$ )であった。安心感・安堵および嬉しさ以外の感情は、1～3名のみが回答していた。

次に、誰に共感されたのかによって、喚起される感情が異なるのかどうか集計した。この際、2件以上の回答がみられた感情を集計対象とした。その結果、安心感・安堵は知らない人からの、嬉しさは恋人からの被共感経験を除くすべての被共感経験で回答されていた。また、ある特定の共感者に特有の回答があった。具体的には、共感者が友人のエピソードのみで驚き、および親和が、教員からの被共感エピソードのみで、自信がついたという回答がみられた。特に、教員からの被共感エピソード(全2件)では、2件ともに自信について回答されていた。

Table 2.2.5.

共感者との関連と喚起された感情についての回答数<sup>1,2</sup>

	安心感	嬉しさ	自信	感謝	悲しみの軽減	楽しさ	驚き	不安	親和	悲しみ	情けなさ	不信感
家族(7件) <sup>3,4</sup>	4	1	1	1						1	1	
友人(16件) <sup>3,4</sup>	8	6	1	1	1		3	1	2			1
先輩(4件) <sup>3</sup>	2	2				1		1				
教員(2件) <sup>3</sup>	2	2	2									
未記入(3件) <sup>3</sup>	2	1			1							
合計(28件)	18	12	2	2	2	1	3	2	2	1	1	1

Note: <sup>1</sup> 回答がなかった箇所は、ハイフン( )とした。<sup>2</sup> 共感者について、恋人および知らない人はそれぞれ1名ずつであり、それらだけに見られる回答もなかったため、示さなかつた。<sup>3</sup> 括弧内は、それぞれが共感者であった回答の件数。たとえば、家族(7)は、家族が共感者であった被共感経験についての回答が7件であることを示す。<sup>4</sup> 家族・友人と回答した1件は、家族および友人の両方を含めた。

#### (4) 考察

研究 2 では、他者からの共感を知覚した際に自他の重なるの知覚が促進されるかどうかを確認した。これは、被共感の知覚が自他の重なるの知覚を促進するという関係について(研究 1)、この現象の存在を確認することが目的であった。また、上記の目的にあわせて、被共感の知覚に関する資料的知見を得るため、自由記述式回答による調査を行った。具体的には、(a)被共感の知覚によって、他者についての情報量は増加するのか、(b)被共感によって生じるポジティブな変化は認知のみならず感情まで表れるのか、(c)もし感情にも表れるならばどのような感情が、どの程度の強さで生じるのか、についての知見を得ることを目的とした。

#### 被共感の知覚による自他の重なるの知覚の促進

まず、研究 2 の主な目的であった、被共感の知覚が自他の重なるの知覚を促進するという関係について考察する。被共感経験における自他の重なるの知覚について尋ねた項目 2 の回答を集計した結果、集計対象者 33 名のうち 24 名(73%)の回答で自他の重なりを感じたことが確認された。また、被共感経験前後での自他の重なるの知覚の程度を 0 点から 100 点で回答してもらった項目 3 の回答を集計した。その結果、被共感経験後の自他の重なるの知覚は、被共感経験以前の自他の重なるの知覚よりも、有意に高いことが示された。これらのことから、他者に共感されると知覚したとき、自他の重なるの知覚が生じることが

示唆された。したがって、研究1で示されたモデルにおける、被共感の知覚が自他の重なる知覚を促進するという関係は、被共感の知覚があった際の妥当な現象であると考えられた。

ただし、研究2の手続きを考慮すると、上記の結果の解釈には注意が必要である。研究2では、回答者に被共感経験を想起してもらい、その際の対人認知について回答してもらった。したがって、被共感の知覚と自他の重なる知覚の因果関係について、実証的に検討できておらず、また、要求特性の影響や、自発的な回答がなされていなかった可能性が懸念される。

まず、要求特性の影響について述べる。すなわち、回答者は被共感経験という比較的ポジティブな対人相互作用場面を想起してから相互作用相手についての認知を回答したため、実際の認知よりもポジティブな回答をするよう要求特性が働いていたかもしれない。ただし、研究2で得られた結果が、要求特性によってすべて説明されるとは言いがたい。共感者との自他の重なる知覚として3つの側面(i.e., 類似性, 自己イメージの共有, および親密さ)を回答してもらった項目2では、回答者33名中27名(82%)が、少なくとも1つ以上の側面について、「わからない」や「特に感じなかった」という回答をしていた。このことは、回答者は少なからず自身の経験を十分に想起し、知覚されなかったことについて正しく回答していたことを示唆するだろう。このように、ある側面については知覚したが、他の側面については知覚しなかったという回答が得られたことは、要求特性では説明できない結果であると考えられる。

次に、自発的な回答がなされていたかどうかについて述べる。すなわち、先述した要求特性の影響や、被共感経験を想起して回答するという手続きにおいて、実際に経験したときには生じていなかった対人認知が、改めて問われたために意味づけられた可能性である。たとえば、被共感経験前後の自他の重なるの知覚の程度をそれぞれ 100 点満点で回答してもらったところ(項目 3)、被共感経験後の方が自他の重なるの知覚の程度を高く評価していたことが示された。この結果は、想起した被共感経験において自他の重なりを知覚したかどうかをたずねた項目 2 に回答したことによって、回答者が被共感経験の前よりもその後自他の重なりを強く知覚したはずだと意味づけた結果であるかもしれない。

しかしながら、つぎの理由から、研究 2 で示された結果は、被共感経験が自他の重なるの知覚促進することを、少なからず反映していたと解釈できる。すなわち、研究 2 の項目 2 の回答と項目 3 の回答に関連がみられなかったことである。もし項目 2 に回答したことが項目 3 における被共感経験後の回答に影響しているならば、項目 2 で自他の重なりを知覚したと回答した人は、自他の重なりを知覚しなかったと回答した人よりも項目 3 における被共感経験前後で自他の重なるの知覚の程度の変化量が大きくなると考えられる。しかしながら、項目 2 で自他の重なるのいくつかの要素(i.e., 類似性・自己イメージの共有・親密さ)について知覚したと回答したか(0-3)と、項目 3 における変化量に有意な関連はみられなかった( $r = .16, t(31) = 0.89, p = .38$ )。さらに、項目 2 で自他の重なりを知覚したと回答したかどうかを 2 値にコーディングした場合においても(知覚あり = 1, 知覚なし = 0)、項目 3 における変化量との関連はみられなかった( $r = .19, t(31) = 1.10, p = .28$ )。この結果から、項目 2 に回答したことが項目 3 の回答に影響を及ぼしたとは言えないと考えられた。

上記の議論から、被共感経験を想起し回答してもらった研究 2 の結果が、要求特性や、改めて問われたことによる意味づけによって生じた回答だけでなく、回答者の自然な回答を少なからず反映できていたと考えられる。被共感の知覚と自他の重なる知覚に正の関係がみられることにくわえて(Kimmes, 2013)、研究 2 で被共感経験において自他の重なる知覚が促進されるという現象を確認できたことは、被共感の知覚が自他の重なる知覚を促進するという因果関係を支持する知見といえるだろう。

### 被共感の知覚に関する資料的知見

つぎに、研究 2 で得られた被共感の知覚に関する資料的知見について考察する。これらの知見は、本論文におけるこれ以降の研究に関連しないものの、今後の被共感研究の発展に寄与する可能性がある。ここでは、研究 2 で得られた被共感の知覚に関する資料的知見を整理することを目的とする。

第一に、被共感時に得られる共感者についての情報が、自他の重なる知覚を促進する要因になっている可能性が指摘された。自他の重なる知覚が変化した理由を尋ねた項目 4 を集計した結果、自他の重なりに変化が生じたのは、主に経験・境遇・考え方・感じ方が同じであったためであるという回答が多かった(Table 2.2.3.)。そして、被共感によって、主に共感者の感じ方、考え方、経験、そして性格について、より深く知ることができていたという回答が多かった(Table 2.2.4.)。これらの結果においてあげられている共感者の要素は、経験、感じ方、および考え方という点で一致している。また、共感者についての情報量が増加した群と増加していない群それぞれの、自他の重なる知覚が生じていた割合



について検討したところ、情報量が増加していた群のみがチャンスレベルよりも有意に高い割合で自他の重なるの知覚が生じていた。これらことから、被共感者が自身と共感者の類似点を知ることによって、自他の重なるの感覚がより強くなるというプロセスが存在する可能性が考えられた。すなわち、自他の類似性に関する知識が、自他の心的な統合をより促進する可能性がある。

ただし、研究2の結果から、被共感が共感者についての情報量を増加させるとは言えないことには注意が必要だろう。共感者についての情報量が増加したと回答した人は、回答者33名中18名(55%)であった。被共感が共感者についての情報量を増加させる場合と、その効果がみられない場合があるのかもしれない。

つぎに、被共感によって生じる変化は、認知のみならず感情にも表れる可能性が推察された。研究2では、回答者33名中28名が被共感によって喚起された感情を回答していた(Table 2.2.5.)。残りの5名は数値のみが回答されていたため、回答を感情によって分類することが不可能であった。したがって、回答者33名の中に、何の感情も喚起しなかったという回答はみられなかったといえる。このことから、被共感が何らかの感情を喚起させる働きを持っていることを指摘できるだろう。

そして、被共感の知覚によって喚起される感情は、大きく2つに区別できる可能性が考えられた。研究2では、誰から、またどのような経験について共感されたかにかかわらず、安心感と嬉しさが喚起されたという回答が多くみられた(Table 2.2.5.)。一方で、ある特定の共感者(e.g., 教員)の被共感経験にしか回答のない感情もみられた(e.g., 自信がついた)。これらことから、被共感によって喚起される感情は、誰から、また何について共感されたか

という被共感エピソードに影響されにくい感情(i.e., 安心感・嬉しさ)と, 被共感エピソードによって異なる感情とがある可能性が指摘できる。

## 2.3. 研究3: 被共感の知覚尺度の作成<sup>11</sup>

### (1) 目的

研究1では、他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼすプロセスについて検討した。その結果、Goldstein et al.(2014)が示したモデルとは異なる結果が得られ、他者からの視点取得の表明が直接的に効果を及ぼすのは、被共感の知覚のみである可能性が示唆された。そして、研究2では、研究1で示された被共感の知覚と自他の重なり of 知覚の関連について、被共感の知覚が自他の重なり of 知覚を促進するという現象が実際に生じるのかどうかを確認した。しかしながら、研究1および研究2には、それぞれ問題があった。そこで、研究3では、それらの問題を解決することを目的とした。

### 研究1の問題(被共感の知覚を測定する尺度)

Goldstein et al.(2014)が用いた変数を和訳して用いた研究1では、被共感の知覚を「あなたは共感されたと思いますか」という1項目で測定した。この項目を用いたのは、研究1が、Goldstein et al.(2014)の示した結果が再現されるかどうかを確認することを目的としていたためであった。しかしながら、この1項目で被共感の知覚を測定することは、大きく2つの問題をもつと考えられる。

---

<sup>11</sup> 研究3は、鈴木・山川・坂本(2020a)をもとに修正・加筆を行い執筆した。

第一に、「あなたは共感されたと思いますか」という 1 項目では、被共感の知覚という概念を過不足なく測定できているとは考えにくいことである。すでに序論で説明した通り、Goldstein et al.(2014)は、共感を他者指向的感情反応として定義し、それを向けられたと知覚することを被共感の知覚と呼んでいる。本論文では、感情共有の側面もくわえ、共感を他者感情の共有と他者指向的感情反応として扱い、また被共感の知覚を、他者が自分自身を対象に感情を共有し、他者指向的感情反応を示したと思うことと定義した。このように共感および被共感の知覚を定義したとき、Goldstein et al.(2014)ならびに研究 1 が被共感の知覚の程度を測定するために用いた「あなたは共感されたと思いますか」という 1 項目が、十分な妥当性を有しているとは考えにくい。被共感の知覚の程度を測定する尺度には、感情共有および他者指向的感情反応について問う項目が必要だと考えられる。

第二に、「あなたは共感されたと思いますか」という項目の意味を、参加者がどのように解釈したのかが判断できないことである。すなわち、「あなたは共感されたと思いますか」と問われた参加者は、共感を感情共有と解釈して回答したのか、他者指向的感情反応を示されたことだと解釈して回答したのか、または感情共有と他者指向的感情反応の両方が揃って共感だと解釈して回答したのかが不明であった。これらの問題を解決するため、本論文が定義する被共感の知覚について、その程度を測定する尺度の作成が必要だと考えられた。

## 研究 2 の問題(被共感の知覚と自他の重なる知覚の関連)

研究 2 では、過去の被共感経験を想起してもらい、その際に自他の重なる知覚が促進されることを確認した。しかしながら、研究 2 が実験的な手続きを取っていないことから、研究 2 の結果から被共感の知覚と自他の重なる知覚の因果関係について言及することはできないと考えられた。研究 1 で得られた、他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果のプロセスモデルをもとに(Figure 2.1.3 参照)、他者からの視点取得の表明の効果についてより理解を深めていくためには、このモデルのなかで示された変数間の因果関係についても明らかにしていく必要があった。すなわち、他者に共感されたと知覚することが、自他の重なる知覚を促進することを実証することが求められた。

### 研究 3 の目的

そこで研究 3 では、研究 1 および研究 2 の問題を解決することを目的とした。まず、研究 1 の被共感の知覚を測定する測度の問題を解決するため、他者に共感されたと思う程度を測定する被共感の知覚尺度の作成を行った。

被共感の知覚尺度は、ある状況において他者からの共感を知覚した程度を測定する尺度であるため、個人の特性や傾向を測定する尺度との関連から妥当性を検討する方法は、適切ではないと考えられた。すなわち、被共感の知覚尺度の妥当性を検討するためには、他者からの共感を知覚しやすい状況におかれた人は、そうでない状況におかれた人よりも被共感の知覚尺度の得点が高くなることを確認する必要があった。

そこで、他者からの共感を知覚しやすいと考えられる状況を設定した場面想定法による実験を行い、尺度の妥当性を検討した。たとえば、カウンセリング場面においてクライア

ントがカウンセラーからの共感を知覚する要因について検討した田中(2006)は、カウンセラーによるオウム返しがクライアントに共感を知覚させることを指摘している。このことは、なにか自分自身の経験について他者に話をしたとき、その他者がオウム返しを行う状況は、他者からの共感を知覚しやすい状況であると考えられる。そこで、他者からの共感を知覚しやすい状況を想定する実験群は、そうでない状況を想定する統制群に比べて、被共感の知覚尺度の得点が高くなるかどうかを検討した。

さらに、Goldstein et al.(2014)および研究1の結果から、他者からの共感の知覚の程度と、その他者との自他の重なるの知覚およびその他者へのポジティブな態度に正の関連が示されている(研究1の結果については Figure 2.1.3.参照)。そこで、被共感の知覚尺度の得点と、他者との自他の重なるの知覚の程度およびその他者への好感に正の関連がみられると予測した(仮説1)。

また研究3では、研究2の問題として指摘された、被共感の知覚が自他の重なるの知覚を促進することについて、実証的に検討した。他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果のプロセスにおいて、被共感の知覚のみが自他の重なるの知覚に向けたパスを有したこと(研究1, Figure 2.1.3.参照)、および被共感経験の前後では、共感者との自他の重なるの知覚が高くなっていたことから(研究2)、被共感の知覚は自他の重なるの知覚を促進することが予測された。すなわち、他者からの共感的反応を受ける実験群は、共感的反応を受けない統制群と比較して、自他の重なりを強く知覚するだろう(仮説2)。

## (2) 方法

### 実験デザインと参加者

実験デザインは、共感的反応の有無による 1 要因参加者間計画であった(実験群 vs 対照群)。参加者は、都内大学に通う大学生 148 名(男性 76 名, 女性 71 名, その他 1 名)であった。平均年齢は 19.86 歳( $SD=0.90$  歳)であった<sup>12</sup>。

### 手続き

148 名の参加者を対象に、場面想定法を用いた質問紙実験を行った。実験デザインは、ビネット上で他者からの共感的反応を受ける実験群と、共感的反応を受けない統制群による 1 要因 2 水準の参加者間計画であった。

シナリオの登場人物は主人公と A さんであった。シナリオは主人公の視点で書かれており、参加者は主人公になったつもりでシナリオを読むよう求められた。シナリオは、大学の授業中に他者と会話をする課題で、隣に座っていた A さんに、バイトで褒められて嬉しかった話をする場面であった。そして、主人公の話に対する A さんの反応が操作された。オウム返しは共感的理解の知覚を促進すること(田中, 2006), および共感性プロセス尺度(葉山他, 2008)の他者志向的反応水準における「ポジティブな感情への好感」に他者への賞

---

<sup>12</sup> 研究 3 の参加者数を決定する際、例数設計は行わなかった。研究 1 では、研究 3 の仮説 1 にあたる被共感の知覚と自他の重なる知覚および他者への好感に強い関連が示された ( $r_s > .65$ )。この関連の強さを効果量  $r$  として例数設計を行うと、非常に少ないサンプルサイズを算出するため、研究 3 では例数設計は行わずに参加者を募集した。

賛に対応する項目が含まれていることから、Aさんに共感的反応をされる実験群では「『バイトで褒められたんですね。すごいと思います。』と、笑顔で返してくれた。」とした。一方で共感されたか否かわからない対照群では「『ああ、そうなんですか。』と言っていた。」とした。具体的なシナリオは付録Aに示した。

シナリオを提示後、シナリオを理解しているか確認するため、主人公がAさんに話した内容およびAさんの反応について自由記述で回答を求めた。その後、被共感の知覚の程度を測定する5項目、Aさんへの好感(1項目)、Aさんとの自他の重なる知覚の程度(5項目)、および主人公が経験した出来事(バイトで褒められたこと)の嬉しさ(1項目)に回答を求めた。嬉しさの評価は、シナリオの内容とは関係なくバイトで褒められるという出来事を実際に経験したらどの程度嬉しいと感じるかを回答してもらった。すべての項目は10段階評価であった。最後に性別、年齢、所属および母国語を回答してもらった。

### 被共感の知覚尺度

被共感の知覚尺度の項目は、本論文における被共感の知覚の定義(i.e., 他者が自分自身を対象に感情共有および他者指向的感情反応を示したと思うこと)にあわせて、共感性プロセス尺度(葉山他, 2008)の下位尺度のうちポジティブな感情の共有とポジティブな感情への好感の項目を参考に作成された。具体的には、他者感情の共有に関する2項目(あなたと同じ気持ちになっていた・あなたの気持ちを共有できた)、他者指向的感情反応に関する2項目(あなたの話をきいても、特になにも感じていなかった(逆転項目)・あなたに対してポ



ジティブな気持ちを感じていた)および共感という単語を用いた 1 項目(あなたに共感していた)であった。研究 3 で使用した質問票における被共感の知覚尺度を付録 B に示した。

### 研究参加者への配慮

研究の実施にあたり、研究 2 は場面想定法を用いていること、想定する場面がポジティブな経験について話をする場面であったことから、研究 2 の手続きは侵襲性が非常に低く、また研究協力者にネガティブな影響を及ぼす可能性は低いと考えられた。また、実験開始前に文章で(a)研究 3 の目的、(b)プライバシーの保護、(c)研究への参加は任意であり、参加に際して利益や不利益は生じないこと、(d)研究終了後でもデータの提供を断る権利があることを説明し、承諾を受けたうえで実施した。研究は、指導教員の監督のもとで実施された。

### (3) 結果

#### 分析対象者

まず分析対象として不適当な回答を除外した。具体的には、主人公が A さんに話した内容および A さんの反応についての自由記述から、シナリオを理解していないと判断された回答(e.g., 店内で老人がつかずいたので助けたなど 21 名)、記入漏れ(5 名)、全項目が同じ評定(1 名)、母国語が日本語以外(2 名)、および性別が「その他」であった回答(1 名)の計 28 名を除外した。なお、研究 2 の手続きが日本語で記述されたビネットを用いた場面想定

法であったことから、ビネットの理解度に大きな差が生じないように考慮し、母国語が日本語以外の回答者を除外した。また、想定した場面が同性であったことから、相互作用相手が同性か異性かの効果が生じる可能性を考慮し、性別がその他の回答者を除外した。その結果、120名(男性58名 女性62名；平均年齢19.90( $SD=0.95$ )歳)が分析対象となった。

### 被共感の知覚尺度

被共感の知覚尺度の5項目について、信頼性係数を算出した。具体的には、 $\alpha$ 係数ならびに1因子構造を想定した $\omega$ 係数を用いた。その結果、十分な内的一貫性を示す値が得られた( $\alpha = .89$ ,  $\omega = .90$ )。このことから、被共感の知覚尺度は1因子構造を想定することが適切だと考えられた。

他者からの共感を知覚しやすい状況において被共感の知覚尺度の得点が高くなるかどうかを検討するため、参加者の性別(男性=0.5 女性=-0.5)、Aさんの反応(実験群=0.5 対照群=-0.5)、および標準化された嬉しさの評価を説明変数、標準化された被共感の知覚尺度の項目平均値を目的変数とした重回帰分析を行った(Table 2.3.1.に群ごとの平均値および $SD$ を示した)。性別および標準化された嬉しさの評価は、統制変数として投入された。すべての変数は標準化され、3要因交互作用までのすべての交互作用項が投入された。その結果、Aさんの反応( $\beta = 1.05$ ,  $SE = 0.14$ ,  $p < .001$ )、嬉しさの評価( $\beta = 0.20$ ,  $SE = 0.08$ ,  $p = .015$ )およびAさんの反応と嬉しさの評価の交互作用項( $\beta = 0.45$ ,  $SE = 0.16$ ,  $p = .007$ )が有意であった。多重共線性はみられず( $VIFs < 1.50$ )、決定係数は有意であった( $R^2 = .50$ ,  $F(7, 112) = 16.28$ ,  $p < .001$ )。交互作用が有意であったため、単純傾斜検定を行った(Figure 2.3.1.)。その結果、

実験群では嬉しさの評価が高い人ほど被共感の知覚得点が有意に高かった( $\beta = 0.42, SE = 0.11, t(112) = 3.77, p < .001$ )。対照群では、有意な関連がみられなかった( $\beta = -0.03, SE = 0.12, t(112) = 0.28, p = .78$ )。

つぎに、被共感の知覚尺度得点が、ビネット上のAさんとの自他の重なるの知覚の程度およびAさんへの好感と正の関連を示すかどうか検討するため、相関分析を行った。5項目で測定したAさんとの自他の重なるの知覚の程度は、その項目平均値を自他の重なるの知覚得点とした( $\alpha = .90, \omega = .91$ )。1項目で測定したAさんへの好感は、素点を好感得点として用いた。その結果、被共感の知覚尺度得点と自他の重なるの知覚得点に有意な正の関連がみられた( $r = .68, t(118) = 10.04, p < .001$ )。また、被共感の知覚尺度得点と好感得点に有意な正の関連がみられた( $r = .86, t(118) = 18.04, p < .001$ )。

Table 2.3.1.

群ごとの嬉しさの評価および被共感の知覚得点の平均値(*SD*)

	嬉しさの評価	被共感の知覚
実験群	8.28(1.78)	5.93(1.76)
統制群	8.08(1.62)	3.56(1.38)

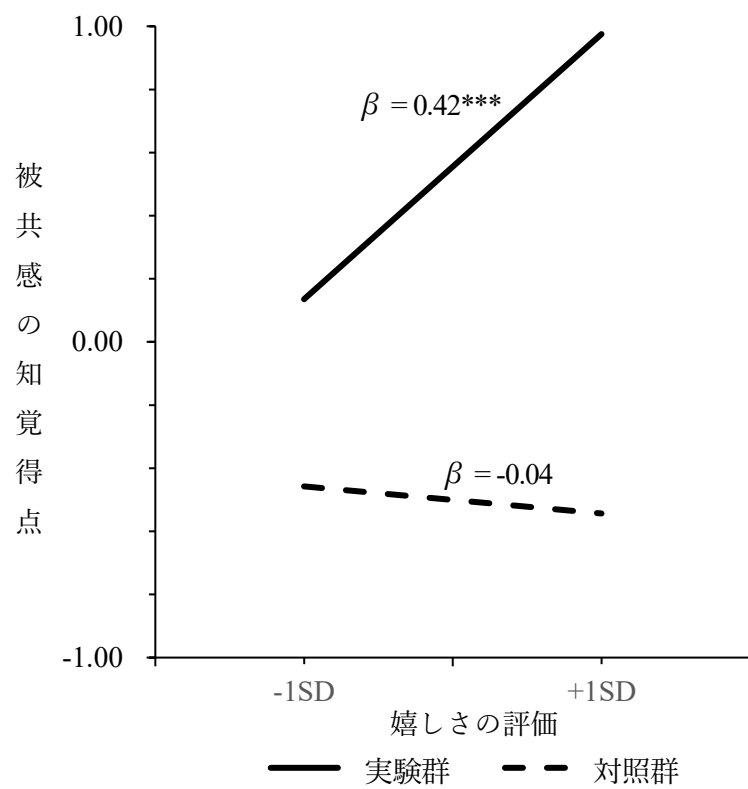


Figure 2.3.1. 実験群・対照群ごとの嬉しさの評価と被共感の知覚得点の関連

## 被共感の知覚が自他の重なる知覚に及ぼす効果

被共感の知覚が自他の重なる知覚に及ぼす効果を検討するため、共感的反応の有無を独立変数、自他の重なる知覚得点を従属変数とする  $t$  検定を行った。その結果、共感的反応の有無によって自他の重なる知覚得点に有意な差がみられた( $t(96.69) = 5.19, p < .001$ )。共感的反応を受けた実験群( $M = 4.08, SD = 1.84$ )は、共感的反応を受けなかった対照群( $M = 2.60, SD = 1.19$ )よりも自他の重なる知覚得点を高く評価していた。

### (4) 考察

研究3では、他者に共感されたと思う程度を測定する5項目の被共感の知覚尺度を作成した。そして、その妥当性を検討するため、他者に共感されたと知覚しやすい状況とそうでない状況を想定し、場面想定法による実験を行った。

被共感の知覚尺度は、2つの結果から妥当性が支持された。第一に、他者に共感されたと知覚しやすい実験群は、そうでない統制群よりも、被共感の知覚尺度の得点が高いことが示された。したがって、作成した被共感の知覚尺度は、他者からの共感を知覚した際に高い得点を示し、一方で他者からの共感を知覚しなかった際には低い得点を示すことが示唆された。第二に、被共感の知覚尺度得点が、ビネット上のAさんとの自他の重なる知覚の程度およびAさんへの好感と正の関連を示すのか検討したところ、予測通りの結果が得られた。これらの結果は、被共感の知覚尺度の妥当性を支持する結果と言えるだろう。

また、Aさんに話をした自分自身の経験の嬉しさとAさんの反応による交互作用効果が示された。具体的には、Aさんから共感的反応を受け、被共感の知覚が生じやすい状況を想定した実験群では、経験の嬉しさを高く評価していた人ほど、被共感の知覚尺度の得点が高かった。一方で、統制群においては、経験の嬉しさと被共感の知覚尺度に関連はみられなかった。この結果は、他者から共感的反応を受けた場合、その共感の対象となった経験が強い嬉しさを伴うものであるほど、その他者からの共感強く知覚されることを示唆している。したがって、共感された過去の経験に伴う感情の強さは、他者からの共感的反応が被共感の知覚に及ぼす影響を調整する要因となる可能性が考えられる。

ただし、本論文の目的は、他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす影響を検討することである。そのため、他者からの共感的反応が被共感の知覚に及ぼす影響を共感された過去の経験に伴う感情の強さによる調整効果について、これ以上の検討は行わない。しかしながら、研究2で示されたこの結果は、他者からの共感的反応を受けた人が、共感されたとどの程度思うのかという問題について、より詳細な予測を可能にするための調整要因を示したといえる。したがって、今後の被共感に関する研究に大きく寄与すると考えられる。

#### 2.4. 第二章のまとめ

第二章では、3つの研究を行い、Goldstein et al.(2014)が示した他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果、およびその効果のプロセスについて検討および問題点の解決を試みた。他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果のプロセスモデル(研究 1)をもとに、第二章の研究で明らかになったことを Figure 2.4.に示した。

研究 1 では、Goldstein et al.(2014)が示した、他者からの視点取得の表明の効果および、その効果のプロセスについて検討した。その結果、他者からの視点取得の表明を受けることが、被視点取得の知覚、自他の重なる知覚、そして他者へのポジティブな評価を促進することが示された。したがって、他者からの視点取得の表明がそれぞれの変数に及ぼす効果については、Goldstein et al.(2014)と同様の結果が支持された。一方で、他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果のプロセスについては、Goldstein et al.(2014)とは異なる結果がみられた。Goldstein et al.(2014)は、他者からの視点取得の表明が他者へのポジティブな態度を促進する効果が、被共感の知覚と自他の重なる知覚それぞれに媒介される多重媒介モデルを示したのに対して、研究 1 では、他者からの視点取得の表明が被共感の知覚を促進し、それによって自他の重なり、および他者へのポジティブな態度が順に影響されるモデルが支持された。

研究 2 では、被共感の知覚が自他の重なる知覚を促進するという現象が存在するのかどうかを確認するため、過去の被共感経験における内的な変化を問う質問紙調査を行った。その結果、被共感の知覚によって、自他の重なる知覚が促進されることが示された。ま



た、上記の結果にあわせて、今後の被共感研究に寄与すると考えられる資料的知見が得られた。

研究3では、研究1の問題点および研究2で解決できなかった問題に注目し、その解決を試みた。具体的には、研究1の問題点として、被共感の知覚の測定が1項目で行われていたことを指摘し、被共感の知覚を測定するための妥当な尺度の作成を行った。その結果、5項目からなる被共感の知覚尺度が作成された。また、研究2で解決できなかった点として、被共感の知覚が自他の重なる知覚を促進する因果関係について、実験による実証的な検討を行った。その結果、他者からの共感的反応を受けた人は、共感的反応を受けなかった人よりも、自他の重なりを強く知覚することが示された。

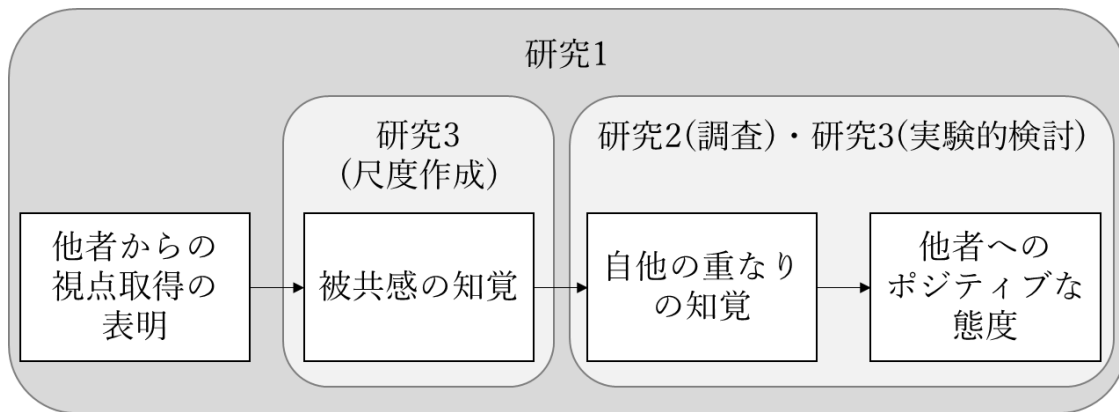


Figure 2.4. 第二章の各研究と明らかになったことの対応

## 第三章

感情的視点取得と認知的視点取得を

区別した検討

第三章では、2つの研究によって、他者からの感情的視点取得および認知的視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果について検討した。まず、研究4では、他者からの感情的視点取得の表明および他者からの認知的視点取得の表明を区別し、それぞれが被共感の知覚に及ぼす効果について検討した。つぎの研究5では、研究4の結果を踏まえて、感情的視点取得に注目したうえで、他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果、およびその効果のプロセスについて検討した。

### 3.1. 研究4: 他者からの感情的視点取得および認知的視点取得を知覚することが被共感の知覚に及ぼす影響

#### (1) 目的

研究4の目的は、感情的視点取得と認知的視点取得を区別し、それぞれについて他者からの表明が被共感の知覚に及ぼす効果を検討することであった。被共感の知覚のみに注目したのは、研究1で示されたモデルにおいて(Figure 2.1.3.参照)、他者からの視点取得の表明が直接的に影響するのは被共感の知覚のみであることが示されたためであった。

序論で述べた通り、他者に視点取得されたと思うことが被共感の知覚を促進するのは、人は、おそらく自身の経験から、視点取得が共感を促進することを知っているため、自分自身が視点取得の対象になった際には、共感をされているだろうと考えるためだと指摘されている(Goldstein et al., 2014)。この指摘は、視点取得が共感を促進することを前提として、他者からの視点取得が被共感の知覚を促進するメカニズムを説明している。

しかしながら、すべての視点取得が共感を促進するわけではない。感情的視点取得することと認知的視点取得をすることを区別して、共感を促進する効果について検討した研究では、感情的視点取得をすることのみが他者への共感を促進することが示されている(Oswald, 1996)。したがって、人は視点取得が共感を促進することを経験的に知っているため、被視点取得の知覚によって被共感の知覚が促進されるというメカニズムに従えば(Goldstein et al., 2014)、共感を促進する感情的視点取得と共感を促進しない認知的視点取得を区別したとき、他者からそれぞれの視点取得をされることが共感の知覚に及ぼす効果は異なる可能性がある。そこで、研究4では、感情的視点取得と認知的視点取得を区別し、他者からのそれぞれの視点取得の表明が共感の知覚に及ぼす効果を検討する。

研究4の実験手続きは、研究1の実験手続きと同様の流れであるものの、操作される要因以外の点においても2つの点で異なっている。第一に、エッセイ記述課題のテーマである。研究1では、ポジティブな感情経験を伴う個人的な経験について記述するように求めていたのに対して、研究4ではある対象についての意見という、比較的に感情的にニュートラルであり、かつ個人的経験とも絡みにくい事柄の記述を求めた。これは、研究4が感情的視点取得と認知的視点取得を同時に扱うためであった。感情喚起を伴う個人的な経験について記述してもらった場合、参加者は、記述した経験において喚起された感情に注目してしまい、認知的視点取得の対象となる思考は注目されにくくなる可能性が考えられた。そのため、感情的によりニュートラルであり、かつ個人的な経験も絡みにくいものとして、ある対象についての意見をエッセイ記述課題のテーマとし、その意見の感情的理由と論理

的な理由を記述してもらうことで、参加者の感情的側面ないし認知的側面のどちらかに参加者の注意が集まらないようにした。

第二に、パートナーによる視点取得の表明の方法を変更した。研究1では、パートナーによる視点取得の表明を、パートナーが回答したとされる質問紙上のリッカート式項目の回答パターンによって、視点取得の表明あり条件と表明なし条件が操作された。一方で、研究4では、パートナーによる感情的視点取得および認知的視点取得の表明を、パートナーが回答したとされる質問紙上の文章によって操作した。これは、感情的視点取得と認知的視点取得それぞれの表明について、研究1と同様にパートナーが回答したとされるリッカート式項目の回答で操作した場合、研究1と比較して必要となる項目数が2倍になり、参加者が項目を読み取りにくくなる可能性が考えられたためであった。

研究4は、日本大学文理学部研究倫理委員会の承認のもと実施された(承認番号 30-65)。

## (2) 方法

### 研究参加者

参加者は、例数設計に基づいて募集された。研究1では、被共感の知覚を従属変数とした重回帰分析において、非常に大きな効果量が示された( $R^2 = .79$ )。そこで、GPower3.1を用いて、有意水準  $\alpha = .05$ 、効果量大( $f = .40$ )、検定力  $1 - \beta = .80$  を基準に例数設計を行った。その結果、算出されたサンプルサイズは52名であった。回答の不備などによって除外される参加者数を考慮し、60名を目安に参加者を募集した。そして、都内大学に通う学生

61人(男性12名, 女性48名, 無回答1名)が参加した。平均年齢は19.41歳( $SD = 0.82$ 歳)であった。

## 実験デザイン

実験デザインは2要因各2水準の参加者間計画であった。すなわち1つ目の要因は感情的視点取得の表明(表明あり vs 表明なし)であり, 2つ目の要因は認知的視点取得の有無(表明あり vs 表明なし)であった。

## 手続き

研究4では, 個別式の実験室実験を行った。ただし, 実験者による監督が可能な範囲で最大6名までが同時に参加した。参加者はカバーストーリーとして, 実験について以下の説明を受けた。(a)研究4は他者の意見の評価に評価者の性格特性が与える影響について検討する調査であること, (b)参加者には別室で待機している別の参加者と通し番号(1-10)によってランダムにペアを組んでもらうこと, (c)研究4は2つのフェーズから構成され, フェーズ1では参加者が意見表明を行いパートナーがそれに対して評価を行うこと, 後続のフェーズ2では役割を入れ替えて行うことが説明された。しかし, 実際には別室の参加者は存在せず, 実験者が架空のフィードバックを行うことでパートナーからの感情的視点取得の有無およびパートナーからの認知的視点取得の有無が操作された。通し番号は, 別室にパートナーが存在するというディセプションの信ぴょう性を高めるための手続きであった。また, 参加者が読み手となるフェーズ2は実施されなかった。

実験の説明を受けたあと、参加者は「行楽地でインスタ映えのための自撮り行動についての意見」を回答するための質問紙1を配布された。この質問紙はパートナーに公開されるため、他者に公開されても差し支えない範囲で回答するよう求めた。質問紙では、まず通し番号、参加者のイニシャル、および性別を尋ねた。そして、行楽地での自撮りに対する態度を測定する2つの問へ回答を求めた。第一に、インスタ映えのための自撮り行動への態度を測定する4項目10段階評定(1:まったくあてはまらない—5:ややあてはまらない, 6:ややあてはまる—10:とてもよくあてはまる)であった。具体的な項目は、(a)インスタ映えのための自撮りは悪いことではないと思う程度、(b)行楽地の環境に悪影響を及ぼすと思う程度、(c)インスタ映えのために自撮りしているのを見ると、嫌な気持ちになる程度、および(d)インスタ映えを求めた自撮りは観光の仕方として間違っていると思う程度であった。これらの項目は、予備調査によって回答が偏りにくい項目を選定した。第二に、上記4項目について、そのように思う総合的な理由を感情的な面と論理的な面の2側面から自由記述で回答を求めた。たとえば、(a)インスタ映えのための自撮りは悪いことではないと思うという項目の回答が10段階評定における8であった場合、自撮りは楽しいものだから(感情的理由)と、楽しそうな自撮りがSNS等で拡散され、行楽地の宣伝になるから(論理的な理由)の両方を記述してもらった。

次に、参加者の性格特性を測定すると説明し、日本語版 Ten items personality inventory(小塩・阿部・ピノ, 2012)への回答を求めた(質問紙2)。参加者は、質問紙2はパートナーに公開されないと説明された。この尺度は分析には用いないが、カバーストーリーの信ぴょう性を高めるために回答してもらった。その後、参加者の年齢、性別、および所属を回答し



てもらい、フェーズ1は終了した。再度性別を回答してもらったのは、質問紙1がパートナーに公開されると説明されていたためであった。質問紙1について他者に公開されても差し支えない範囲での回答を求めたため、参加者が性別を記入しない可能性を考慮し、パートナーに公開されないと説明された質問紙2でも性別の回答を求めた。

フェーズ1終了後、参加者が記述した意見をパートナーに読んでもらうための時間として、5分間の待機時間が設けられた。その際、参加者には、実験者の知人が実施する研究の予備調査として、迷路課題に取り組んでもらったが、実際には待ち時間の状況を統制するために実験者が用意した挿入課題であった。

待機時間のあと、参加者は、参加者の意見に対する架空のパートナーからの評価の一部を公開すると説明をうけ、パートナーが参加者に感情的視点取得ないし認知的視点取得をしていたかどうかフィードバックされた。フィードバックにはパートナーが評価のために回答した質問紙の一部を装ったプリントを用いた(以後、フィードバックに用いた質問紙をフィードバック質問紙という)。フィードバック質問紙には通し番号、性別、そしてパートナーが参加者の意見を読む際に感情的視点取得および認知的視点取得をしたかが記されていた。この際、通し番号および性別は参加者と同一とし、パートナーからの感情的視点取得の有無およびパートナーからの認知的視点取得の有無は実験者により操作された(具体的な実験操作については後述する)。この際、参加者にフィードバックされたのは上述したフィードバック質問紙に記載されたことだけであり、たとえばパートナーが参加者の意見にどの程度賛成したかといった評価についてはフィードバックされなかった。

フィードバックを確認後、参加者は、フィードバックにおけるパートナーの回答を理解したか(2択2項目)、パートナーが感情的視点取得と認知的視点取得をそれぞれどの程度していたと思うか(各2項目)、そして研究3で作成した被共感の知覚尺度(5項目)に回答した。全ての質問への回答終了後、ディブリーフィングを行い実験は終了した。

### パートナーからの感情的視点取得および認知的視点取得の表明の操作

パートナーからの感情的視点取得の表明およびパートナーからの認知的視点取得の表明の操作は、フィードバック質問紙上で行われた。フィードバック質問紙には感情的視点取得および認知的視点取得それぞれについて架空のパートナーの回答を示す項目が設けられていた。具体的には、感情的視点取得の有無については「1. パートナーの視点にたって、パートナーの感情を想像しながら意見を読みました」および「2. パートナーの視点にたったり、パートナーの感情を想像したりはせずに、私の視点で意見を読みました」という二者択一の項目があり、認知的視点取得の有無については、上記2項目の「感情」の部分に「考え」に置き換えた項目が提示された。以上の感情的視点取得および認知的視点取得の有無それぞれ2項目、すなわちパートナーが参加者の記述したエッセイを感情的視点取得および認知的視点取得をしながら読んだか否かを示す項目それぞれに手書きで丸印をつけることで、参加者を2(感情的視点取得の有無)×2(認知的視点取得の有無)のいずれかにランダムに割り付けた。

### 操作チェック項目

パートナーからの感情的視点取得の表明およびパートナーからの認知的視点取得の表明の操作チェックとして、2つの方法を用いた。第一に、フィードバック質問紙で提示されたパートナーの回答を理解したかどうか尋ねた2項目を利用した。参加者は、「パートナーは、あなたの意見をどのように読んでいましたか。パートナーの記述として正しいものをそれぞれ選んで○を付けてください」という設問の後、実験操作に用いたのと同様の二者択一の項目が感情と考えについてそれぞれ提示された。

第二に、被感情的視点取得の知覚および被認知的視点取得の知覚の程度を測定した。具体的には、パートナーが「あなたの立場にたって、あなたがどう感じたのかを想像した」および、「あなたの視点にたって、あなたの感情を想像した」と思う程度について、10段階評価(1:まったくあてはまらない—5:ややあてはまらない, 6:ややあてはまる—10:とてもよくあてはまる)で回答を求めた。被認知的視点取得の知覚の程度を測定した項目は、被感情的視点取得の知覚の程度を測定する上記の2項目において、「感じた」および「感情」をそれぞれ「考えた」および「思考」に書き換えた項目とした。これらの項目は、社会心理学の専門家2名により表面的妥当性が確認された。

### **(3) 結果**

#### **操作チェック**

実験参加者 61 名を対象に、フィードバックにおけるパートナーからの感情的・認知的視点取得の表明の操作がうまくできていたかどうかを確認した。まず、フィードバック質問紙におけるパートナーの回答を理解したかどうかをたずねた項目について、その回答が

フィードバック内容と一致しているかどうか検討した。その結果、61名のうち1名がフィードバック内容と一致しない回答であり、パートナーが参加者に対して感情的視点取得・認知的視点取得をしたかどうかの表明を正しく理解していなかったと考えられたため、分析から除外した。

つぎに、上記の操作によってパートナーからの感情的・認知的視点取得それぞれの知覚の程度に差があるかを検討した。具体的には、パートナーからの感情的視点取得およびパートナーからの認知的視点取得それぞれの知覚の程度を測定した各2項目の平均値を被感情的視点取得の知覚得点( $r = .64, t(59) = 6.48, p < .001$ )および被認知的視点取得の知覚得点( $r = .71, t(59) = 7.75, p < .001$ )とし、それぞれの得点を従属変数とした2(感情的視点取得の表明：表明あり vs 表明なし)×2(認知的視点取得の表明：表明あり vs 表明なし)の参加者間分散分析を行った。条件ごとの被感情的視点取得の知覚得点および被認知的視点取得の知覚得点についての記述統計量を Table 3.1.1.に示した。その結果、感情的視点取得の表明あり条件( $n = 31, M = 7.13, SD = 0.97$ )は感情的視点取得の表明なし条件( $n = 29, M = 3.52, SD = 2.38$ )よりも、また認知的視点取得の表明あり条件( $n = 29, M = 6.00, SD = 2.24$ )は認知的視点取得なし条件( $n = 31, M = 4.81, SD = 2.71$ )よりも被感情的視点取得の知覚得点が有意に高かった(順に  $F(1, 56) = 68.40, p < .001, \eta^2 = .51$  ;  $F(1, 56) = 7.85, p = .007, \eta^2 = .06$ )。交互作用効果は有意でなかった( $F(1, 56) = 3.03, p = .087, \eta^2 = .02$ )。そして被認知的視点取得の知覚得点を従属変数とした場合、感情的・認知的視点取得の表明それぞれの主効果が有意であった(順に  $F(1, 56) = 4.29, p = .043, \eta^2 = .03$  ;  $F(1, 56) = 64.23, p < .001, \eta^2 = .50$ )。感情的視点取得の表明あり条件( $n = 31, M = 5.66, SD = 2.34$ )は感情的視点取得の表明なし条件( $n = 29, M = 4.62, SD$

=3.10)よりも、また認知的視点取得の表明あり条件( $n = 29, M = 7.16, SD = 1.62$ )は認知的視点取得なしの表明条件( $n = 31, M = 3.29, SD = 2.26$ )よりも被認知的視点取得の知覚得点が高かった。交互作用効果は有意でなかった( $F(1, 56) = 3.53, p = .066, \eta^2 = .03$ )。

Table 3.1.1.

条件ごとの被感情的視点取得および被認知的視点取得の知覚得点の平均値と *SD*

感情的 視点取得	認知的 視点取得	<i>n</i>	被感情的視点取得 の知覚得点		被認知的視点取得 の知覚得点	
			<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>
表明あり	表明あり	15	7.37	0.92	7.20	1.36
	表明なし	16	6.91	0.99	4.22	2.16
表明なし	表明あり	14	4.54	2.33	7.11	1.90
	表明なし	15	2.57	2.08	2.30	1.98

上記の結果では、被感情的視点取得の知覚得点においても認知的視点取得の知覚得点においてもパートナーからの感情的視点取得の有無およびパートナーからの認知的視点取得の有無の両方の主効果が有意であった。このことから、感情的視点取得の表明ないし認知的視点取得の表明のうち一方があると、もう一方も高く知覚されることが示された。ただし、被感情的視点取得の知覚得点については感情的視点取得の表明あり条件のみで、被認知的視点取得の知覚得点については認知的視点取得の表明あり条件のみで、それぞれの平均値が尺度の midpoint(5.5) を超える値となっていた。被感情的視点取得の知覚および被認知的視点取得の知覚を測定した項目がリッカート式項目であったことから、尺度の midpoint を下回る得点は、パートナーからの共感を知覚していない回答だと解釈できる。すなわち、分散分析によって相対的な有意差が示されたとしても、尺度の midpoint を超えていなかった場合には、被共感の知覚は生じていないと考えられた。同時に、被感情的視点取得の知覚得点については感情的視点取得の表明あり条件のみで、被認知的視点取得の知覚得点については認知的視点取得の表明あり条件のみで、それぞれの平均値が尺度の midpoint(5.5) を超える値となっていたことについて、そのそれぞれの条件の平均値が尺度の midpoint よりも有意に大きいことが示されなければ、それぞれの視点取得の知覚が生じたとは言えないと考えられた。

そこで、被感情的視点取得の知覚得点について、感情的視点取得および認知的視点取得それぞれの表明あり条件の被感情的・被認知的視点取得の知覚得点が、尺度の midpoint(5.5) と有意に異なるかを検討するため、1 サンプル  $t$  検定を行った。その結果、感情的視点取得の表明あり条件の被感情的視点取得の知覚得点( $n = 31, M = 7.13, SD = 0.97$ )は尺度の midpoint と比較して有意に高かった( $t(30) = 9.39, p < .001, 95\%CI[6.77, 7.48]$ )。そして、認知的視点取得

の表明あり条件の被感情的視点取得の知覚得点( $n = 29, M = 6.00, SD = 2.24$ )は尺度の midpoint と有意な差を示さなかった( $t(28) = 1.20, p = .24, 95\%CI[5.15, 6.85]$ )。同様の分析を被認知的視点取得の知覚得点についても行った。その結果、認知的視点取得の表明あり条件の被認知的視点取得の知覚得点( $n = 29, M = 7.16, SD = 1.62$ )は尺度の midpoint と比較して有意に高かった( $t(28) = 5.52, p < .001, 95\%CI[6.54, 7.77]$ )。そして、感情的視点取得の表明あり条件の被認知的視点取得の知覚得点( $n = 31, M = 5.66, SD = 2.34$ )は、尺度の midpoint と有意な差を示さなかった( $t(30) = 0.38, p = .70, 95\%CI[4.80, 6.52]$ )。このことから、それぞれの被視点取得の知覚が生じるか生じないかという基準で検討した場合、被感情的視点取得の知覚は感情的視点取得の表明でのみ生じると考えられた。同様に、被認知的視点取得の知覚は認知的視点取得の表明でのみ生じると考えられた。

#### パートナーからの感情的・認知的視点取得の表明が被共感の知覚に及ぼす影響

パートナーからの感情的視点取得の表明およびパートナーからの認知的視点取得の表明が被共感の知覚に及ぼす影響を検討するため、2(感情的視点取得の表明：表明あり vs 表明なし)×2(認知的視点取得の表明：表明あり vs 表明なし)の参加者間分散分析を行った。従属変数は、被共感の知覚尺度 5 項目( $\omega = .84$ )の項目平均値であった。その結果、感情的視点取得の表明の主効果が有意であり( $F(1, 56) = 31.05, p < .001, \eta^2 = .32$ )、感情的視点取得の表明あり条件は感情的視点取得の表明なし条件よりも被共感の知覚得点が高かった。また、認知的視点取得の表明の主効果が有意であり( $F(1, 56) = 8.77, p = .005, \eta^2 = .09$ )、認知的視点取得の表明あり条件は認知的視点取得の表明なし条件よりも被共感の知覚得点が高かった。



交互作用効果は有意でなかった( $F(1, 56) = 0.51, p = .48, \eta^2 = .01$ )。条件ごとの被共感の知覚得点を Table 3.1.2. に示した。

上記の分析で、感情的視点取得の表明あり条件および認知的視点取得の表明あり条件は、それぞれの表明なし条件よりも被共感の知覚得点が高かったことが示された。ただし、これらの結果は、それぞれの視点取得の表明あり条件はそれぞれの視点取得なし条件よりも相対的に被共感の知覚得点が高かったということであり、この結果だけでそれぞれの視点取得の表明が被共感を知覚させるかどうかについては言及できない。そこで、それぞれの視点取得の表明あり条件の被共感の知覚得点について 1 サンプル  $t$  検定を行い、被共感の知覚得点の midpoint(5.5) よりも有意に大きいかどうかを検討した。その結果、感情的視点取得の表明あり条件は midpoint(5.5) よりも有意に大きな被共感の知覚得点を示したが( $t(30) = 3.79, p < .001, 95\%CI[5.84, 6.64]$ )、認知的視点取得の表明あり条件に有意な結果はみられなかった( $t(28) = 1.34, p = .19, 95\%CI[5.31, 6.40]$ )。

Table 3.1.2.  
条件ごとの被共感の知覚得点の平均値(SD)

		認知的視点取得		
		表明あり	表明なし	主効果
感情的	表明あり	6.61(1.02)	5.89(1.05)	6.24(1.08)
視点取得	表明なし	5.04(1.37)	3.85(1.51)	4.43(1.54)
主効果		5.86(1.43)	4.90(1.64)	

#### (4) 考察

研究 4 では、他者からの感情的視点取得の表明および認知的視点取得の表明を区別して、それぞれが被共感の知覚に及ぼす影響を検討した。その結果、感情的視点取得の表明および認知的視点取得の表明があった場合、それぞれの表明がない場合と比較してどちらも被共感を高く知覚することが示唆された。ただし、尺度の midpoint と比較して、被共感の知覚が生じたかという基準で検討した結果、感情的視点取得の表明は被共感の知覚を生じさせることが示唆されたものの、認知的視点取得の表明にこの効果は示されなかった。さらに、感情的視点取得の表明と認知的視点取得の表明が被共感の知覚に及ぼす交互作用効果はみられなかった。

上記の結果を考察するのにさきにかけて、研究 4 におけるそれぞれの実験操作(i.e., パートナーからの感情的視点取得の表明および認知的視点取得の表明)と、被感情的視点取得の知覚および被認知的視点取得の知覚の関連について考察する。研究 4 で操作したのはパートナーからの感情的視点取得および認知的視点取得の表明の有無であった。そして、操作チェックの結果、感情的視点取得の表明は被感情的視点取得の知覚を生じさせ、また認知的視点取得の表明は被認知的視点取得の知覚を生じさせることが示唆された。このことから、感情的視点取得の表明あり条件は、被感情的視点取得の知覚が生じた条件だと解釈できる。一方で、感情的視点取得の表明なし条件は、被感情的視点取得の知覚が生じなかった条件だと解釈できる。これと同様に、認知的視点取得の表明と被認知的視点取得の知覚が生じたかどうかについても解釈可能である。したがって、感情的視点取得の表明および

認知的視点取得の表明が示した効果は、それぞれ被感情的視点取得の知覚および被認知的視点取得の知覚が示す効果として解釈できると考えられる。そこで、感情的視点取得の表明および認知的視点取得の表明が被共感の知覚に及ぼす効果について、それぞれ被感情的視点取得の知覚および被認知的視点取得の知覚が被共感の知覚に及ぼす効果として考察する。

感情的視点取得の表明のみが被共感の知覚を生じさせることが示唆されたのは、感情的視点取得および認知的視点取得それぞれと共感の関連が異なるためであると考えられる。Goldstein et al.(2014)は、人は視点取得するとそのターゲット人物に共感することを経験的に知っているため、被視点取得の知覚があったときに被共感を知覚すると指摘している。そして、視点取得と共感の関連については、感情的視点取得は共感を促進するが、認知的視点取得にはその効果はみられないことが指摘されており(Oswald, 1996)、感情的視点取得をするとそのターゲット人物に共感することは経験されやすいが、認知的視点取得をしても共感は経験されにくいと考えられる。したがって、人は感情的視点取得するとそのターゲット人物に共感することを経験的に知っているため、被感情的視点取得の知覚があったときに被共感を知覚した一方で、認知的視点取得をしても共感しないため、被認知的視点取得の知覚があっても被共感を知覚しなかったと考えられる。これは、人は視点取得するとそのターゲット人物に共感することを経験的に知っているため、被視点取得の知覚があったときに被共感を知覚するという Goldstein et al.(2014)の指摘を支持する結果と言えるだろう。

### 3.2. 研究 5: 他者からの感情的視点取得の表明が対人認知に及ぼす影響<sup>13</sup>

#### (1) 目的

先述の研究 4 では、他者からの感情的視点取得の表明および認知的視点取得の表明それぞれが被共感の知覚に及ぼす効果を検討した。その結果、被共感の知覚を生じさせるのは、感情的視点取得の表明のみであることが示された。そこで、研究 5 以降では特に感情的視点取得の表明に注目し、対人認知に及ぼす影響を検討する。そして、研究 5 の目的は、他者からの感情的視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果ならびにその効果のプロセスを検討することである。具体的には、研究 1 で示された視点取得の表明の効果、ならびにその効果のプロセス(Figure 2.1.3.参照)が再現されるのかどうかを検討する。

ただし、研究 5 では、従属変数として被共感の知覚および自他の重なる知覚のみを扱った。これは、研究 1 で示された効果のプロセスにおいて、他者からの視点取得の表明が他者へのポジティブな態度を促進する効果は、被共感の知覚および自他の重なる知覚が媒介されていたためである。そして、視点取得の表明が自他の重なる知覚に及ぼす効果は、被共感の知覚に媒介されていた。このことから、研究 1 で示されたモデルが再現されるかどうかを検討するためには、まず感情的視点取得の表明、被共感の知覚および自他の重なる知覚の関連を明らかにするべきであると考えられた。

---

<sup>13</sup> 研究 5 は、鈴木・山川・坂本(2020b)をもとに修正・加筆を行い執筆した。

そこで研究 5 では、感情的視点取得の表明、被共感の知覚および自他の重なるの知覚の関連に注目し、研究 1 で示された結果が再現されるのかどうかを検討した。具体的には、以下の 2 つを検討課題とした。第一に、感情的視点取得の表明が被共感の知覚および自他の重なるの知覚それぞれに及ぼす効果について、研究 1 と同様の結果が再現されるかどうかである。すなわち、感情的視点取得の表明があると、それが無い場合に比べて、被共感の知覚および自他の重なるの知覚が促進されるかどうかを検討する。第二に、感情的視点取得の表明が自他の重なるの知覚に及ぼす効果が、被共感の知覚に媒介されるのかどうかである。研究 1 では、視点取得の表明が自他の重なるの知覚に及ぼす効果は、被共感の知覚に完全媒介されるモデルが示された。感情的視点取得の表明についても、完全媒介モデルが支持されるのかどうかを検討する。

研究 5 は、日本大学文理学部研究倫理委員会の承認のもと実施された(承認番号 01-4)。

## (2) 方法

### 実験デザインと参加者

実験デザインは、感情的視点取得の表明による 1 要因参加者間計画であった。参加者は、都内大学の心理学科必修科目の履修生 65 名(男性 24 名 女性 41 名)であった。平均年齢は 20.45 歳( $SD=0.98$ )歳であった。

参加者数は、例数設計に基づき決定した。研究 1 は、視点取得の表明が被共感の知覚および自他の重なるの知覚に及ぼす影響として、媒介分析において標準化単回帰係数  $\beta$   $s>0.70$  を報告している。この標準単回帰係数は、決定係数として算出すると  $R^2s>.49$  であ

る。これらの決定係数は、大きな効果量の目安である  $R^2 = .26(f^2 = .35)$  を大きく上回っていた(効果量の目安については、水本・竹内(2008)を参照)。そこで研究5では、大きな効果量( $f^2 = .35$ )を基準として例数設計を行った。その結果、必要な参加者数は49名であった。参加者の履修していた科目は5クラスに分かれていたが、例数設計にあわせてそのうち3クラスが実験に参加した。

## 手続き

静止画像のスライドが自動で再生される刺激を用いた場面想定法による実験を行った。参加者は、研究5について、「大学生が楽しいと思う講義内課題についての調査」と説明され、刺激を視聴するためのモニターが参加者1人あたり1台用意された。実験は個別式であったが、最大25名が同時に参加した。

まず、参加者には刺激が提示されるウェブサイトのURLが伝えられ、ウェブサイトにアクセスしてもらった。刺激を提示するウェブサイトは条件ごとに異なり、感情的視点取得の表明の条件にあわせて異なるURLがランダムに配布された。

実験では、大学の講義中に他者と2人で会話をする課題を行う場面が想定された。想定された場面は、参加者の属性にあわせて採用された。すなわち、研究5の参加者は心理学科に所属する学生であったため、大学の講義という日常的な場面であり、また講義内でコミュニケーションに関する課題が行われることが想像しやすいと考えられたため、大学の講義内課題として他者と会話をするという場面が採用された。そして参加者は、その場面を実際に経験するかのように想像し、主人公になったつもりで視聴するよう教示された。

刺激は一人称視点で作成されており、想定してもらった授業内課題の説明については文字で、他者と会話をする場面は他者のイラストおよびセリフで構成された(Figure 3.2.1.参照)。以下、呈示される刺激にあわせ、シナリオ上の主人公を「あなた」、そしてシナリオに登場する相互作用相手を「Kさん」と呼ぶ。

刺激は前半と後半に分かれており、実験者の指示のもと再生された。前半では、まず講義で隣に座っている人と会話をする課題に取り組むということが提示された。課題について、隣に座っていた初対面のKさんとペアを組んだこと、ここ一年くらいで経験した嬉しかったり楽しかったりした話をお互いにすること、そして最初にあなたが話し手となり、Kさんが聞き手になること、その後に話し手と聞き手を交代するということが説明された。ただし、Kさんの性別は参加者と同性になっていた。上記の説明のあと、Kさんとあいさつをする場面を視聴してもらい、前半は終了した。

その後、参加者は視聴した映像に従い、ここ1年くらいの嬉しかったり楽しかったりした経験について、Kさんに話す想定しながら記述してもらった。くわえて、記述してもらった経験について、おおよそ何か月前の経験か、記述した経験ほどの程度嬉しかったおおよび楽しかったか、その経験についてどの程度共感してもらいたい(2項目)およびどの程度感情的視点取得をしてもらいたい(1項目)に回答した(Table 3.2.2.参照)。すべての項目は10段階評定(1:まったくあてはまらない—5:ややあてはまらない, 6 ややあてはまる—10: とてもよくあてはまる)であった。

上記の項目に回答した後、参加者は映像刺激の後半を視聴した。後半では、参加者に記述してもらった経験についてKさんが話を聞いた後の場面を想定してもらい、その話を聞



いた K さんの反応が提示された。感情的視点取得の表明あり群では、K さんから「あなたの視点にたって、あなたの感じたことを想像しながらお話を聞きました」と伝えられた。対して感情的視点取得の表明なし群では、「あなたの視点に立ったり、あなたの感じたことを想像したりはせずに、客観的にお話を聞きました」と伝えられた。最後に K さんが「次は私の番ですね」と言う場面が再生され、映像刺激は終了した。例として、感情的視点取得の表明あり群の操作に用いた刺激画像を Figure 3.2.2. に示した。

その後、参加者は質問紙に回答した。まず、カバーストーリーにあわせたフィラー項目として、この課題を行う講義に参加したい程度および面白い講義だと思った程度についてそれぞれ 1 項目で回答した。くわえて、K さんからの被共感の知覚(被共感の知覚尺度：5 項目)、感情的視点取得の知覚(2 項目)、IOS 尺度(Inclusion of Other in the Self Scale; Aron et al., 1992)、および自他の重なるの知覚(6 項目)に回答してもらった(Table 3.2.1. および Table 3.2.3. 参照)。IOS 尺度を除くすべての項目は 10 段階評価(1:まったくあてはまらない-5:ややあてはまらない, 6 ややあてはまる-10: とてもよくあてはまる)であった。感情的視点取得の知覚を測定した項目は、研究 4 で使用された項目と同一のものであった。ただし、感情的視点取得の知覚および被共感の知覚尺度の項目は、主語を「あなた」とした。これにより、場面想定法であっても、参加者自身の知覚を回答してもらえると考えられた。

被共感の知覚および自他の重なるの知覚を測定する尺度について、回答順序による順序効果が生じないように、項目の提示順が異なる 2 種類の質問紙を用いた。具体的には、被共感の知覚および感情的視点取得の知覚に回答してから IOS 尺度および自他の重なるの知覚について回答する質問紙と、IOS 尺度および自他の重なるの知覚について回答してから被

共感の知覚および感情的視点取得の知覚に回答する質問紙が作成された。これらの質問紙は、ランダムに配布された。

最後に提示された場面がうまく想定できたか(3項目 Table 3.2.3.参照), 参加者の年齢, 性別を回答してもらい, デイブリーフィングを行って実験は終了した。



Figure 3.2.1. 提示された刺激の例。左図は文字による場面の説明の刺激画像。右図は他者との会話場面の刺激画像(男性用)。



Figure 3.2.2. 感情的視点取得の表明あり群の操作刺激。

## 自他の重なる知覚の測定項目

自他の重なる知覚を測定する項目は、研究1で自他の重なる知覚を測定するために用いた5項目を一部修正して使用した。具体的には、2つの修正を行った。第一に、研究1で用いた項目について、Goldstein et al.(2014)で自他の重なる知覚(Perceived Self-Other Overlap)を測定するために用いられた8項目(similarity, closeness, close association, connection, tie, link, bond, shared identity)を再度和訳しなおし、解釈可能な6項目が採用された。その結果、研究1で用いた5項目(i.e., 似ている程度, 親密さを感じる程度, パートナーの持っているパートナー自身の自己イメージと参加者の自己イメージが似ている程度, 身近な存在である程度, およびパートナーとの絆があると感じる程度)のうち、似ている程度および親密さを感じる程度を除く3項目が修正された(Table 3.2.1 参照)。また、IOS尺度(Aron et al., 1992)は、自己と他者を表す2つの円の距離および重なるの程度を回答してもらい、自他の重なる知覚を測定できる尺度である。この尺度は、自他の重なる知覚を測定した6項目の妥当性を確認するために測定された。

Table 3.2.1.  
被共感の知覚および自他の重なるの知覚の測定項目

---

被共感の知覚

---

あなたに共感していた

あなたに対してポジティブな気持ちを感じていた

あなたの話をきいても、特になにも感じていなかった

あなたと同じ気持ちになっていた

あなたの気持ちを共有できた

---

自他の重なるの知覚

---

私とパートナーは似ていると感じる

パートナーとの親密さを感じる

パートナーと近しい関係であるように感じる

パートナーとのつながりを感じる

パートナーとの一体感を感じる

パートナーと同じような自己イメージを持っていると感じる

---

Table 3.2.2.  
感情的視点取得および共感されたい程度の測定項目

---

私の視点に立ち、気持ちを想像しながら聞いてもらいたい<sup>1</sup>

話をきいて、私と同じ様に感じてもらいたい<sup>2</sup>

好感をもってもらいたい<sup>3</sup>

---

*Note:* <sup>1</sup>感情的視点取得をされたい程度の測定項目。<sup>2</sup>被共感のうち、感情共有についての測定項目。<sup>3</sup>被共感のうち、他者指向的感情反応についての測定項目。

Table 3.2.3.

感情的視点取得の知覚および場面想定ができた程度の測定項目

---

感情的視点取得の知覚

あなたの立場にたって、あなたがどう感じたのかを想像した

あなたの視点にたって、あなたの感情を想像した

---

場面想定ができた程度

主人公が経験した場面を想像できた

自分が主人公になったつもりで視聴できた

映像の場面をうまく想像できなかった(逆転項目)

---



### (3) 結果

#### 操作チェック

まず、参加者が提示された場面をうまく想定して回答できたかどうかについて検討した。具体的には、提示された場面をうまく想定できたかどうか、主人公になったつもりで刺激を視聴できたかどうかをたずねた3項目( $\omega = .92$ )の項目平均を算出し、その値が尺度の中間点(5.5)を上回っているかどうかをすべての参加者について確認した。この得点が中間を上回った参加者は、提示された場面を十分に想定し、かつ主人公になったつもりで回答できていたと判断された。一方で中間を下回った参加者(中間と一致も含む)は、提示された場面をうまく想定できず、かつ主人公になったつもりではなく観察者として回答していたと判断された。その結果、14名の参加者が分析から除外された。

つぎに、記述課題の内容について、教示に従いポジティブな経験が記述されていたかどうかを確認した。具体的には、記述した経験の嬉しかった程度および楽しかった程度それぞれについて、回答を確認した。これらの項目は10段階評定(1:まったくあてはまらない—5:ややあてはまらない,6:ややあてはまる—10:とてもよくあてはまる)であったため、それらの回答が6(ややあてはまる)以上であれば記述された経験はポジティブであったと判断された。記述した経験の嬉しかった程度および楽しかった程度それぞれについて、すべての参加者の回答を確認したところ、すべての参加者が嬉しかった程度と楽しかった程度をたずねた項目について6(ややあてはまる)以上の回答をしていた(嬉しかった程度  $M =$

8.86,  $SD=1.20$ , 楽しかった程度  $M=9.10, SD=1.25$ )。このことから、すべての参加者はポジティブな経験について記述していたと考えられた。

最後に、感情的視点取得の表明の操作について検討した。具体的には、感情的視点取得の表明あり群ではパートナーからの感情的視点取得の知覚について測定した2項目( $r=.90, p<.001$ )の項目平均が尺度の midpoint(5.5)を上回っているかどうかを、感情的視点取得の表明なし群では midpoint と一致ないしそれ以下であるかどうかを確認した。その結果、感情的視点取得の表明あり群では5名が、感情的視点取得の表明なし群では3名がうまく操作できていないと判断された。

上記の操作チェックの結果、43名が分析対象となった。具体的には、感情的視点取得の表明あり群20名、感情的視点取得の表明なし群23名であった。

### 感情的視点取得の表明の効果

他者からの感情的視点取得の表明が被共感の知覚および自他の重なる知覚に及ぼす影響について検討した。まず、被共感の知覚得点および自他の重なる知覚得点を算出した。具体的には、被共感の知覚尺度の5項目( $\omega=.88$ )および自他の重なる知覚の程度を測定した6項目( $\omega=.94$ )の項目平均をそれぞれの得点とした。自他の重なる知覚得点については、IOS 尺度との相関を確認した。その結果、有意な相関がみられたため( $r=.47, p=.002$ )、研究5で用いた6項目は自他の重なる知覚の程度を測定するための妥当性を備えていると判断された。感情的視点取得の表明による群ごとの被共感の知覚得点および自他の重なる知覚得点の平均値と標準偏差を Table 3.2.4. に示した。

Table 3.2.4.

感情的視点取得の表明ごとの被共感の知覚得点および自他の重なるの知覚の平均値(*SD*)

	被共感の 知覚得点	自他の重なるの 知覚得点
感情的視点取得	<i>Mean(SD)</i>	<i>Mean(SD)</i>
表明あり	6.52(1.22)	4.48(1.45)
表明なし	4.33(1.20)	2.81(1.21)

感情的視点取得の表明を独立変数、被共感の知覚得点および自他の重なるの知覚得点それぞれを従属変数とした重回帰分析を行った。その際、他者に共感および感情的視点取得をされたい程度の影響を統制した。具体的には、記述してもらった出来事について共感されたい程度を測定した2項目( $r = .31, p = .04$ )の項目平均および感情的視点取得をされたい程度を測定した1項目の得点を統制変数として投入した。分析に用いられたすべての変数は標準化され、分析には3要因の交互作用項(感情的視点取得の表明×共感されたい程度×感情的視点取得されたい程度)まで投入された。その結果、被共感の知覚得点および自他の重なるの知覚得点のどちらを従属変数としたモデルにおいても、有意な交互作用項はみられなかった( $|\beta|s < 0.17, ts < 1.27, ps > .21$ )。そこで、上記のモデルから交互作用項を除いたモデルを採用した。その結果、被共感の知覚については感情的視点取得の有無が有意であった( $\beta = 0.67, SE = 0.11, p < .001$ )。感情的視点取得の表明あり群( $M = 6.52, SD = 1.22$ )は、感情的視点取得の表明なし群( $M = 4.33, SD = 1.20$ )よりも被共感の知覚得点が有意に高かった。決定係数は有意であり( $R^2 = .54, F(3, 39) = 15.32, p < .001$ )、多重共線性はみられなかった( $VIFs < 1.38$ )。自他の重なるの知覚得点についても、感情的視点取得の表明が有意であった( $\beta = 0.51, SE = 0.13, p < .001$ )。感情的視点取得の表明あり群( $M = 4.48, SD = 1.45$ )は、感情的視点取得の表明なし群( $M = 2.81, SD = 1.21$ )よりも自他の重なるの知覚得点が有意に高かった。決定係数は有意であった( $R^2 = .38, F(3, 39) = 7.96, p < .001$ )。重回帰分析の結果を Table 3.2.5. に示した。

Table 3.2.5.

被共感の知覚得点および自他の重なるの知覚得点を従属変数とした重回帰分析の結果

	被共感の知覚得点			自他の重なるの知覚得点		
	$\beta$	<i>SE</i>	<i>t</i> 値	$\beta$	<i>SE</i>	<i>t</i> 値
感情的視点取得の表明	0.67	0.11	6.16 ***	0.51	0.13	3.98 ***
被感情的視点取得欲求	-0.08	0.13	0.62	0.16	0.15	1.06
被共感欲求	0.34	0.13	2.68 *	0.20	0.15	1.39

※ \*\*\*  $p < .001$  \*  $p < .05$

### 感情的視点取得の表明の効果のプロセス

感情的視点取得の表明、被共感の知覚および自他の重なる知覚の関連および感情的視点取得の表明の効果のプロセスについて検討した。まず、感情的視点取得の表明、被共感の知覚得点および自他の重なる知覚得点について変数間の関連を検討するため、相関分析および偏相関分析を行った。その結果、相関分析ではすべての組み合わせにおいて有意な相関がみられた( $r_s > .53$ ,  $t_s(41) > 4.00$ ,  $p_s < .001$ )。そして、偏相関分析の結果、自他の重なる知覚得点を統制した感情的視点取得の表明と被共感の知覚得点の偏相関係数は有意であった( $r_p = .48$ ,  $t(40) = 3.47$ ,  $p = .001$ )。一方で、被共感の知覚得点を統制した感情的視点取得の表明と自他の重なる知覚得点の偏相関係数は有意でなかった( $r_p = .02$ ,  $t(40) = 0.10$ ,  $p = .922$ )。そして、感情的視点取得の表明を統制した被共感の知覚得点と自他の重なる知覚得点の偏相関係数は有意であった( $r_p = .68$ ,  $t(40) = 5.83$ ,  $p < .001$ )。これらの結果から、感情的視点取得の表明と自他の重なる知覚得点には直接的な関連がないことが示された。相関分析および偏相関分析の結果を Table 3.2.6.に、またこの結果から示された媒介モデルを Figure 3.2.3.示した。

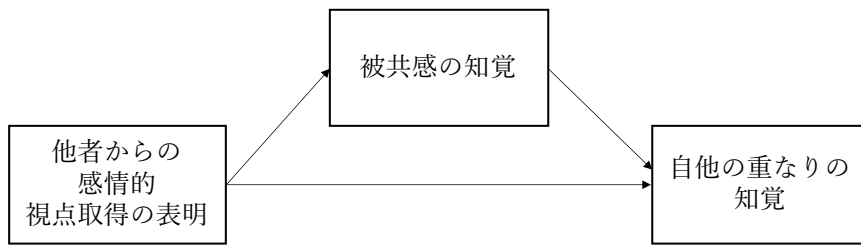


Figure 3.2.3. 感情的視点取得の表明の効果の仮説モデル。

Table 3.2.6.

感情的視点取得の表明，被共感の知覚得点および自他の重なるの知覚得点の関連

	感情的視点取得の表明 (A)	被共感の知覚得点 (B)	自他の重なるの知覚得点 (C)
A.	—	.67***	.53***
B.	.48**	—	.78***
C.	.02	.68***	—

Note: \*\*\*  $p < .001$ ; \*\*  $p < .01$

右上の行列に相関係数を，左下の行列に偏相関係数を示した。



つぎに、Figure 3.2.3.の媒介モデルについて、それぞれの変数間の影響および間接効果について検討するため、媒介分析を行った。独立変数は感情的視点取得の表明、従属変数は自他の重なるの知覚得点、そして媒介変数は被共感の知覚得点であった。研究 1 および Goldstein et al.(2014)と同様に、ブートストラップ法を用いた媒介分析を行った。サンプリング回数は 1000 であった。すべての変数は標準化された。まず、感情的視点取得の表明から自他の重なるの知覚得点への直接効果を検討した。その結果、有意なパスが得られた ( $\beta_0 = 1.05, SE = 0.26, 95\%CI[0.53, 1.54]$ )。つぎに、被共感の知覚得点を投入した媒介モデルについて検討した。その結果、感情的視点取得の表明から被共感の知覚得点へのパスは有意であった ( $\beta_1 = 1.33, SE = 0.22, p < .001, 95\%CI[0.89, 1.77]$ )。そして、被共感の知覚得点から自他の重なるの知覚得点へのパスは有意であった ( $\beta_2 = 0.77, SE = 0.13, p < .001, 95\%CI[0.53, 1.03]$ )。感情的視点取得の表明から自他の重なるの知覚得点への直接効果は、有意でなくなった ( $\beta_0' = 0.03, SE = 0.32, p = .94, 95\%CI[-0.58, 0.69]$ )。間接効果は有意であった ( $\beta_1 \times \beta_2 = 1.03, SE = 0.22, p < .001, 95\%CI[0.62, 1.45]$ )。媒介分析の結果を Figure 3.2.4.に示した。

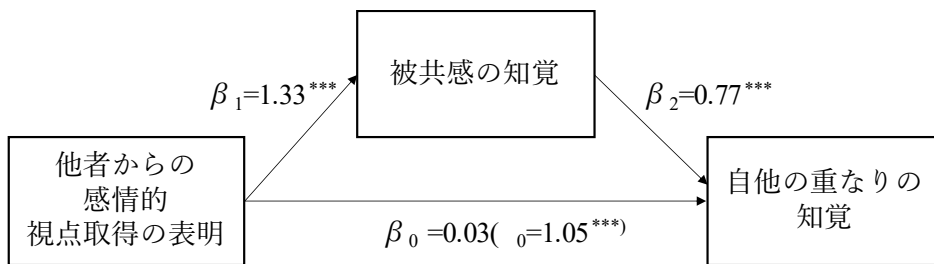


Figure 3.2.4. 感情的視点取得の表明が自他の重なるの知覚得点に及ぼす影響を被共感の知覚得点が媒介する媒介モデル(\*\*\*)  $p < .001$ 。括弧内は媒介変数投入前の直接効果を示した。

#### (4) 考察

研究 5 では、他者からの感情的視点取得の表明が被共感の知覚および自他の重なるの知覚に及ぼす影響について検討した。まず、被共感の知覚得点および自他の重なるの知覚得点を従属変数とした重回帰分析を行った結果、K さんが参加者に対して感情的視点取得をしたと表明する感情的視点取得の表明あり群は、K さんが客観的視点に立っていたと表明される感情的視点取得の表明なし群よりも、被共感の知覚得点および自他の重なるの知覚得点が有意に高かった<sup>14</sup>。この結果は、他者からの感情的視点取得の表明が、被共感の知覚および自他の重なるの知覚を促進することを示唆した。したがって、視点取得の表明が被共感の知覚および自他の重なるの知覚を促進するという研究 1 の結果が、感情的視点取得の表明においても再現されたといえるだろう。また、重回帰分析では統制変数として共感されたい程度と感情的視点取得をされたい程度を投入していた。したがって、他者からの感情的視点取得の表明が被共感の知覚および自他の重なるの知覚に及ぼす影響は、他者からの共感や感情的視点取得を求める傾向を統制しても示される可能性が示唆された。

ただし、感情的視点取得の表明が自他の重なるの知覚に及ぼす効果については、解釈に注意が必要だろう。感情的視点取得の表明あり条件は感情的視点取得の表明なし条件よりも自他の重なるの知覚得点を有意に高く評価していたが、その平均値はどちらの条件においても尺度の midpoint(5.5)を下回っていた。このことから、他者からの感情的視点取得の表明

---

<sup>14</sup> 客観的視点は他者の視点を取っていないため、認知的視点取得とは異なるものであることに注意されたい。

が自他の重なる知覚に及ぼす影響は相対的なものであり、感情的視点取得をしたという表明を受けたとしても、自他の重なりが生じるほどの効果はみられなかったと考えられる。しかし、研究5で想定した場面は初対面の相手との交流であった。相手についての情報がほとんどない場面であっても、感情的視点取得の表明によって自他の重なりが相対的に高く知覚されるということは、重要な知見と言えるだろう。

また研究5では、他者からの感情的視点取得の表明の効果について、そのプロセスを検討した。その結果から、他者からの感情的視点取得の表明が自他の重なる知覚を促進する効果は、被共感の知覚が高まることに媒介されることが示唆された。示唆されたモデルは完全媒介モデルであり、感情的視点取得の表明が自他の重なる知覚に及ぼす直接効果はみられなくなった。この結果は、研究1で支持された視点取得の表明、被共感の知覚および自他の重なる知覚の関連と同様のものであった。したがって、他者からの視点取得の表明の効果について検討した研究1で支持されたモデルが、感情的視点取得の表明においても支持されることが示唆された。

研究5の問題について述べる。研究5の問題として、多くの参加者が分析から除外されたことが挙げられる。まず、実験において想定された場面をうまく想定できなかった参加者が多くみられた。研究5では、場面想定法を実施するにあたり、参加者が想像しやすい場面を採用した。具体的には、大学の講義という場面を採用し、くわえてイラストを用いた映像を参加者ひとりひとりに割り当てられたモニターで再生させた。それにも関わらず、参加者の21.5%(65名中14名)がうまく想定できなかったとして分析から除外された。

その原因として、実験を実施した際に参加者が疲労していた可能性が考えられる。実験は、2 時限連続で行われるコンピュータ操作の実習授業の後に実施された。実験では、参加者の想像しやすい場面を採用したものの、シナリオを主人公になったつもりで視聴し、かつ他者の内的状態(i.e.,Kさんは感情的視点取得や共感をしていたか)を想像するという、認知的負荷の大きい内容であった。そのため、除外された参加者は、2 時限連続の実習形式の授業によって疲労しており、場面の想像がうまくできなかった可能性がある。ただし、除外された参加者は、感情的視点取得の表明の各条件に7名ずつであり、条件間での想定しにくさに差があったとは考えにくい。すなわち、他者からの感情的視点取得の表明をされるという場面そのものが、人にとって特に想定しやすかったり、また想定しにくかったりするものではないと考えられる。

さらに、呈示された場面の想定ができた参加者について感情的視点取得の表明と被感情的視点取得の知覚の程度について確認した結果、感情的視点取得の表明あり群では、Kさんから感情的視点取得をしたと表明されたにも関わらず、5名がKさんからの感情的視点取得を知覚していなかった。また、感情的視点取得の表明なし群では、Kさんから「客観的に話を聞いた」と表明されたにも関わらず、3名がKさんからの視点取得を知覚していた。

序論で概説した通り、他者からの視点取得の表明が被視点取得の知覚に及ぼす効果を調整する要因が指摘されているものの(Bermdsen & Wenzel, 2021; Goldstein et al., 2014)、それらの要因は、他者との経済的背景の差や視点取得する側が視点取得される側の感情を正しく想像できたかどうか(i.e.,感情の一致の有無)であり、視点取得の表明を受けた場での状況

的な要因に限られる。しかしながら、研究5の手続きにおいて、他者との何らかの差に関する情報や感情の一致の有無といった情報は参加者に与えられておらず、先行研究が明らかにした状況的な調整要因の効果が働いていたとは考えにくい。したがって、研究5で他者からの視点取得の表明があるにも関わらず、視点取得はされていないと知覚した人がいたことや、逆に「客観的視点に立った」と表明されたにも関わらず、視点取得されたと知覚した人がいたことは、他者からの視点取得を知覚するかどうかの個人差要因が存在する可能性を示唆すると考えられる。他者からの視点取得の表明がもつ効果をより詳細に説明するためには、他者からの視点取得の知覚に関する個人差要因について検討する必要があるだろう。

### 3.3. 第三章のまとめ

第三章では、2つの研究によって、他者からの感情的視点取得の表明および認知的視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果を検討した(研究4および研究5)。第三章の検討内容とそれぞれの研究の対応をFigure 3.3.に示した。

研究4の結果、他者からの感情的視点取得の表明および他者からの認知的視点取得の表明があった場合、それのない場合と比較して、どちらの視点取得の表明も被共感を高く知覚することが示唆された。ただし、被共感の知覚が生じたかどうかという基準で検討した場合、感情的視点取得の表明は被共感の知覚を生じさせることが示唆された。一方で、認知的視点取得の表明は被共感の知覚を生じさせたとはいえなかった。この結果から、研究5以降では感情的視点取得の表明に注目した。そして研究5の結果から、被感情的視点取得の知覚が自他の重なる知覚に及ぼす効果は被共感の知覚に媒介されるモデルが支持された(Figure 3.2.4.)。この結果は本論文の研究1で得られたモデルを支持するものであった。

また、研究5の問題点として、多くの参加者が分析から除外されたことが指摘された。その指摘のなかで、他者からの視点取得の表明を受けた際に、その他者からの視点取得の知覚しやすさを説明する個人差要因の存在が示唆された。この個人差要因について検討することは、他者からの視点取得の表明がもつ効果をより詳細に説明することに寄与すると考えられた。

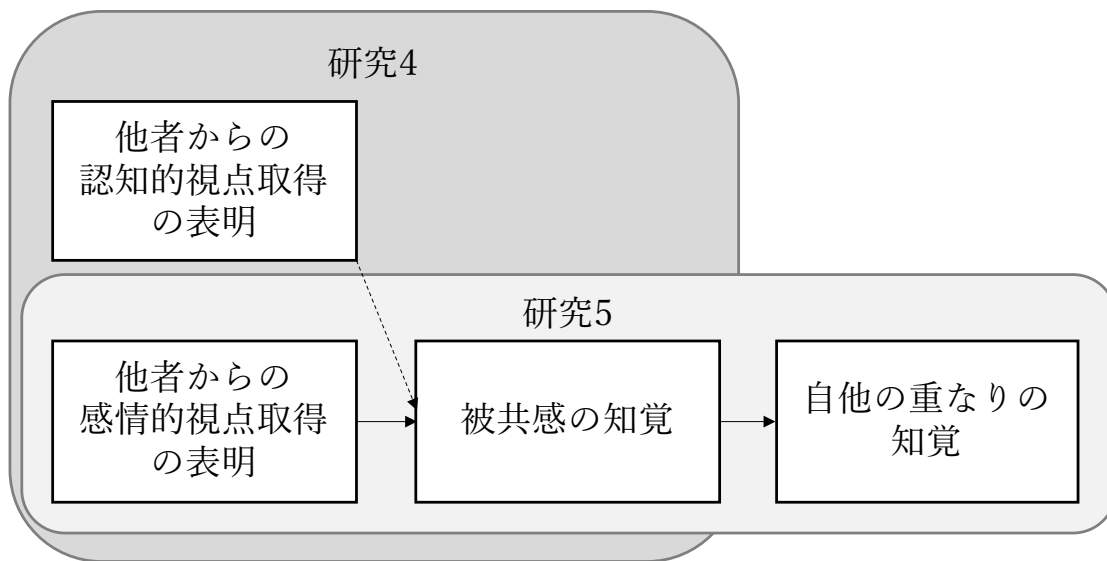


Figure 3.3. 第三章で示された結果とそれぞれの研究の対応。破線は効果のみられなかったパスを示した。



## 第四章

他者からの視点取得の表明が  
対人認知に及ぼす効果の検討

第四章では、3つの研究を行い、他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果、およびそのプロセスについて、モデルの精緻化を試みた。具体的には、次の2つの点に注目し、検討を行った。すなわち、(a) Berndsen & Wenzel(2021)が示したモデルに従い、被感情的視点取得の知覚の程度をモデルに組み込むこと、そして(b)被感情的視点取得の知覚を説明する要因について検討することであった。とくに、(b)被感情的視点取得の知覚を説明する要因について検討することにおいて、新たな個人差変数を提案する。

第五章の検討課題について議論することにさきがけ、2つの議論を行う。第一に、本論文でのこれまでの研究によって明らかになったことを概観する。第二に、先行研究を引用しながら、被感情的視点取得の知覚を組み込んだ、他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果のモデルについて議論する。

## 本論文におけるこれまでの研究

本論文のこれまでの研究から、他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果のプロセスについて、大きく3つのことが明らかになった。第一に、第二章の研究1から研究3によって、他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果のプロセスについて、次の直線的なモデルが示された。すなわち、他者からの視点取得の表明が被共感の知覚を促進し、それによって自他の重なる知覚が促進され、最終的に他者への好感や関係構築への意欲が高まるといった他者へのポジティブな態度が形成されるモデルであった。このことから、他者からの視点取得の表明が対人認知に影響するプロセスにおいて、他者からの視点取得の表明が被共感の知覚を促進することが重要だと考えられた。第二に、他者の感

情に注目する感情的視点取得と、他者の考えや動機に注目する認知的視点取得を区別したところ、他者からの感情的視点取得の表明は被共感の知覚を生じさせることが示された(第三章研究 4)。一方、他者からの認知的視点取得の表明は、それが無い場合と比較して相対的に被共感の知覚を促進する効果を示したものの、被共感の知覚を生じさせる効果はみられなかった。このことから、研究 5 以降では、感情的視点取得に注目して研究を行った。そして、第三に、他者からの感情的視点取得の表明が被共感の知覚および自他の重なり  
の知覚に影響を及ぼすプロセスは、研究 1 で示されたモデルと同様であった。すなわち、他者からの感情的視点取得の表明は被共感の知覚を促進し、それによって自他の重なり  
の知覚が影響される直線的なモデルが示された(第三章研究 5)。

### 他者からの視点取得の表明と被視点取得の知覚の関連

上記の通り、本論文のこれまでの研究では、他者からの視点取得の表明の効果についていくつかのことを明らかにできた。しかしながら、いまだ明らかにできていない問題がある。それは、他者からの視点取得の表明の効果と被視点取得の知覚との関連についてである。Berndsen & Wenzel (2021)は、被害者が加害者から視点取得の表明を受けたとき、加害者によって表明された内容と、加害者の感情が一致していると認知されれば、被害者は加害者を許しやすくなることを示した。Berndsen & Wenzel (2021)のモデルは、他者からの視点取得の表明と被視点取得の知覚の関連について、次のように想定している。すなわち、  
(a)加害者からの視点取得の表明は、被害者の被視点取得の知覚を促進する要因であり、  
(b)被視点取得の表明があっても、調整要因によって被害者の被視点取得の知覚が生じな

い場合がある。そして、被視点取得の知覚が促進されなければ、加害者への許しは促進されないという。このことは、他者からの視点取得の表明が他者へのポジティブな態度を促進する効果は、被視点取得の知覚に媒介されることを示唆すると考えられる。しかしながら、本論文のこれまでの研究では(i.e., 研究 1・4・5), 他者からの(感情的・認知的)視点取得の表明を独立変数とし、被共感の知覚、自他の重なる知覚、および他者へのポジティブな態度を従属変数とした検討を行っており、被(感情的・認知的)視点取得の知覚による媒介効果は検討できていない<sup>15</sup>。

ただし、本論文の研究 1・4・5 の結果は、Berndsen & Wenzel (2021)が示したモデルを支持する結果であったと考えられる。他者からの(感情的・認知的)視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果を検討した研究 1・4・5 では、他者からの被(感情的・認知的)視点取得の知覚の程度を測定していた。そして、操作チェックとして、(感情的・認知的)視点取得の表明あり条件は、(感情的・認知的)視点取得の表明なし条件に比べて、他者からの被(感情的・認知的)視点取得の知覚の程度が有意に高いことを確認していた。また、研究 4 では、感情的・認知的視点取得の表明が、それぞれ対応する被視点取得のみを知覚させることを確認した。したがって、研究 1・4・5 における(感情的・認知的)視点取得の表明あり条件は、他者からの(感情的・認知的)視点取得を知覚した条件であり、一方の(感情的・認知的)視点取得の表明なし条件は、他者からの(感情的・認知的)視点取得を知覚しなかった条

---

<sup>15</sup> 研究 1 は視点取得を、研究 4 は感情的視点取得と認知的視点取得を、研究 5 は感情的視点取得を扱ったため、そのすべてを指し示す方法として便宜的に「他者からの(感情的・認知的)視点取得の表明」と記載した。

件であると解釈できる。このことから、研究 1・4・5 で示された結果は、他者からの(感情的・認知的)視点取得の表明によって他者からの(感情的・認知的)視点取得を知覚した人が、その他者からの被共感や自他の重なりを知覚し、さらにその他者へのポジティブな態度を形成した可能性を示唆すると考えられる。

### 被感情的視点取得の知覚と他者の視点取得能力の評価

Berndsen & Wenzel (2021), Goldstein et al.(2014), および本論文の研究 1・4・5 が示した結果から、被視点取得の知覚を促進する要因について、次のように考えられる。すなわち、被視点取得の知覚を促進するのは、(a)それぞれ対応する視点取得についての表明(e.g., 被感情的視点取得の知覚ならば他者からの感情的視点取得の表明), そして(b)相互作用相手に関する要因である。そして、これまで検討されてきた(b)相互作用相手に関する要因は、その他者が、視点取得の対象となる人物の感じた感情を正しく予測できていたかどうかについての情報(Berndsen & Wenzel, 2021), および金銭的な話題において他者との経済的背景の差(Goldstein et al., 2014)であった。

他者からの視点取得が知覚されないのは、主に次のような場合である。第一に、他者からの視点取得の表明がなかった場合である(研究 1・4・5)。第二に、他者からの視点取得の表明があったとしても、うまく視点取得できていないと判断された場合である(Berndsen & Wenzel, 2021; Goldstein et al., 2014)。とくに、表明された視点取得がうまくいっていないと判断された場合、視点取得の表明がなされなかった場合よりもむしろ被視点取得の知覚が抑制されることが示唆されている。Berndsen & Wenzel (2021)は、加害者が被害者の感情

を正しく予測できなかったとき、加害者から被害者への視点取得の表明がある場合は、視点取得の表明がない場合よりも被視点取得の知覚が低くなることを示した。さらに、金銭的な話題において経済的に中間層の人が、富裕層の人からの視点取得の表明を受けた場合、むしろその他者からの視点取得の表明がない場合の方が、その他者の視点取得能力を高く評価することが示されている(Goldstein et al., 2014)。これらのことから、他者からの視点取得の表明があっても、その視点取得がうまくいっていないと判断するための情報があつた場合には、被視点取得の知覚は生じないと考えられる。本論文では、他者はうまく視点取得をできていたかどうかの評価を、他者の視点取得能力の評価とよぶ。

では、他者からの視点取得の成否が明確には判断できない場合はどうだろうか。

Berndsen & Wenzel (2021)は、加害者が被害者への視点取得を表明することにくわえて、加害者が被害者の感情をどう予測したかについて、明確な感情語を用いて表明していた(e.g., “anger” vs “dishonor”)。そのため、被害者(i.e., 研究参加者)は、加害者(i.e., 相互作用相手)がうまく被害者の感情を予測できたかどうかを明確に判断できたと考えられる。しかしながら、他者との会話において、「あなたの視点に立てば、その気持ちを想像できる」というように、明確な感情語を表明しない場合もあるだろう。この場合、その他者は自分に向けた感情的視点取得をし、そして自分自身の感情をうまく想像できたと考えていることは分かるものの、それがうまくできているのかどうかを判断することができない。そのため、「あなたの気持ちを想像できる」というように、特定の感情語を用いない曖昧な表明を受けた場合、他者の感情的視点取得能力を評価するためのほかの情報がなければ、被感情的視点取得の知覚は促進されると考えられる。

## 被感情的視点取得の知覚に影響する個人差変数の提案

しかし一方で、「あなたの気持ちを想像できる」というように、特定の感情語を用いない曖昧な表明を受けた場合においては、他者からの感情的視点取得の知覚に個人差が生じる可能性がある。これは、特定の感情語を用いない曖昧な表現では、他者が正しく感情を想像したかどうかの評価は、受け手の捉え方に委ねられるためである。他者が正しく感情を想像していると評価する程度に関連する個人差変数として、本論文は人一般の感情的視点取得能力信念を提案する。

人一般の感情的視点取得能力信念(*the Belief of Affective Perspective-Taking Ability*)とは、自分自身や特定の誰かではなく、人は一般的に他者の視点にたち、感情を想像できるものだと信じる程度を指す。この信念を強く持つ人は、他者からの感情的視点取得の表明を受けたとき、「人は一般的に他者視点に立って気持ちを想像できるものなのだから、この人もきっと、私の視点に立って気持ちを想像できているだろう」と考え、被感情的視点取得の知覚が生じやすいと予測される。一方で、人一般の感情的視点取得能力信念を持たず、むしろ人は感情的視点取得をできないと信じる人は、「人は一般的に他者視点に立って気持ちを想像できないのだから、この人もきっと、私の視点に立って気持ちを想像できていないはずだ」と考え、被感情的視点取得の知覚が生じにくいと予測される。したがって、人一般の感情的視点取得能力信念を考慮することで、他者からの視点取得の表明の効果をより正確に予測することが可能になると考えられる。

## 第四章の目的

これまでの議論をまとめると、他者からの感情的視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果について、次のことが予測された。Berndsen & Wenzel(2021)が示したモデルから、被感情的視点取得の知覚が生じることによって、被共感の知覚以降の対人認知が影響される可能性が指摘された。そして、(a)他者からの感情的視点取得の表明、(b)相互作用相手が想像した感情が正しいかどうか(Berndsen & Wenzel, 2021)、また相互作用相手との経済的背景の差(Goldstein et al., 2014)といった、他者からの感情的視点取得の表明を受ける場面における状況的な要因、そして(c)他者からの感情的視点取得の表明をどう捉えるかに関わる人一般の感情的視点取得能力信念によって、被感情的視点取得の知覚は説明されると考えられる。

そこで第四章では、上記の要因に注目して、他者からの感情的視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果、およびその効果のプロセスについて検討する。まず、研究6では、人一般の感情的視点取得能力信念を測定する尺度の開発を行う。その後、他者からの感情的視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果について、本論文におけるこれまでの研究結果を踏まえたモデルを提案・検討する(研究7・8)。

### 4.1. 研究6: 人一般の感情的視点取得能力信念尺度の作成



## (1) 目的

研究 6 の目的は、人一般の感情的視点取得能力の信念について測定する尺度を作成し、信頼性・妥当性を検討することである。個人が「人は一般的に、他者の視点にたつてその他者の感情を想像すること(感情的視点取得)ができる」とどの程度信じているかを測定する人一般の感情的視点取得能力の信念尺度(the Belief of Affective Perspective-Taking Ability Scale; BAPTAS)を開発することを目的とした。

BAPTAS の妥当性を確認するため、2つの側面からの予測により、BAPTAS と 4つの心理尺度の関連を検討した。第一の側面は、人一般の感情的視点取得能力信念は、自身の視点取得ないし共感の経験と関連するという予測である。人の信念や考えは、その人の経験から大きな影響を受けるものである。そのため、自身が頻繁に他者に視点取得する人は、自身と同様に他者も視点取得できるはずだと信じると予測した。人一般の感情的視点取得能力信念は、他者への視点取得の傾向と正の関連を示すだろう(仮説 1)。また、他者に視点取得された経験が豊富な人は、その経験から、他者の視点取得能力を高く評価すると予測した。しかしながら、他者からの視点取得の経験の程度を測定する尺度は見当たらなかった。そこで、被視点取得の知覚が被共感の知覚と関連することに注目し、他者に共感された経験が豊富な人は、その際に視点取得されたことと知覚することも多く経験しているため、人一般の感情的視点取得能力信念が強くなりやすいと予測した。人一般の感情的視点取得能力信念は、他者に感情共有をされた経験の程度と正の関連を示すだろう(仮説 2)。

第二の側面は、人一般の感情的視点取得能力信念が対人関係における認知と関連するという予測である。自分自身や特定の誰かではなく、人は他者の視点に立って感情を想像す

ることができる信じることが、人とお互いに感情的視点取得をしあえると信じることと解釈できる。したがって、人一般の感情的視点取得能力信念は、人と人の相互理解と正に関連すると考えられる。しかしながら、他者との相互理解を測定するための十分な妥当性と信頼性を有する日本語尺度は見当たらなかった。そこで、人一般の感情的視点取得能力信念は、相互理解を媒介して他の2つの要因との間に間接的な関係を示すと考える。

榎本(1999)は、友人とより多くの相互理解活動を行っている人は、友人関係においてより高い信頼感と安心感を持っていると示唆している。このことから、人一般の感情的視点取得能力信念は、相互理解を媒介して対人信頼と正の関連を示すと予測した(仮説3)。さらに、人は他者の視点に立って感情を想像することはできると信じないことは、相互理解の低下と関連し、孤独感を増大させると考えた。このことから、人一般の感情的視点取得能力信念は孤独感と負の関連を示すと予測した(仮説4)。

研究6は、日本大学文理学部研究倫理委員会の承認のもと実施された(承認番号 02-30)。

## (2) 方法

### 研究参加者

研究参加に同意した都内大学に通う学生 153 名(男性 87 名, 女性 62 名, x ジェンダー1 名, 無記入 3 名)であった。

### 手続き

研究参加者は、研究 6 についての説明をうけ、そして参加に同意したあと、オンライン回答フォームから以下の 5 つの尺度に回答した。

**人一般の感情的視点取得能力信念尺度(BAPTAS)** BAPTAS は、人一般の感情的視点取得能力信念の程度を測定する尺度である。まず、参加者は、「以下の項目をよく読んで、それぞれもっともあてはまる回答を選択してください。特定の他者や自分自身についてはなく、人一般について回答してください」と教示された。この教示文は、個人がどの程度人を信頼しているかを測定するための対人信頼尺度(堀井・槌谷, 1995)の教示文を参考に作成された。対人信頼尺度(堀井・槌谷, 1995)の教示文を参考にしたのは、この尺度が BAPTAS と同様に、自分自身や特定の誰かではなく、人全般についての回答を求めているためである。

BAPTAS の項目には、共感に関連した感情が含まれる必要があった。そこで、被共感経験質問票(山本, 2007)を参考に項目を作成した。具体的には、人は他者の視点にたって、その他者の感情をおおむね想像できると思うことについての 14 項目(不安, 苦しみ, 失望, 悲しみ, 寂しさ, 劣等感, 喜び, 安心, 期待, 爽快感, 満足, 驚き, 興奮, 怒り), および逆転項目として、人は自分の立場から他者の感情を想像できないと思うことについて 3 項目を作成した(Table 4.1.1.参照)。尺度の回答は、1(全くそう思わない)から 7(非常にそう思う)までの範囲であった。

**被共感経験** 被共感経験尺度(山本, 2007)から被共有経験(13 項目)を採用した。被共有経験は、様々な感情について他者にわかってもらえた経験を指す。これは、本論文の被共感の定義のうち、他者による感情共有に該当するものと解釈できる。被共感経験尺度(山本,

2007)の下位尺度には、被共有経験のほかに被不全経験がある。これは、被共有経験とは逆に、他者に気持ちをわかってもらえなかった経験の程度を測定するものである。被共感経験と被不全経験が反対の意味をもつ尺度であることから、研究6では被共有経験のみを使用した。

尺度の教示文は、「以下の項目では、あなたのこれまでの経験についてお聞きします。それぞれの項目をよく読み、それぞれの項目の内容をあなたが経験している程度として、もっともあてはまる回答を選択してください」である。項目は、「不安を感じていることを伝えたとき、相手はその不安を同じように感じとってくれたことがある」、「自分が満足を感じているときに、人がその満足感をわかってくれたことがある」など、不安、悲しみ、満足感、興奮、喜び、怒り、期待、苦しみ、清々しさ、失望感、劣等感、安堵、および孤独感を共有された経験について問う7段階評定13項目から構成されている。それぞれの項目について、1(まったくない)から7(いつもそうだ)の範囲で回答を求めた(付録C参照)。

**視点取得傾向** 他者に視点取得する傾向を測定するため、共感性プロセス尺度(葉山他, 2008)の視点取得水準を採用した。共感性について測定する尺度を概観すると、視点取得傾向の個人差を測定する尺度は他にもある(e.g., 日道他, 2018; 鈴木・木野, 2008; 登張, 2003)。しかしながら、ほとんどの尺度はネガティブな経験をした他者への視点取得のみが扱われており、ポジティブな経験とネガティブな経験の両方に対する視点取得の項目を含むのは、葉山他(2008)の尺度のみであった。そのため、共感性プロセス尺度(葉山他, 2008)の視点取得水準を採用した

尺度の教示文は、「以下の項目では、あなた自身についてお聞きします。項目をよく読み、あなたにもっともあてはまる数字を選択してください」である。項目は、「他者を理解するために、相手の立場になって考えようとする」、「相手の立場に立って、その人の感じている不安を理解するようにしている」、「相手の視点にたって、その人が感じている楽しさを理解するようにしている」などの5段階評定5項目から構成されている。それぞれの項目について、1(まったく当てはまらない)から5(とても当てはまる)の範囲で回答を求めた(付録D参照)。

**対人信頼感** 対人信頼感を測定する尺度として、対人信頼性尺度(堀井・樋谷, 1995)を用いた。この尺度は、ある特定の人物を想定するのではなく、人全般に対する信頼感を測定するものである。この点で、人一般に対する視点取得能力の評価尺度が想定する「人一般」と一致しているといえる。

尺度の教示文は、「以下の項目は、あなたの人間観を尋ねるものです。自分の人間観に最も近いと思う番号を選択してください」である。項目は、「人は、基本的に正直である」、「人は、多少良くないことをやっても自分の利益を得ようとする(逆転項目)」などの5段階評定17項目から構成されている。それぞれの項目について、1(そう思わない)から5(そう思う)の範囲で最もよく当てはまる数字を回答するよう求めた(付録E参照)。

**孤独感** 日常的な孤独感の程度を測定する尺度として、改訂版UCLA孤独感尺度日本語版(ULS-J; 諸井, 1991)を用いた。ULS-Jは、「人との関わりがない」、「頼れる人がいない」などの4段階評定20項目から構成されている。尺度の教示文は「1から20までの文章に述べられているそれぞれのことがらを、日頃あなたはどれくらい感じていますか」であり、

それぞれの項目について、1(決して感じない)から 4(たびたび感じる)の範囲で回答を求めた(付録 F 参照)。

### (3) 結果

#### 分析対象者

研究参加者 153 名を対象に、2 つの方法によって不良回答を判別した。第一に、年齢について 10000 歳を超えた値を回答していた者が 2 名いた。この 2 名は不良回答と判断し、分析から除外した。第二に、回答ページごとに同じ回答をした者がいないかどうか確認したところ、該当者はいなかった。そのため、151 名(男性 86 名、女性 61 名、X ジェンダー(queer)1 名、無回答 3 名)が分析対象となった。平均年齢は 20.62 歳( $SD=2.83$ )歳であった。

#### 項目の選定

人一般の視点取得能力信念尺度の 17 項目について、天井効果および床効果を確認した。この際、天井効果は平均値+1SD が尺度の最大値である 7 を超えること、そして床効果は平均値-1SD が尺度の最小値である 1 を下回ることとした。その結果、天井効果および床効果ともに、該当する項目は見当たらなかった。各項目の平均値および標準偏差は Table 4.1.1. に示した。

次に、1 因子構造を仮定した因子分析(最尤法、プロマックス回転)の結果、十分な共通性(0.30 以上)を持つ 13 項目と、共通性が 0.30 以下の 4 項目(逆転項目 3 項目、「安堵」の想像に関する 1 項目)があった。そこで、共通性が 0.30 以上の 13 項目を採用した。これらの 13

項目(BAPTAS)は、十分な信頼性係数を示した( $\omega = .92$ ,  $\alpha = .91$ ,  $\alpha$  95%CI[.89, .94],  $M = 4.52$ ,  $SD = 0.97$ ,  $n = 151$ )。BAPTAS の項目平均値は正規分布していた(Figure 4.1.1.)。また、BAPTAS 得点に性差があるかどうか検討したところ、有意な男女差は見られなかった(男性  $n = 86$ ;  $M = 4.46$ ,  $SD = 1.02$ ; 女性  $n = 61$ ,  $M = 4.58$ ,  $SD = 0.93$ ;  $t(136.69) = 0.78$ ,  $p = 0.44$ )。なお、性差の検討では、性別について男性および女性と回答した参加者のみを対象とした。

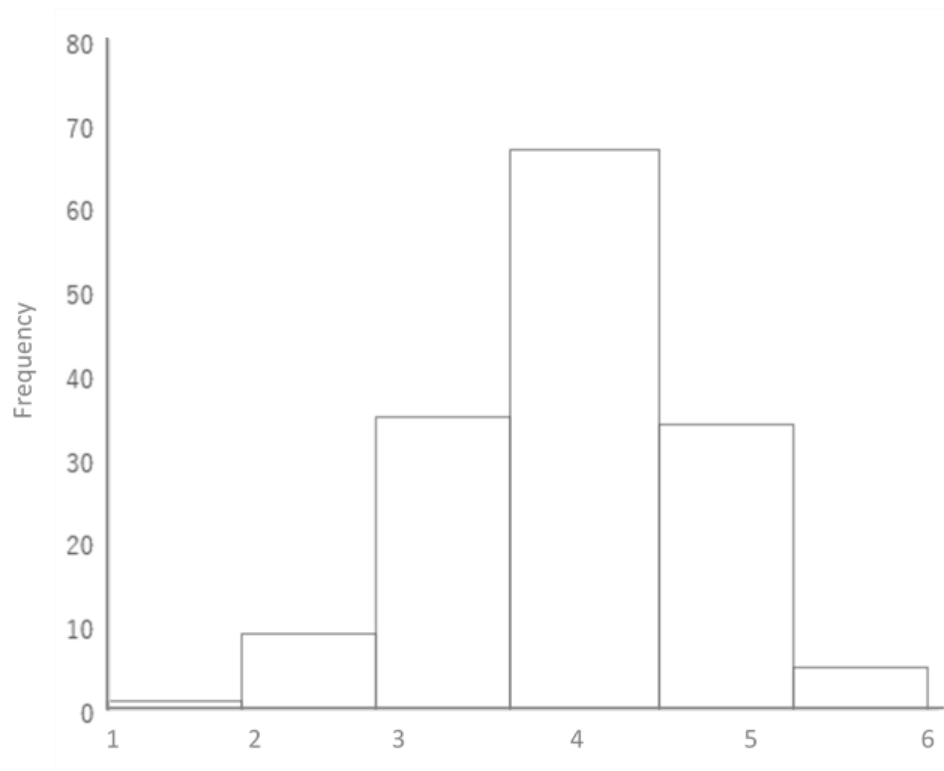


Figure 4.1.1. BAPTAS の得点のヒストグラム( $M=4.52, SD=0.97$ )。



Table 4.1.1.

## 人一般の視点取得能力信念尺度の項目(共通性降順)

項目 No.	項目	Mean(SD)	共通性
失望	4. 人は一般的に、他者が何かに失望しているときに、その人の視点で、そのがっかりした気持ちを想像することができる。	4.52(1.45)	.56
孤独感	11. 人は一般的に、孤独な他者の立場に立って、その人の気持ちを想像することができる。	4.05(1.53)	.55
苦しみ	3. 人は一般的に、何かに苦しんでいる他者の視点にたって、その気持ちを想像することができる。	4.75(1.42)	.54
不安	1. 人は一般的に、他者が不安を感じているときに、その人の視点にたって、その不安な気持ちを想像することができる。	4.77(1.34)	.53
悲しみ	10. 人は一般的に、悲しんでいる他者の視点にたって、その人の悲しさを想像することができる。	4.68(1.42)	.50
劣等感	6. 人は一般的に、他者が何かができなくて劣等感を感じているときに、その人の立場にたって、その人の気持ちを想像することができる。	4.01(1.49)	.48
喜び	12. 人は一般的に、他者が喜んでいいるときに、その人の視点にたって、その人のうれしい気持ちを想像することができる。	5.11(1.21)	.48
興奮	15. 人は一般的に、興奮した他者の視点にたって、そのドキドキした気持ちを想像することができる。	4.43(1.39)	.48
爽快さ	8. 人は一般的に、他者が清々しい気分になっている場合に、その人の立場にたって、その爽快さを想像することができる。	4.33(1.40)	.36
満足感	16. 人は一般的に、満足した気分である他者の立場に立って、その人の気持ちを想像することができる。	4.50(1.36)	.36
期待	17. 人は一般的に、他者が何かを期待しているときに、その人の視点にたって、そのわくわくした気持ちを想像することができる。	4.54(1.38)	.36
怒り	14. 人は一般的に、腹を立てている他者の立場にたって、その人の怒りを想像することができる。	4.60(1.25)	.35
驚き	7. 人は一般的に、他者があることに驚いたと語るときに、その人の視点をとって、その驚きを想像することができる。	4.48(1.34)	.33
安堵	2. 人は一般的に、他者がホッとしていると、その人の立場にたって、その人の安堵した気持ちを想像することができる。	5.03(1.29)	.27
R <sup>1</sup>	13. 人は一般的に、他者の立場に立って、その人の気持ちを想像しようとしても、うまくはできないものだ。	3.36(1.60)	.25
R <sup>1</sup>	5. 人は一般的に、他者の視点にたって物事を考えることは難しい。	3.39(1.70)	.19
R <sup>1</sup>	9. 人は一般的に、他者の立場に立ってみても、その人の感情までうまく想像できない。	3.42(1.58)	.09

<sup>1</sup>R は逆転項目を示した。

## 既存の尺度との関連

人一般の感情的視点取得能力信念尺度の基準関連妥当性を検討するために測定した4つの尺度(i.e., 被共感経験質問票における被共有経験因子13項目( $\omega = .94, M=4.45, SD=1.16$ ), 共感性プロセス尺度における視点取得水準5項目( $\omega = .82, M=3.97, SD=0.67$ ), 対人信頼感尺度17項目( $\omega = .83, M=2.63, SD=0.53$ ), および改訂版UCAL孤独感尺度日本語版20項目( $\omega = .89, M=2.10, SD=0.51$ )とBAPTAS得点との関連を検討した。その結果, 以下の結果が示された。すなわち, 被共有経験因子とは正の関連が( $r = .64, 95\%IC[.54,.73], t(149) = 10.18, p < .001$ ), 視点取得水準とは正の関連が( $r = .40, 95\%IC[.26,.53], t(149) = 5.31, p < .001$ ), 対人信頼感尺度とは正の関連が( $r = .25, 95\%IC[.09,.39], t(149) = 3.15, p = .002$ ), そして孤独感尺度とは負の関連が示された( $r = -.24, 95\%IC[-.38,-.08], t(149) = 2.98, p = .003$ )。示された関連は, すべて理論的に予測された関連と一致していた(Table 4.1.2.参照)。

Table 4.1.2.

人一般の視点取得能力信念尺度(BAPTAS)と既存尺度との関連

	被共有経験因子	視点取得水準	信頼感尺度	孤独感尺度
仮説	+	+	+	-
BAPTAS	.64***	.40***	.25**	-.24**

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$

#### (4) 考察

研究 6 では、人一般の感情的視点取得能力信念尺度(BAPTAS)を開発することを目的とした。人一般の感情的視点取得能力信念を測定する 17 項目を作成し、BAPTAS と 4 つの尺度(被共感経験, 視点取得傾向, 対人信頼感, 孤独感)との関連性を検討した。

因子分析の結果、BAPTAS には共通性.30 以上の 13 項目が採用された。除外された項目は、3 つの逆転項目と、「安堵感」を想像することについての 1 項目の計 4 項目であった。逆転項目は、3 項目いずれも共通性が低く、総じて不適切であったと判断した。「安堵感」についての項目の共通性が低かったのは、「安堵感」がネガティブな状況から抜け出した後に生じる感情であるためかもしれない。

門地・鈴木(2000)は、緊張した状況が安堵感と関連していると報告している(e.g., 大事なテストが終わった瞬間)。緊張した状況では、不安や不公平感などの他のネガティブな感情を示すことが多いと考えられる。そのため、たとえば重要なテストを終えた人を観察したとき、テストが終わった後の安堵感よりも、テスト中に感じた不安感を想像しやすい可能性がある。すなわち、人は、「安堵感」を感じた他者の視点に立つとき、その他者が「安堵感」を感じる前に喚起したであろうネガティブ感情を想像しようとするのかもしれない。そのため、他者が経験した安堵感を想像することは、他の感情を想像することとは異なるため、「安堵感」の項目の共通性は低いと考えられる。

また研究 6 の結果は、BAPTAS の妥当性を支持したと考えられる。まず、BAPTAS と 4 つの尺度(被共感経験, 視点取得傾向, 対人信頼尺度, UCLA 孤独感尺度日本語版)は、予

測通りの有意な関連を示した。したがって、BAPTASと4つの尺度(被共感経験, 視点取得傾向, 対人信頼尺度, UCLA 孤独感尺度日本語版)の関連についての仮説1から仮説4はすべて支持された。特に、BAPTASが対人信頼感, 孤独感とそれぞれ正の相関, 負の相関を示したことは、人一般の感情的視点取得能力信念が精神的健康にポジティブな効果をもたらすことを示唆している。

## 4.2. 研究 7: 他者の感情的視点取得能力の評価に人一般の感情的視点取得能力信念が及ぼす効果の検討—相互作用相手の情報がない場面に注目して—

### (1) 目的

研究 7 では、他者からの感情的視点取得の表明が被感情的視点取得の知覚に及ぼす効果について、人一般の感情的視点取得能力信念を踏まえて検討する。さらに、被感情的視点取得の知覚をモデルに取り入れ、他者からの感情的視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果のプロセスを検討する。

### 人一般の感情的視点取得能力信念の働き

人一般の感情的視点取得能力信念の働きについて、次のように予測していた。他者からの感情的視点取得の表明を受けたとき、この信念を強く持つ人は被感情的視点取得の知覚が生じやすく、一方で、人一般の感情的視点取得能力信念を持たず、むしろ人は感情的視点取得をできないと信じる人は、被感情的視点取得の知覚が生じにくいと予測された。すなわち、人一般の感情的視点取得能力信念は、他者からの感情的視点取得の表明が被感情的視点取得の知覚に及ぼす影響を調整すると予測された。

しかしながら、人一般の感情的視点取得能力信念尺度を作成した本論文の研究 6 によると、人は他者の視点にたって、その他者の感情を想像できないと信じている人は、ほとんどいないと考えられる。研究 6 では、13 項目からなる人一般の感情的視点取得能力信念尺

度の項目平均値を人一般の感情的視点取得能力信念得点とし、その分布を検討した。その結果、人一般の感情的視点取得能力信念得点は、平均点 4.52( $SD = 0.97$ )の正規分布を示すことが確認された。このとき、分析対象者の約 93%が、尺度得点の範囲(1—7 点)のうち 3 点以上を示していた。尺度得点の midpoint が 4 点であることから、人は一般的に感情的視点取得能力を持たないと強く信じている人は、ほとんどいないと考えられた。したがって、他者の経済的背景について伝えられた Goldstein et al.(2014)や、他者の想像する感情が正しいかどうか明確に判断できた Berndsen & Wenzel(2021)のように、他者の視点取得能力を評価する手がかりとなる情報が与えられなかったとき、ほとんどの人は他者からの視点取得の表明によって、人は一般的に視点取得をできるものだと考え、被視点取得の知覚が生じやすいと考えられる。

上記の予測にしたがえば、他者からの感情的視点取得の表明があったとき、被感情的視点取得の知覚が生じるプロセスは次のように予測できる。まず、他者からの感情的視点取得の表明および人一般の感情的視点取得能力信念によって、自身に向けられた感情的視点取得がうまくいったかどうかを判断すると考えられる。本論文では、他者の感情的視点取得がうまくいくかどうかについての評価を、「感情的視点取得能力の評価」と呼ぶ。このとき、人は一般的に感情的視点取得能力を持たないと信じていた人がほとんどいなかったことから(研究 6)、人一般の感情的視点取得能力信念を持たないことによる抑制効果はみられないだろう。ただし、この予測は、他者からの感情的視点取得の表明および人一般の感情的視点取得能力信念の他に、他者の感情的視点取得能力を評価するための手がかり

りとなる情報がない場合にのみ成り立つと考えられる。研究7では、他者の感情的視点取得能力を評価するための手がかりとなる情報を得られない場面を想定する。

### 被感情的視点取得の知覚を説明する要因

被感情的視点取得の知覚は、他者からの感情的視点取得の表明および感情的視点取得能力の評価によって説明されると予測する。他者から感情的視点取得の表明があり、かつその他者の感情的視点取得能力を高く評価した場合には、被感情的視点取得の知覚が生じるだろう。ただし、先述の通り、他者からの感情的視点取得の表明および人一般の感情的視点取得能力信念の他に、他者の感情的視点取得能力を評価するための手がかりとなる情報がない場合においては、他者からの感情的視点取得の表明があった場合、その他者の感情的視点取得能力は、高く評価されると考えられる。そのため、Berndsen & Wenzel(2021)が指摘するような調整効果は生じないと予測される。すなわち、他者からの感情的視点取得の表明を受けた際に、他者の感情的視点取得能力を低く評価したため、被感情的視点取得の知覚がむしろ低下するということは生じにくいだろう。一方で、他者からの感情的視点取得の表明を受けなかった場合には、被感情的視点取得の知覚を生じさせる手がかりがないと考えられる。そのため、人一般の感情的視点取得能力信念の程度のみが、相互作用相手の感情的視点取得能力を評価し、また他者からの感情的視点取得を知覚するための手がかりとなる可能性がある。人一般の感情的視点取得能力信念尺度を作成した研究6では、人一般の感情的視点取得能力信念尺度と被共感経験に有意な正の相関が示された。このことは、人一般の感情的視点取得能力信念が強い人ほど、対人相互作用において他者からの



共感を知覚しやすいことを示唆している。そして、視点取得能力が高いと評価された他者からの共感は知覚されやすいことから(Goldstein et al., 2014), 次のように予測できる。すなわち、人一般の感情的視点取得能力信念が強い人ほど、他者の感情的視点取得能力を高く評価するため、対人相互作用において他者からの共感を知覚しやすい可能性がある。

### 感情的視点取得能力の評価の位置づけ

ここで問題となるのは、他者からの感情的視点取得の表明が被視点取得の知覚に及ぼす効果を調整すると予測される他者の感情的視点取得能力の評価は、他者からの感情的視点取得の表明によって説明されることである。Goldstein et al.(2014)は、金銭的な話題における他者からの視点取得の表明および他者との経済的背景の差異の交互作用によって、その他者の視点取得能力の評価が説明されることを示した。このことから、他者からの感情的視点取得の表明があるかどうかによって、その表明の受け手による他者の感情的視点取得能力の評価が影響されると考えられる。くわえて、Goldstein et al.(2014)は、感情的視点取得能力が低いと評価された他者から視点取得の表明を受けた場合、他者からの視点取得の表明がその他者へのポジティブな態度を促進する効果が示されなくなることを指摘している。すなわち、他者の視点取得能力の評価を説明する際には他者からの視点取得の表明が独立変数であったにも関わらず、他者からの視点取得の表明が他者へのポジティブな態度を促進する効果においては、他者の感情的視点取得能力の評価が他者からの視点取得の表明の効果を調整する変数として位置付けられていることになる。

他者の視点取得能力の評価が、他者からの視点取得の表明によって影響される従属変数として位置付けられることと、他者からの視点取得の表明を調整する変数として位置付けられることについて、理論的な矛盾はないと考える。すなわち、他者からの視点取得の表明と他者の視点取得能力の評価の関連には、次のようなプロセスが想定できる。まず、他者からの視点取得の表明があったかどうかによって、その他者の視点取得能力を高く評価するかどうかの影響される。すなわち、この時点では、他者からの視点取得の表明と他者の視点取得能力の評価は、独立変数と従属変数の関係となる。ただし、このとき、他者から視点取得の表明を受けたにも関わらず、その他者の視点取得能力を低く評価する場合もあるだろう。すなわち、他者からの視点取得の表明が他者の視点取得能力の評価に及ぼす効果を調整する要因(e.g., Goldstein et al.(2014)における経済的背景)があれば、他者からの視点取得の表明があっても、他者の視点取得能力は高く評価されないと考えられる。このように、他者からの視点取得の表明によって説明される他者の視点取得能力の評価は、他者からの視点取得の表明が被視点取得の知覚に及ぼす効果においては、調整変数として働くと考えられる。

## 研究7の目的

そこで、研究7ではまず、本論文の研究6で作成した人一般の感情的視点取得能力信念尺度を使用し、他者からの感情的視点取得の表明、他者の感情的視点取得能力の評価、および被感情的視点取得の知覚の関連について検討する。研究7では、他者からの感情的視点取得の表明の有無を操作し、「あなたの視点に立って、気持ちを想像した」と表明され

る感情的視点取得の表明あり条件と、客観的視点に立ったと表明される感情的視点取得の表明なし条件を設定する。すなわち、他者が想像した感情について明確に表明され、正しく想像できているかが判断しやすかった Berndsen & Wenzel (2021)と比較して、「あなたの視点にたつて、気持ちを想像した」と表明され、他者が想像した感情について明確な情報が得られない状況を想定する。

上記の状況を想定して、研究7では3つの検討課題を設ける。第一に、他者の視点取得能力の評価を説明する要因の検討である。他者の視点取得能力を高く評価するかどうかは、他者からの感情的視点取得の表明と人一般の感情的視点取得能力信念によって影響されると考えられる。(a)人は一般的に感情的視点取得をする能力を持っていると信じる人は、他者からの感情的視点取得の表明があったとき、その他者もうまく感情的視点取得をできるはずだと考え、他者の感情的視点取得能力を高く評価すると考えられること、そして(b)ほとんどの人は一般的に感情的視点取得ができると信じていることから(研究6)、他者からの感情的視点取得の表明があったとき、その他者の視点取得能力は高く評価されると予測される。したがって、他者からの感情的視点取得の表明がある場合(表明あり条件)、客観的視点に立ったと表明される場合(表明なし条件)よりも他者の感情的視点取得能力は高く評価されるだろう(仮説1)。一方で、他者からの感情的視点取得の表明がなかった場合には、人一般の感情的視点取得能力信念の程度と、その他者の感情的視点取得能力の評価に正の関連がみられると考えられる。先述の通り、人一般の感情的視点取得能力信念と被共感経験の豊富さに正の関連が見られていたことから(研究6)、人一般の感情的視点取得能力信念の強い人は、他者との相互作用過程において、他者の感情的視点取得能力を高

く評価しやすく、そのため被共感経験が豊富である可能性がある。このことから、他者からの感情的視点取得の表明がなかったとしても、人一般の感情的視点取得能力信念の強い人は、他者の感情的視点取得能力を高く評価しやすいと考えられる。また、他者からの感情的視点取得の表明があった場合、他者に感情的視点取得をされたという手がかりによって、人一般の感情的視点取得能力信念の程度に関わらず、他者の感情的視点取得能力を高く評価するため、人一般の感情的視点取得能力信念と他者の感情的視点取得能力の評価に正の相関がみられるのは、他者からの感情的視点取得の表明がない場合に限られると予測される。したがって、客観的視点に立ったと表明される場合(表明なし条件)には、人一般の感情的視点取得能力信念が強い人ほど他者の感情的視点取得能力を高く評価するだろう(仮説2)。

第二に、被感情的視点取得の知覚が生じるプロセスについて検討する。これまでの議論から、(a)他者からの(感情的・認知的)視点取得の表明は、被(感情的・認知的)視点取得の知覚を生じさせること(研究1・4・5)、そして(b)Berndsen & Wenzel(2021)の結果から、他者からの視点取得の表明があったとしても、その視点取得がうまくいっていないと判断された場合には、被視点取得の知覚は生じないことが指摘された。これらのことから、他者からの視点取得の表明を受けたかどうかにくわえて、他者の視点取得能力を高く評価したかどうかの組み合わせによって、その他者からの視点取得を知覚するかどうかの説明されることが考えられる。具体的には、他者からの感情的視点取得の表明を受けたとき、くわえてその他者の視点取得能力を高く評価すれば、被感情的視点取得の知覚が生じるが、一方で他者からの感情的視点取得の表明を受けたとしても、その他者の視点取得能力を低く評価し

た場合には、被感情的視点取得の知覚は生じにくいと予測される。ただし、仮説 1 で予測したように、他者からの感情的視点取得の表明を受けた人は、その他者の感情的視点取得能力を高く評価すると考えられる。したがって、他者からの感情的視点取得の表明を受けた場合、表明を受けなかった場合と比べて、被感情的視点取得の知覚は高くなるだろう(仮説 3)。また、人一般の感情的視点取得能力信念が強い人ほど、対人相互作用において他者からの共感を知覚しやすく(研究 6)、視点取得能力が高いと評価された他者からの共感知覚は知覚されやすいことから(Goldstein et al., 2014)、次のように予測できる。すなわち、他者からの感情的視点取得の表明を受けなかった場合、人一般の感情的視点取得能力信念が強い人ほど、他者の感情的視点取得能力を高く評価し、また対人相互作用において他者からの共感を知覚しやすい可能性がある。したがって、他者からの感情的視点取得の表明があり、かつその他者の感情的視点取得能力を高く評価した場合に限り、被感情的視点取得の知覚が促進されるだろう(仮説 4)。

第三に、本論におけるこれまでの研究(研究 1・4・5)において示されてきたモデルを参考に、他者からの感情的視点取得の表明の効果のプロセスを検討する。その際、被感情的視点取得の知覚を要因としてモデルに投入する。

研究 7 は、日本大学文理学部研究倫理委員会の承認のもと実施された(承認番号 02-39)

## (2) 方法

## 実験デザインと研究参加者

感情的視点取得の表明(表明あり vs 表明なし)による 1 要因 2 水準参加者間デザインであった。さらに、研究 7 では、上記の実験操作による独立変数のほかに、分析時に調整変数として投入される量的変数(i.e., 人一般の視点取得能力信念および他者の視点取得能力の評価)があった。また、他者の視点取得能力の評価は、仮説 1 および仮説 2 の検討において従属変数であり、一方で仮説 3・4 の検討において調整変数となる。各仮説と分析に用いた変数の対応について、分析計画にて後述した(Table 4.2.1.参照)。

参加者は、例数設計に基づいて募集された。感情的視点取得の表明、人一般の感情的視点取得能力信念、およびこれら 2 変数による交互作用効果の 3 変数によって他者の視点取得能力の評価を、また感情的視点取得の表明、他者の感情的視点取得能力の評価、およびこれら 2 変数による交互作用効果の 3 変数によって被視点取得の知覚を説明する一般線形モデルを想定し、効果量大( $f^2 = 0.35$ )、有意水準  $\alpha = .05$ 、検定力  $1 - \beta = .80$  を基準に例数設計を行ったところ、必要な参加者数は 36 名であった。回答漏れ等によって除外される参加者数を考慮した結果、54 名が参加した。

## 手続き

研究 7 では、2 フェーズからなる実験を行った。フェーズ 1 は、web 回答フォームを用いて行われた。Web 回答フォームにアクセスした参加者は、まず研究 7 についての説明文を読むよう指示された。ここでの説明はカバーストーリーであり、以下の説明がされた。すなわち、(a)研究 7 は「Covid-19(新型コロナウイルス)によって大学の講義がオンライン

化したことで感じた苦労や不満と、性格特性の関連について、またそのような大学生特有の話題を共有することが新しい対人関係構築に及ぼす影響を検討する研究」であること、(b)研究 7 では、2 人の参加者(同性同士)がペアとなり、一方に書き手を、もう一方に読み手を担当してもらうこと、(c)参加者自身は書き手であり、過去の経験についてエッセイを書いてもらうこと、(d)それを読み手が読むこと、そして(e)研究 7 の共同研究者として、亀山晶子(国際医療福祉大学)が参加しており、複数の大学の学生が参加するため、他大学の参加者がパートナーとなる可能性があることが説明された。なお、亀山晶子先生(国際医療福祉大学)が共同研究者であるという事実はなく、後述の操作における信憑性を高めるために名前のみ記述した(亀山晶子先生から事前に許可を得て実施した)。これらを含む参加者への説明文を十分に読んでもらったあと、研究参加への同意の有無を問う項目に回答してもらった。同意を得られた参加者のみが、後続の回答ページに進んだ。

つぎに、2020 年度の講義がオンライン化されたことによって苦労したことや不満を感じたことについてエッセイを書くよう求めた。この際、(a)具体的にどのような点で苦労したり、不満を感じたりしたのか、(b)その経験の苦労および不満の程度(それぞれ 1 項目)についても回答を求めた。その後、人一般の視点取得能力信念尺度(研究 6)、日本語版 Ten Item Personality Inventory(小塩他, 2012)、および参加者のデモグラフィック変数(性別、年齢、所属)について回答してもらった。そして、フェーズ 1 の最後に、参加者のイニシャル(e.g., 田中一郎なら「I. T.」)および、フェーズ 2 開始時に連絡するためのメールアドレスを記述するよう求めた。

フェーズ 1 の終了後、2 日間をあけてフェーズ 2 が開始された。フェーズ 1 で回答してもらったメールアドレスに、(a)参加者の記述したエッセイをパートナーがどのように読んだか、(b)フェーズ 1 の回答とフェーズ 2 の回答を一致させるための通し番号(4 桁)、そして(c)フェーズ 2 用の回答フォームが送信された。送信されたメールの例を付録 G に示した。

メールに記載されたフィードバックの内容によって、実験操作が行われる。すなわち、参加者の記述したエッセイをパートナーがどのように読んだかのフィードバックによって、感情的視点取得の表明が操作された。表明あり条件では、「あなたのパートナーにインタビューしたところ、次のように仰っていました。あなたに記述してもらったエッセイを読むとき、あなたの視点に立って、気持ちを想像しながら読むことができたそうです。」とフィードバックされた。一方で、表明なし条件では、「あなたのパートナーにインタビューしたところ、次のように仰っていました。あなたに記述してもらったエッセイを客観的な視点で読めたそうです。」とフィードバックされた。フィードバックされる性別は、参加者と同姓であり、イニシャルはすべての参加者に共通して「W. Y.」であった。

上記のフィードバックについて確認してもらった後、先述の(c)フェーズ 2 用の回答フォームにアクセスしてもらった。まず、参加者はフィードバックを確認したかどうかについて回答するよう求められた。具体的には、パートナーについてフィードバックされた内容について、自由記述式の項目に回答してもらった。つぎに、パートナーからの感情的視点取得の知覚の程度(2 項目 10 段階評価)、パートナーからの共感の知覚の程度(5 項目 10 段階評価)、パートナーとの自他の重なり(6 項目 10 段階評価)について回答を求めた。こ



これらの項目は、本論文の研究 5 で用いられた項目と同様であった。さらに、パートナーからの視点取得可能性の評価(3 項目)、およびパートナーとの対人関係構築を望む程度(6 項目)に回答してもらった。これらの項目の詳細は後述した。最後に、研究 7 の目的について確認し(自由記述項目)、またご意見・ご感想を記述するための自由記述欄を設けた。フェーズ 2 用回答フォームへの回答が確認でき次第、ディブリーフィング資料を送信する。この資料では、本当の目的について説明した。

#### **パートナーの感情的視点取得能力の評価**

パートナーの感情的視点取得能力の評価は、パートナーが参加者に対してうまく感情的視点取得をできたと思うかどうかをたずねる 3 項目によって測定された。具体的には、(a) パートナーが参加者の視点にたって気持ちを想像することができたと思う程度、(b) パートナーが参加者の視点にたって気持ちを想像することは、難しいと思う程度(逆転項目)、そして(c)参加者がエッセイに記述した経験について、パートナーは参加者の視点にたって想像することができたと思う程度であった。これらの項目は、7 段階評定(1: まったくそう思わない-7: とてもそう思う)での回答を求めた。

#### **パートナーとの関係構築を望む程度**

パートナーとの個人的な友好関係を築きたいと思う程度を問う 6 項目への回答を求めた。具体的には、パートナーと連絡を取ってみたい程度、パートナーに自分のことをもっと知ってほしいと思う程度、パートナーのことをもっと知りたいと思う程度、パートナーと実

際に会ってみたい程度, パートナーとプライベートの時間を一緒に過ごしたいと思う程度, そしてパートナーと友達になりたいと思う程度の 6 項目であった。これらの項目は, 大学生 13 名が回答した, 初対面の他者との友好関係を築きたいときに求めること(e.g., 連絡先を聞いて, 連絡する)を参考に作成された。項目の選択肢は, 7 段階評定(1: まったくあてはまらない—7: とてもよくあてはまる)であった。

## 分析計画

研究 7 では, 3 つの検討課題についてそれぞれ異なる分析を行った。具体的には, それぞれの分析に投入された変数が異なっていた。ただし, すべての分析を通して, MM 推定によるロバスト回帰分析を行った。この方法の概略およびこの方法を用いた理由については, 結果にて後述する。3 つの検討課題と, それぞれの分析で用いた変数について, Table 4.2.1.に示した。

Table 4.2.1.  
各仮説の検討における分析に投入された変数一覧

	従属変数	独立変数
仮説1・2	感情的視点取得能力の評価	感情的視点取得の表明 人一般の感情的視点取得能力信念
仮説3・4	被感情的視点取得の知覚	感情的視点取得の表明 感情的視点取得能力の評価
仮説モデルの検討 <sup>1</sup>	ポジティブ態度 <sup>a</sup> 自他の重なるの知覚 <sup>b</sup> 被共感の知覚 <sup>c</sup> 被感情的視点取得の知覚 <sup>d</sup>	感情的視点取得の表明 <sup>a,b,c,d</sup> 人一般の感情的視点取得能力信念 <sup>a,b,c,d</sup> 被感情的視点取得の知覚 <sup>a,b,c</sup> 被共感の知覚 <sup>a,b</sup> 自他の重なるの知覚 <sup>a</sup>

Note: <sup>1</sup> 仮説1から仮説4の検討で用いた分析手法と同じ手法によって検討するため、MM推定を用いたロバスト回帰分析を4回繰り返した。同じ添え字(a, b, c, d)のついた従属変数および独立変数が投入された。

### (3) 結果

#### 分析対象者

フェーズ 1 およびフェーズ 2 の両方に回答した 35 名(男性 20 名 女性 15 名)が分析対象者となった。平均年齢は 20.03 歳( $SD = 0.62$  歳)であった。なお、表明あり群は 19 名、表明なし群は 16 名であった。分析対象者 35 名における各変数の記述統計を Table 4.2.2. に示した。

Table 4.2.2.  
各変数の内的一貫性係数とその得点の平均値(SD)

	$\alpha$ 係数 <sup>1</sup>	$\omega$ 係数	Mean (SD)	
			表明あり	表明なし
人一般の感情的視点取得能力の信念	.87 [.81, .94]	0.87	4.35(0.77)	4.84(0.86)
被共感の知覚	.81 [.72, .90]	0.82	7.21(1.62)	5.15(1.57)
自他の重なるの知覚	.94 [.91, .97]	0.94	4.98(2.32)	3.50(1.62)
感情的視点取得能力の評価	.76 [.62, .90]	0.80	5.18(1.09)	3.94(1.44)
被感情的視点取得の知覚 <sup>2</sup>	—	—	8.63(1.65)	5.06(2.69)

Note: <sup>1</sup> 中括弧[]内には、 $\alpha$  係数の 95%CI を示した。<sup>2</sup> 2 項目で測定したため、相関係数によって内的一貫性を確認した。その結果、有意な正の相関が示された( $r = .83$ , 95%CI[.69, .91],  $t(33) = 8.69$ ,  $p < .001$ )。

## 人一般の感情的視点取得能力信念

仮説に関する分析にさきがけ、実験条件間で人一般の感情的視点取得能力信念に偏りがあるかどうか確認した。具体的には、人一般の感情的視点取得能力信念得点を従属変数、パートナーからの感情的視点取得表明の有無を独立変数とした  $t$  検定を行った。その結果、人一般の感情的視点取得能力信念得点に感情的視点取得表明の有無による有意な差はみられなかった( $t(30.43) = 1.75, p = .090$ )。このことから、実験条件間に人一般の感情的視点取得能力の信念に偏りはないと判断された。

## パートナーの感情的視点取得能力の評価(仮説 1・2)

パートナーからの感情的視点取得の表明および人一般の感情的視点取得能力信念がパートナーの感情的視点取得能力評価に及ぼす影響を検討するため、パートナーの感情的視点取得能力評価得点を目的変数、人一般の感情的視点取得能力信念得点 $\times 2$ (感情的視点取得表明の有無)を説明変数とした重回帰分析を行った。分析には、人一般の感情的視点取得能力信念得点 $\times 2$ (感情的視点取得表明の有無)による交互作用を含む重回帰モデルが採用された。

分析にさきがけ、感情的視点取得能力の評価得点、および人一般の感情的視点取得能力信念得点を標準化し、また感情的視点取得表明あり条件を 0.5、なし条件を -0.5 にコーディングした<sup>16</sup>。そして、人一般の感情的視点取得能力信念とパートナーの感情的視点取得能

---

<sup>16</sup> 感情的視点取得表明の有無を 0.5, -0.5 でコーディングしたのは、2 値変数を用いて作成される交互作用項を投入することによって生じる多重共線性を避けるためであった。

力評価の散布図を確認した(Figure 4.2.1)。その結果、線形での近似が困難であることが考えられた。そのため、MM 推定によるロバスト回帰分析を行った<sup>17</sup>。

その結果、感情的視点取得表明の標準化偏回帰係数と、人一般の感情的視点取得能力信念得点および感情的視点取得表明による交互作用項の標準化偏回帰係数が有意であった(順に  $\beta = 0.89, t = 3.32, p = .002$ ;  $\beta = -0.65, t = 2.42, p = .021$ )。感情的視点取得の表明あり条件は、なし条件よりもパートナーの感情的視点取得能力の評価得点が高かった(平均値は Table 4.2.2.参照)。人一般の感情的視点取得能力信念得点の偏回帰係数が有意でなかった( $\beta = 0.19, t = 1.44, p = .159$ )。交互作用項が有意であったため、感情的視点取得表明ごとに単純傾斜検定を行った。その結果、表明なし条件においては人一般の感情的視点取得能力信念得点とパートナーの感情的視点取得能力の評価得点に有意な正の関連が示された( $\beta = 0.52, t = 2.77, p = .009$ )。一方で、感情的視点取得表明あり条件においては、有意な関連がみられなかった( $\beta = -0.13, t = 0.69, p = .498$ )。単純傾斜検定の結果を Figure 4.2.2.に示した。

---

<sup>17</sup> ロバスト回帰分析は、外れ値や異常値の影響を小さくし、データの大部分が示す傾向を説明する回帰分析の手法である。その推定方法はいくつかあるが、研究 6 で用いた MM 推定は、回帰モデルにおける目的変数および説明変数のどちらに対しても頑健な推定方法として知られている。

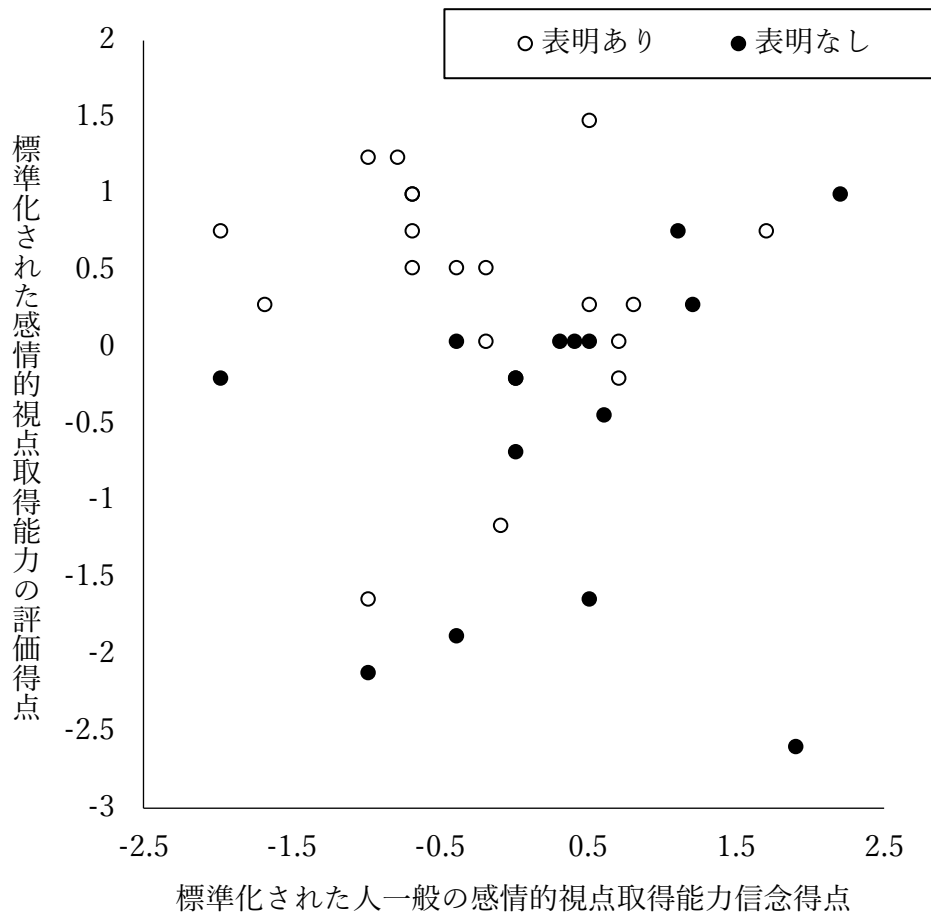


Figure 4.2.1. 感情的視点取得表明の条件別の標準化されたパートナーの感情的視点取得能力評価と標準化された人一般の感情的視点取得能力信念。白点は表明あり条件を，黒点は表明なし条件を示した。



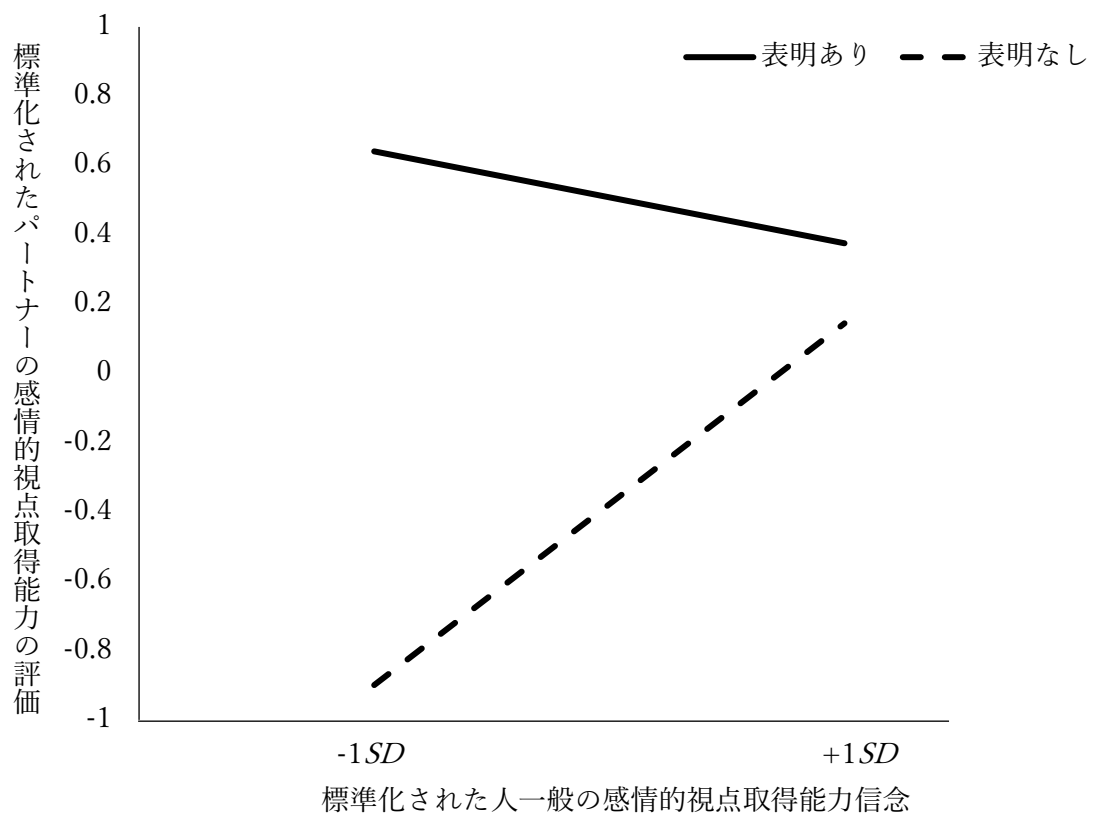


Figure 4.2.2. 感情的視点取得の表明の条件ごとの標準化された人一般の感情的視点取得能力信念得点と標準化されたパートナーの感情的視点取得能力の評価得点の関連。感情的視点取得の表明あり条件を実線で、表明なし条件を破線で示した。

#### 被感情的視点取得の知覚(仮説3・4)

パートナーからの感情的視点取得表明とパートナーの感情的視点取得能力評価が被感情的視点取得の知覚に及ぼす効果を検討した。分析にさきがけ、多重共線性について確認するため、2つの説明変数、すなわちパートナーからの感情的視点取得表明とパートナーの感情的視点取得能力評価の関連が強すぎないかどうか確認した。説明変数間の関連を確認するため、パートナーからの感情的視点取得表明の標準化得点を説明変数、パートナーの感情的視点取得能力の評価の標準化得点を目的変数としたMM推定によるロバスト単回帰分析を行った。その結果、標準回帰係数は $\beta = 0.39$ であった。単回帰分析における標準回帰係数は相関係数に一致することから、パートナーからの感情的視点取得表明とパートナーの感情的視点取得能力評価の間には、多重共線性が懸念されるような強い相関はないと判断された。

多重共線性がないことが確認できたため、被感情的視点取得の知覚得点を目的変数、パートナーの感情的視点取得能力評価 $\times 2$ (感情的視点取得表明の有無)を説明変数とした重回帰分析を行った。説明変数には、2要因の交互作用までが投入された。感情的視点取得表明の有無は、先述の重回帰分析と同様に、多重共線性を避ける目的でコーディングされた(表明あり条件=0.5, 表明なし条件=-0.5)。また、先述した重回帰分析にあわせ、MM推定によるロバスト重回帰分析を行った。その結果、感情的視点取得の表明、パートナーの感情的視点取得能力の評価得点、および感情的視点取得の表明とパートナーの感情的視点取得能力の評価得点による交互作用項の偏回帰係数が有意であった(順に $\beta = 1.16, t = 5.74$ ,

$p < .001$ ;  $\beta = 0.44, t = 4.23, p < .001$ ;  $\beta = -0.52, t = 2.49, p = .018$ )。交互作用項が有意であったため、感情的視点取得の表明ごとに単純傾斜検定を行った。その結果、表明なし条件においては、パートナーの感情的視点取得能力の評価得点と被感情的視点取得の知覚得点に有意な正の関連が示された( $\beta = 0.70, t = 5.38, p < .001$ )。一方で、感情的視点取得表明あり条件においては、有意な関連がみられなかった( $\beta = 0.18, t = 1.13, p = .267$ )。単純傾斜検定の結果を Figure 4.2.3.に示した。

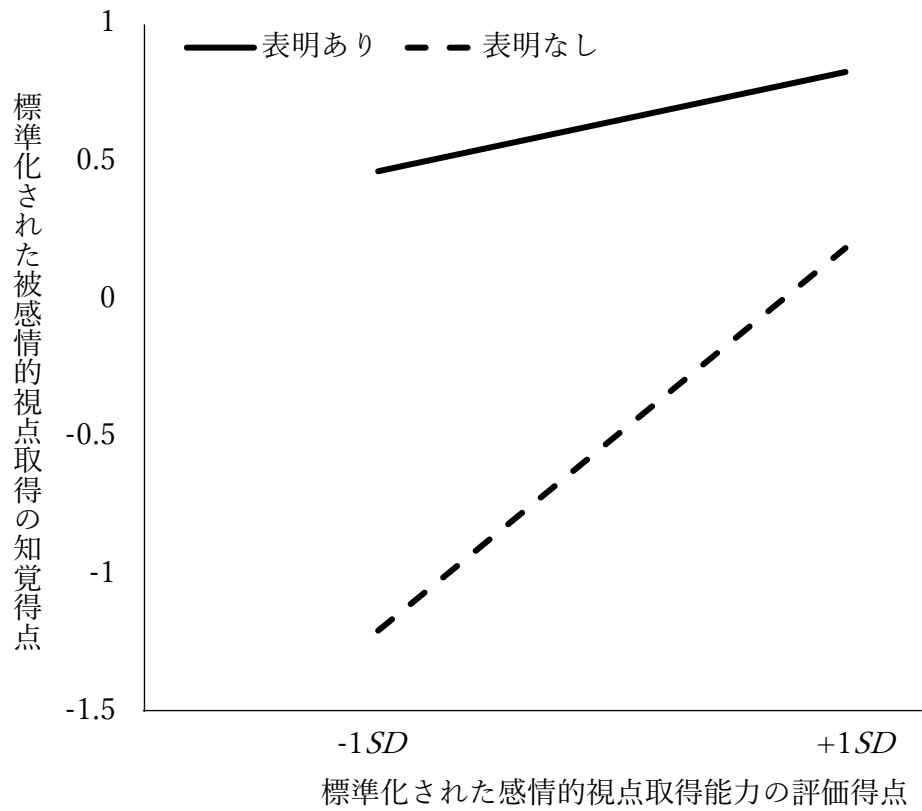


Figure 4.2.3. 感情的視点取得の表明の条件ごとの標準化されたパートナーの感情的視点取得能力の評価得点と標準化された被感情的視点取得の知覚得点の関連。感情的視点取得の表明あり条件を実線で、表明なし条件を破線で示した。

## 他者からの感情的視点取得の表明の効果のプロセス

先述の分析から、他者からの感情的視点取得の表明および他者からの感情的視点取得能力の評価が、被感情的視点取得の知覚を説明することが示唆された。これは、Berndsen & Wenzel (2021)および Goldstein et al.(2014)の結果から導き出された予測と一致する結果であった。そこで、本論文の研究 1—4 で示された結果から想定されるモデル(Figure 4.2.4.)に上記の結果を踏まえた仮説モデルを設定し(Figure 4.2.5.), 他者からの感情的視点取得の表明の効果のプロセスを検討した。

仮説モデル(Figure 4.2.5.)と本論文の研究 1—4 で示された結果から想定されるモデル(Figure 4.2.4.)は、被感情的視点取得の知覚が変数として投入されているかどうかの点で異なっている。本論文の研究 1・3・4 では、操作チェックにおいて、他者からの(感情的)視点取得の表明あり条件は、表明なし条件よりも他者からの(感情的)視点取得を強く知覚していることを確認していた。したがって、本論文の研究 1・3・4 における表明あり条件は被(感情的)視点取得の知覚高群であり、表明なし条件は被(感情的)視点取得の知覚低群と解釈できるものであった。すなわち、他者からの(感情的)視点取得の表明によって被(感情的)視点取得の知覚が促進され、その結果として被共感の知覚が促進される以降の効果が示される可能性が考えられた。これに対して、研究 7 では、被感情的視点取得の知覚が、他者からの感情的視点取得の表明および他者の感情的視点取得能力の評価によって説明されることが明らかとなった。そこで、他者からの感情的視点取得の表明および他者の感情的視点取得能力の評価によって被感情的視点取得の知覚が説明され、それによって本論文

の研究 1・3・4 で示された結果から想定されるモデル(Figure 4)における被共感の知覚以降の効果が示されるモデルを想定した。

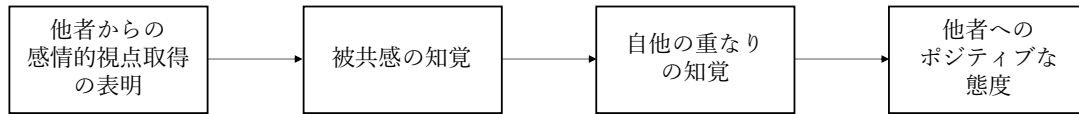


Figure 4.2.4. 本論文の研究 1・3・4 の結果から予想されたモデル。「他者からの感情的視点取得の表明」については、被感情的視点取得の知覚と正の関連が示されている。

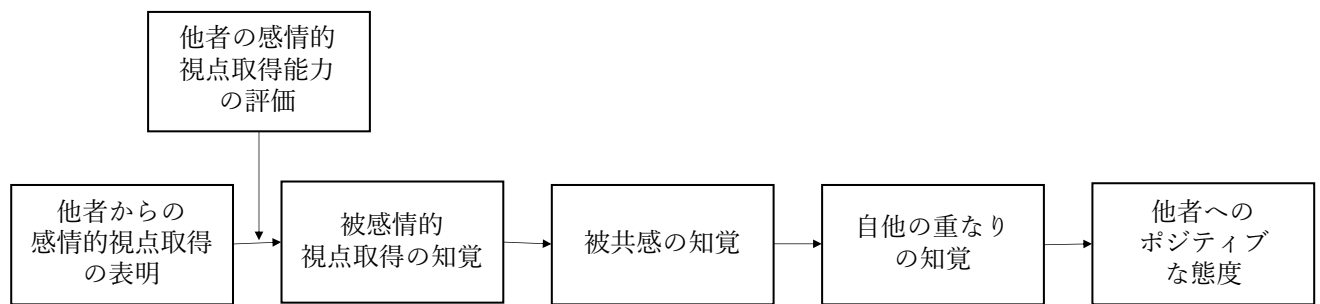


Figure 4.2.5. 研究7の結果を踏まえた仮説モデル。



仮説モデル(Figure 4.2.5.)の分析にあたり、つぎの問題があった。すなわち、ロバストな推定方法である MM 推定によるパス解析を実施可能な統計ソフトが見当たらないことであった。研究 7 におけるこれまでの分析は、MM 推定を用いたロバスト重回帰分析を行っており、その結果に基づいて仮説モデル(Figure 4.2.5.)は提案されている。したがって、最尤法や(一般化)最小二乗法による一般的なパス解析では、仮説モデルを適切に検討できない可能性があった。

そこで、研究 7 では、変数間の関連を検討することにとどめることとした。具体的には、仮説モデル上において、該当変数よりも前のプロセスに組み込まれる変数すべてを説明変数とし、MM 推定によるロバスト重回帰分析を繰り返した。この分析において、仮説モデルで影響が想定される変数のみからの効果が有意であれば、仮説モデルが想定するプロセスを支持する可能性が示される。たとえば、他者へのポジティブな態度への効果は、自他の重なる知覚、被共感の知覚、被感情的視点取得の知覚、および他者からの感情的視点取得の表明×他者の感情的視点取得能力の評価による交互作用項の 4 変数を説明変数とするロバスト重回帰分析によって検討される。このとき、自他の重なる知覚のみの有意な関連が示されれば、他者へのポジティブな態度へのパスは自他の重なる知覚のみにみられると考えられるため、仮説モデルが想定するプロセスを間接的に検討できる。上記の議論に基づき、被感情的視点取得の知覚、被共感の知覚、自他の重なる知覚、および他者へのポジティブな態度を目的変数とした MM 推定によるロバスト重回帰分析を行った。すべての分析において説明変数となる感情的視点取得表明の有無は、交互作用項の作成時の多重共線性を避けるため、表明あり条件を 0.5、表明なし条件を-0.5 にコーディングされ

た。なお、他者へのポジティブな態度は、パートナーとの対人関係の構築を望む程度についてたずねた 6 項目の項目平均値を、ポジティブ態度得点とした( $\omega = .95$ ;  $\alpha = .77$ ,  $\alpha$  95%CI[.64, .91])。

分析の結果、おおむね仮説モデルに従った結果が示された(Table 4.2.3.参照)。まず、ポジティブ態度得点は、自他の重なる知覚得点( $\beta = 0.72, p < .001$ )および他者からの感情的視点取得の表明×他者の感情的視点取得能力の評価による交互作用項( $\beta = -0.60, p = .042$ )からのパスが有意であった。自他の重なる知覚得点は、被共感の知覚得点からのパスのみが有意であった( $\beta = 0.84, p < .001$ )。被共感の知覚得点は、被感情的視点取得の知覚得点からのパスのみが有意であった( $\beta = 0.70, p < .001$ )。そして、被感情的視点取得の知覚得点は、他者からの感情的視点取得の表明×他者の感情的視点取得能力の評価による交互作用項からのパスが有意であった( $\beta = -0.60, p = .002$ )。

Table 4.2.3.

被感情的視点取得の知覚, 被共感の知覚, 自他の重なるの知覚, および他者へのポジティブな態度を目的変数としたMM推定によるロバスト重回帰分析の結果

	被感情的視点取得の知覚得点			被共感の知覚得点			自他の重なるの知覚得点			ポジティブ態度得点						
	$\beta$	SE	t	p	$\beta$	SE	t	p	$\beta$	SE	t	p				
intraaction	0.94	0.28	3.31	.002**	0.35	0.29	1.23	.229	0.25	0.26	0.97	.342	-0.60	0.28	-2.12	.042*
P-APT					0.70	0.13	5.42	.000***	-0.08	0.16	-0.48	.634	-0.26	0.18	-1.48	.148
P-Em									0.84	0.16	5.25	.000***	-0.08	0.25	-0.31	.755
P-SO													0.72	0.20	3.53	.001***

Note : \*\*\* p < .001, \*\* p < .01, \* p < .05. intraaction: 他者からの感情的視点取得の表明と他者の感情的視点取得能力の評価得点の積(交互作用項)。

P-APT: 被感情的視点取得の知覚得点。P-Em: 被共感の知覚得点。P-SO: 自他の重なるの知覚得点。

#### (4) 考察

研究 7 では、他者からの感情的視点取得の表明がある際の、その他者の感情的視点取得能力の評価および被感情的視点取得の知覚を説明する要因の検討を行った。その結果、大きく 3 つのことが明らかになった。

#### 他者の感情的視点取得能力の評価

第一に、他者の感情的視点取得能力の評価は、他者からの感情的視点取得の表明と人一般の感情的視点取得能力信念との交互作用によって説明されることが示された(Figure 4.2.2. 参照)。まず、感情的視点取得の表明を受けた場合、それを受けなかった場合よりも他者の感情的視点取得能力を高く評価していた。したがって、他者からの感情的視点取得の表明がある場合(表明あり条件)、客観的視点に立ったと表明される場合(表明なし条件)よりも他者の感情的視点取得能力は高く評価されるという仮説 1 は支持された。また、感情的視点取得の表明を受けなかった場合には、人一般の感情的視点取得能力信念が高い人ほど他者の感情的視点取得能力を高く評価することが示された。したがって、客観的視点に立ったと表明される場合(表明なし条件)には、人一般の感情的視点取得能力信念が強い人ほど他者の感情的視点取得能力を高く評価することを予測した仮説 2 は支持された。

他者からの感情的視点取得の表明がある場合(表明あり条件)、客観的視点に立ったと表明される場合(表明なし条件)よりも他者の感情的視点取得能力は高く評価されたのは(仮説 1)、「人は一般的に他者視点に立って気持ちを想像できないのだから、この人もきっと、

私の視点に立って気持ちを想像できていないはずだ」と考える人がほとんどいなかったためであると考えられる。研究7では、分析対象者の人一般の感情的視点取得能力信念得点は、平均値 4.57( $SD = 0.84$ )であり、最小得点が 2.92 点であった。得点の取りうる範囲が 1 点から 7 点であることを考えると、観測された最低点である約 3 点という得点は、どちらともいえない(中点 4 点)よりも少し低評価であり、「人は一般的に他者視点に立って気持ちを想像できない」と強く信じてるとは言い難い。したがって、少なくとも「人は一般的に他者視点に立って気持ちを想像できない」と強く信じていた参加者はいなかったと考えられる。むしろ、ほとんどの参加者は、人は一般的に感情的視点取得能力を有すると信じていただろう。この結果は、人一般の感情的視点取得能力信念尺度を作成した研究6で示された尺度得点の分布を再現する結果と言える<sup>18</sup>。そのため、仮説1で予測したように、ほとんどの参加者は、少なくとも「人は一般的に他者視点に立って気持ちを想像できない」と思っていなかったため、他者からの感情的視点取得の表明を疑うことなく受け入れ、感情的視点取得の表明を受けた表明あり条件の参加者は、「客観的視点に立った」と表明された表明なし条件の参加者よりも、パートナーの感情的視点取得能力を高く評価したと考えられる。

また、「客観的視点に立った」と表明された表明なし条件において、人一般の感情的視点取得能力信念と他者の感情的視点取得能力の評価に正の関連がみられた(仮説2; Figure

---

<sup>18</sup> 研究6において、人一般の感情的視点取得能力信念尺度は、平均点 4.52( $SD = 0.97$ )の正規分布を示し、また分析対象者の約 93%が、尺度得点の範囲(1—7 点)のうち 3 点以上を示した。

4.2.2. 参照)。したがって、他者からの感情的視点取得の表明がなかったとしても、「人は一般的に他者視点に立って気持ちを想像できる」と強く信じている人ほど、その他者の感情的視点取得能力をより高く評価することが示唆された。ただし、この傾向は、他者の感情的視点取得能力を明確に判断するための情報が得られなかった場合に限られる可能性がある。研究 7 における感情的視点取得の表明なし条件の参加者は、「客観的視点に立った」というフィードバックを受けた。このフィードバックでは、パートナーが「客観的視点に立った」のは、パートナーの感情的視点取得能力が低かったからなのか、それともパートナーの感情的視点取得能力によらず、パートナーは意図的に客観的な視点に立ったのかが判断できなかったと考えられる。そのため、感情的視点取得の表明なし条件の参加者は、自身のもつ人一般の感情的視点取得能力信念を当てはめて、パートナーの感情的視点取得能力を評価した可能性がある。

上記の可能性は、係留と調整のヒューリスティックスの考え方によって説明できる。係留と調整のヒューリスティックスとは、最初に与えられた情報を基準とし、それに調整を加えることで判断する方略をさす(相馬・都築, 2014)。そのため、「最初の情報に現れた特定の特徴を極端に重視しやすい」という(相馬・都築, 2014)。この考え方を上記の可能性に当てはめると、次のように考えることができる。感情的視点取得の表明なし条件の参加者は、パートナーから「客観的視点に立った」というフィードバックを受けた。このときのパートナーの感情的視点取得能力の評価が基準値となる。しかしながら、「客観的視点に立った」というフィードバックは、パートナーの感情的視点取得能力を評価するための情報として十分ではなかった。そのため、人一般の感情的視点取得能力信念を用いて、パー

トナーの感情的視点取得能力の評価を修正したと考えられる。なお、感情的視点取得の表明あり条件において、人一般の感情的視点取得能力信念とパートナーの感情的視点取得能力の評価に関連がみられなかったのは、フィードバックをもとにパートナーの感情的視点取得能力を評価できたため、人一般の感情的視点取得能力信念を用いて修正する必要がなかったためだと考えられる。

### 被感情的視点取得の知覚

第二に、被感情的視点取得の知覚は、他者からの感情的視点取得の表明およびその他者の感情的視点取得能力の評価の交互作用によって説明されることが示された(Figure 4.2.3. 参照)。具体的には、(a)感情的視点取得の表明を受けた場合、それを受けなかった場合よりも、その他者からの感情的視点取得を強く知覚し、また(b)感情的視点取得の表明を受けなかった場合には、その感情的視点取得能力を高いと評価した人ほど被感情的視点取得の知覚が強いことが示された。したがって、他者からの感情的視点取得の表明があり、かつその他者の感情的視点取得能力を高く評価した場合に限り、被感情的視点取得の知覚が促進されるという仮説3は支持されなかった。

まず、(a)他者からの感情的視点取得の表明を受けた場合、それを受けなかった場合よりも、その他者からの感情的視点取得を強く知覚したことは、他者からの感情的視点取得の表明がその他者の感情的視点取得能力を高く評価させたことと関連していると考えられる。研究7では、他者からの感情的視点取得の表明、他者の感情的視点取得能力の評価、および被感情的視点取得の知覚について、次のように予測していた。すなわち、他者から

の感情的視点取得の表明があったとき、その他者の感情的視点取得能力を高く評価した場合には、被感情的視点取得の知覚が生じるが、一方で、他者からの感情的視点取得の表明があっても、その他者の感情的視点取得能力を低く評価した場合には、被感情的視点取得の知覚が生じにくいと予測した。しかしながら、他者からの感情的視点取得の表明あり条件は、表明なし条件よりもパートナーの感情的視点取得能力を高く評価していた(Figure 4.2.2 参照)。すなわち、パートナーからの感情的視点取得の表明あり条件において、パートナーの感情的視点取得能力を低く評価した人はほとんどいなかったということである。したがって、他者からの感情的視点取得の表明を受けた人は、そのほとんどが他者の感情的視点取得能力を高く評価したため、その他者からの感情的視点取得を知覚したと考えられる。

また、(b)感情的視点取得の表明を受けなかった場合には、その感情的視点取得能力を高いと評価した人ほど被感情的視点取得の知覚が強いことが示された。このことは、他者からの感情的視点取得の表明を受けなかった場合、感情的視点取得能力が高いと評価された他者との相互作用においては被感情的視点取得の知覚が生じ、一方で、感情的視点取得能力が低いと評価された他者との相互作用においては被感情的視点取得の知覚が生じにくいと解釈できる。この結果は、特に驚くべきことではないだろう。他者との日常的な会話において、人は、わざわざ「あなたの視点にたって、気持ちを想像した」と表明されなくても、その他者が長い付き合いの友人であったり、自分のことをよく理解してくれる人と評価していたりすれば、その他者は自分に対して感情的視点取得をしてくれていると考えるだろう。このことは、感情的視点取得能力が高いと評価した他者とのコミュニケーション



ヨンにおいては、感情的視点取得能力の表明がなくとも被感情的視点取得の知覚が生じる可能性を示唆すると考えられる。

### 他者からの感情的視点取得の表明の効果のプロセスの検討

第三に、他者からの感情的視点取得の表明の効果のプロセスを検討したところ、おおむね仮説モデル(Figure 4.2.5.)と同様のパスが支持された(Table 4.2.3.参照)。ただし、研究 7 における重回帰分析の方法にあわせた分析を試みた結果、本論文のこれまでの研究でモデルの検討に用いた方法が適用できなかった。そのため、研究 7 の結果は、変数間の関連として仮説モデルと同様のパスが支持されたということを示唆するものの、モデルの適合度を算出していないため、提案するモデルが適切であったのかどうかの評価ができていない。今後の課題として、研究 7 が提案するモデルの適合度を検討する必要があるだろう。

#### 4.3. 研究 8: 他者の感情的視点取得能力の評価に人一般の感情的視点取得能力信念が及ぼす効果の検討—相互作用相手の情報がある場面に注目して—

##### (1) 目的

研究 8 では、他者の感情的視点取得能力の評価および被感情的視点取得の知覚を説明する要因について、人一般の感情的視点取得能力信念および他者との類似経験の有無に注目して検討する。

研究 7 では、他者の感情的視点取得能力の評価および被感情的視点取得の知覚を説明する要因について、大きく 2 つのことが明らかになった。第一に、他者の感情的視点取得能力の評価は、他者からの感情的視点取得の表明と人一般の感情的視点取得能力信念の交互作用効果によって説明されることが示された。感情的視点取得をしたと表明された場合、客観的視点に立ったと表明された場合よりも他者の感情的視点取得能力を高く評価し、また客観的視点に立ったと表明された場合には、人一般の感情的視点取得能力信念が強いほど他者の感情的視点取得能力を高く評価していた(Figure 4.2.2.参照)。第二に、被感情的視点取得の知覚は、他者からの感情的視点取得の表明と他者の感情的視点取得能力の評価の交互作用効果によって説明されることが示された。感情的視点取得をしたと表明された場合、客観的視点に立ったと表明される場合よりも他者からの感情的視点取得能力を強く知覚し、また客観的視点に立ったと表明された場合には、他者の感情的視点取得能力を高く評価しているほど、他者からの感情的視点取得を強く知覚していた(Figure 4.2.3.参照)。

ただし、研究7では検討できていない問題があった。すなわち、他者についての情報を与えられることの効果を検討できていない。Goldstein et al.(2014)は、金銭的な話題において、他者からの視点取得の表明と他者との経済的背景の差異の交互作用によって、その他者の視点取得能力の評価が説明されることを明らかにしている。しかしながら、研究7において、他者(i.e., パートナー)についてフィードバックされた内容は、パートナーが参加者に対して感情的視点取得をしたのか、ないしは客観的視点に立っていたのかという、他者からの感情的視点取得の表明の操作のみであった。他者についての情報が得られる場面を想定し、他者の感情的視点取得能力の評価および被感情的視点取得の知覚を説明する要因の検討を行う必要がある。

#### **他者からの視点取得の表明を受ける場面での他者の情報の働き**

上記の問題について議論するにあたり、まず、他者からの視点取得の表明を受ける場面における他者の情報の役割について考える。本論文の研究7では、他者の情報がなかった場合、他者からの感情的視点取得の表明があるかどうかによって、他者の感情的視点取得能力の評価が影響されることが示された。ただし、Goldstein et al.(2014)は、金銭的な話題において、他者からの視点取得の表明と他者との経済的背景の差異の交互作用によって、その他者の視点取得能力の評価が説明されることを明らかにしている。これらのことから、他者からの視点取得の表明を受ける場面における他者の情報は、他者からの視点取得の表明が他者の視点取得能力の評価に及ぼす影響を調整する要因であると考えられる。したが

って、他者の情報が与えられた場面では、他者からの視点取得の表明のみで他者の視点取得能力を評価するのではなく、与えられた情報も考慮した評価がなされると予測される。

つぎに、他者の情報の内容によって、他者の視点取得能力の評価に及ぼす効果が異なる可能性について議論する。Goldstein et al.(2014)は、金銭的な話題において、相互作用相手の経済的背景(富裕層 vs 中間層)を操作していた。この操作における経済的背景の差は、単に自他が類似した人物かどうかを超えた影響を及ぼしていた可能性がある。たとえば、貧しい人に対する印象と裕福な人に対する印象を比較した研究では、裕福な人は非道徳的であり、かつ幸福であるという印象を持たれやすいことが示されている(Kay & Jost, 2003)。視点取得能力が道徳性と正に関連することを考えれば(e.g.,本間・内山, 2013), Goldstein et al.(2014)の操作における経済的に富裕層の他者は、道徳性が低く、視点取得能力の低い人物だと評価されていたと考えられる。したがって、他者の経済的背景という情報は、他者について得られる情報のなかでも、特異な効果をもつ情報であったと考えられる。

一方で、類似した経験をしたことがあるかどうかについての情報を与えられた場合、Goldstein et al.(2014)が示した他者の視点取得能力を低く評価させるような効果はみられないと考えられる。たとえば、近年、Covid-19(新型コロナウイルス感染症)の流行により、多くの大学生は、対面講義やサークル活動の自粛といった、大学生活での様々な制限を余儀なくされている(e.g., 平賀, 2021)。もし、大学生活での自粛を余儀なくされている学生が、幸運にも Covid-19の影響を受けていないという大学生とコミュニケーションを行ったとき、相手の学生を道徳性に乏しく、視点取得能力が低い人物だと評価するとは考えにくい。同じように自粛を余儀なくされている他者の方が、幸いにも自粛を免れている他者よりも、

自身の境遇を想像しやすいと評価する程度だと考えられる。このことから、自他の類似経験があるかどうかといった情報は、他者からの視点取得の表明が他者の視点取得能力の評価に及ぼす効果を調整するほどの働きはしないと予測される。研究 8 では、参加者に与えられる他者の情報として、Covid-19 の流行により大学生活での様々な制限を余儀なくされている人物かどうかを採用した。Covid-19 の流行は世界的な問題であり、これに関連する知見を蓄積することには、多くの意義があると考えられるためである。

他者からの視点取得の表明のみではなく、他者との類似経験があるかどうかの情報も考慮して他者の視点取得能力が評価される場合、その効果は研究 7 における考察によって説明できる可能性がある。研究 7 では、客観的視点に立ったと表明された場合には、人一般の感情的視点取得能力信念が強いほど他者の感情的視点取得能力を高く評価していたことについて、つぎのように考察した。すなわち、パートナーが「客観的視点に立った」のは、パートナーの感情的視点取得能力が低かったからなのか、それともパートナーの感情的視点取得能力によらず、パートナーは意図的に客観的な視点に立ったのかが判断できなかったため、他者の感情的視点取得能力を評価する際に、自身のもつ人一般の感情的視点取得能力信念を参照した可能性が指摘された(研究 7)。これは、他者の感情的視点取得能力が高い可能性も低い可能性も考えられたとき、人は他の情報を参照して他者の感情的視点取得能力を評価するという、係留と調整のヒューリスティックスに従った結果であると考えられた。

他者からの感情的視点取得の表明、他者との類似経験の有無、そして人一般の感情的視点取得能力信念が他者の感情的視点取得能力の評価に影響するのは、係留と調整のヒュー

リストティックスに従えば次のように考えられる。まず、研究7で考察したように、他者からの感情的視点取得の表明が他者の感情的視点取得能力の評価の基準値となる。すなわち、他者からの感情的視点取得の表明を受ければ、表明を受けなかった場合よりも、その他者の感情的視点取得能力は高く評価される。つぎに、その基準値からの修正が行われる。修正の際、人一般の感情的視点取得能力信念がより強い人ほど、また相互作用相手に類似経験があれば類似経験のない場合よりも、他者の感情的視点取得能力は高く評価されると考えられる。

上述の議論から、研究8で扱う相互作用相手との類似経験の有無は、他者の感情的視点取得能力の評価を促進する要因であると考えられる。この点は、経済的拝見の差異 (Goldstein et al., 2014) や、加害者が被害者の感情を正しく予測できていたか否か (Berndsen et al., 2021) という他者の情報が他者からの視点取得の表明の効果を抑制することを明らかにした先行研究と研究8の相違点である。

研究8では、上述の相違点を考慮したうえで相互作用相手との類似経験の有無に注目した。先行研究では、相互作用相手との経済的背景が異なることや、自身が被害者であったときに加害者が被害者の感情を正しく予測できていないという情報を受け取ることによって、人が他者の視点取得能力を低く評価しやすくなることが示された (Berndsen et al., 2021; Goldstein et al., 2014)。これらの知見は、ある種の他者の情報が、他者の視点取得能力の評価を抑制する要因になることを示唆している。一方で、上述のように、自分自身と相互作用相手に類似経験があるかどうかといった、他者の視点取得能力の評価を促進する要因になると考えられる他者の情報もある。促進要因となりうる他者の情報について明らかにす

ることで、人が他者からの視点取得の表明を受ける場面において他者の視点取得能力を評価するとき、他者の情報はその種類によって、他者の視点取得能力の評価を抑制する要因にも促進する要因にもなりうる可能性について議論でき、被視点取得に関する理論構築に大きく寄与すると考えられる。そのため、研究 8 では、他者からの視点取得の表明の効果を促進すると考えられる他者の情報として、相互作用相手との類似経験の有無に注目した。

### 研究 8 の目的

これまでの議論および研究 7 で示された結果から、3 つの仮説を設定し、他者の感情的視点取得能力の評価および被感情的視点取得の知覚を説明する要因について、人一般の感情的視点取得能力信念および他者との類似経験の有無に注目して検討する。まず、他者の感情的視点取得能力の評価は、他者からの視点取得の表明、他者との類似経験の有無、および人一般の感情的視点取得能力信念それぞれによって説明されると予測した。係留と調整のヒューリスティックスに従い、他者の感情的視点取得能力は、他者からの感情的視点取得の表明の有無を基準とし、他者と類似経験があるかどうか、また自身のもつ人一般の感情的視点取得能力信念によって調整されると考えられる。ただし、Goldstein et al.(2014) が操作した、経済的に富裕層であるという情報を受け取ることとは異なり、他者との類似経験がないという情報を受け取ったからといって、その他者の道徳性を低く見積もるとは考えにくい。したがって、Goldstein et al.(2014) が示したような、他者の情報による抑制効果はみられないだろう。類似経験のある他者は、類似経験のない他者に比べて、感情的視点取得能力が高く評価されると予測する。そして、人一般の感情的視点取得能力信念が強

いほど、他者の感情的視点取得能力を高く評価すると予測する。これは、他者からの感情的視点取得の表明の内容によって他者の感情的視点取得能力を判断できなかった場合、人一般の感情的視点取得能力信念と他者の感情的視点取得能力の評価に正の関連がみられたことから(研究 7)、他者との類似経験の有無がフィードバックされることによって、他者からの感情的視点取得の表明の内容だけでは他者の感情的視点取得能力を評価できなくなった研究 8においても、同様の関連がみられると考えられたためである。上記のことから、他者からの視点取得の表明あり条件は表明なし条件よりも、類似経験条件は非類似経験条件よりも、そして人一般の感情的視点取得能力信念得点が高いほど、他者の感情的視点取得能力は高く評価されるだろう(仮説 1)。

つぎに、研究 7において、他者からの感情的視点取得の表明および他者の感情的視点取得能力の評価の交互作用によって被感情的視点取得の知覚が説明されていたことから、同様の結果が再現されると予測する。すなわち、他者からの感情的視点取得の表明あり条件は、表明なし条件よりも被感情的視点取得の知覚が強く、また表明なし条件においては、他者の感情的視点取得能力を高く評価する人ほど被感情的視点取得の知覚を高く評価するだろう(仮説 2)。

最後に、他者からの感情的視点取得の表明の効果のプロセスについて予測する。研究 7の結果から、他者からの感情的視点取得の表明および他者の感情的視点取得能力の評価の交互作用によって、被感情的視点取得の知覚が影響され、それによって被共感の知覚、自他の重なり知覚、そして他者へのポジティブな態度が促進されることが示された。研究



8においても、同様のプロセスが支持されるだろう(仮説3)。仮説3における仮説モデルを Figure 4.3.1.に示した。

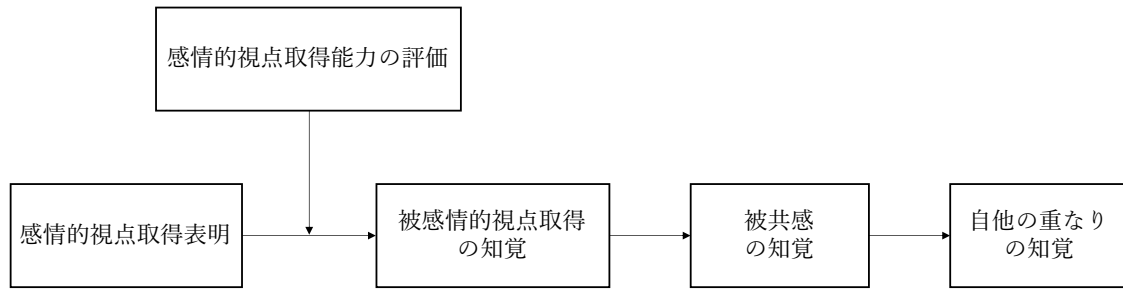


Figure 4.3.1. 他者からの感情的視点取得の表明の効果の仮説モデル(仮説3)。

## (2) 方法

### 研究デザインと参加者

実験デザインは、2(感情的視点取得の表明：表明あり vs 表明なし)×2(他者情報：類似経験 vs 非類似経験)の参加者間計画であった。さらに、研究8では、上記の実験操作による独立変数のほかに、分析時に調整変数として投入される量的変数(i.e., 人一般の視点取得能力信念および他者の視点取得能力の評価)があった。また、他者の視点取得能力の評価は、仮説1の検討において従属変数であり、一方で仮説2の検討において調整変数となる。各仮説と分析に用いた変数の対応について、分析計画にて後述した(Table 4.3.1.参照)。

参加者は、例数設計に基づいて募集された。感情的視点取得の表明、他者情報、および人一般の感情的視点取得能力信念の3変数と、これら3変数の組み合わせによる2つの2要因および1つの3要因の交互作用効果によって他者の感情的視点取得能力の評価を説明する一般線形モデルを想定し、効果量中( $f^2 = 0.15$ )、有意水準  $\alpha = .05$ 、検定力  $1 - \beta = .80$  を基準に例数設計を行った。本論文におけるこれまでの研究では、効果量大( $f^2 = 0.35$ )を基準としていたが、研究8で扱う他者情報の効果量について予想できなかったため、効果量中を基準とした。その結果、必要な参加者数は98名であった。回答漏れ等によって除外される参加者数を考慮し、都内大学に通う学生113名(男性50名、女性61名、Xジェンダー1名、その他1名)が参加した。

## 手続き

実験2の手続きは、おおよそ実験1の手続きと同様のものであった。ただし、以下の点が異なっていた。第一に、フェーズ2の案内メールに記載されたフィードバックにおいて、参加者の記述したエッセイをパートナーがどのように読んだかのフィードバックにくわえ、パートナーについての情報がフィードバックされた。類似経験条件では、「あなたのパートナーも、あなたと同じように、講義のオンライン化を経験したそうです。」というフィードバックが追加された。非類似経験条件では、「あなたのパートナーは、実習の多い医療系の大学に通っており、4月以降もほとんどの授業が対面で行われていたため、オンライン授業はほとんど経験しなかったと言っていました。」というフィードバックが追加された。研究8のフェーズ2開始時に送信されたメール文面の例を付録Hに示した。

第二に、フェーズ2用の回答フォームにおいて回答してもらったパートナーからの感情的視点取得能力評価について、他者情報別に3パターンの設問を用いた。すなわち、(a)参加者の他者情報の条件にあわせたパートナーからの被視点取得可能性の評価を回答するパターン(実験条件)、(b)もし参加者のパートナーが異なる条件であったと仮定した場合の被視点取得可能性の評価(IF条件; e.g., 類似経験条件の参加者では「もしあなたのパートナーが同じ経験をしていなかったとしたら」)、そして(c)記述してもらったテーマ(i.e., 講義のオンライン化)以外の経験について話した場合における被視点取得可能性の評価であった。この参加者内要因を、場合分けと呼ぶ。

## 分析計画

研究 8 では、3 つの仮説についてそれぞれ異なる分析を行った。具体的には、他者の感情的視点取得能力の評価を説明する要因の検討(仮説 1)および被感情的視点取得の知覚を説明する要因の検討(仮説 2)では重回帰分析を、そして他者からの感情的視点取得の表明の効果のプロセスの検討(仮説 3)ではパス解析を行った。また、それぞれの分析に投入された変数は異なっていた。それぞれの分析で用いた変数について、Table 4.3.1.に示した。

さらに、検討した仮説を傍証する知見として、パートナーの感情的視点取得能力の評価得点を目的変数、参加者内要因である場合分け(実験条件 vs IF 条件)、参加者間要因である他者からの感情的視点取得の表明(表明あり条件 vs 表明なし条件)、他者情報(類似経験条件 vs 非類似経験条件)、および人一般の感情的視点取得能力信念得点を説明変数とした階層線形モデルによる分析を行った<sup>19</sup>。

---

<sup>19</sup> 階層線形モデルは、階層データについて、回帰式における集団ごとの切片および傾きの差を考慮できる方法である。マルチレベルモデルともいう。分析では、分析対象者によるランダム切片モデルを採用し、個人内変動と要因の効果を区別した。この意味で、参加者内分散分析と同様の分析と言える。説明変数に量的変数と質的変数がどちらも含まれ、かつ参加者内要因を投入した重回帰モデルを構築するため、階層線形モデルを用いた。

Table 4.3.1.  
各仮説の検討における分析に投入された変数一覧

	従属変数	独立変数
仮説 1	感情的視点取得能力の評価	感情的視点取得の表明(表明あり vs 表明なし) 他者情報(類似 vs 非類似) 人一般の感情的視点取得能力信念
仮説 2	被感情的視点取得の知覚	感情的視点取得の表明(表明あり vs 表明なし) 感情的視点取得能力の評価
仮説 3 <sup>1</sup> (モデルの検討)	感情的視点取得の表明×感情的視点取得能力の評価による交互作用項 被感情的視点取得の知覚 被共感の知覚 自他の重なるの知覚	

Note: <sup>1</sup>パス解析に用いた変数を列挙した。

### (3) 結果

#### 分析対象者と操作チェック

参加者 113 名のうち、フェーズ 1 とフェーズ 2 の両方に回答した 75 名(男性 30 名, 女性 44 名, Xジェンダー1名)を分析対象者とした。有効回答率は 67.06%であった。フェーズ 1 に回答したものの、フェーズ 2 の回答がなかった参加者は、無効回答となった。

感情的視点取得表明の有無およびパートナーの経験の操作がうまくいっていたかどうかを確認するため、フェーズ 2 開始時のメールにて行ったフィードバックを理解していたかを問う項目の回答が正しいかどうかを検討した。その結果、計 9 名が除外された。

実験条件によって人一般の感情的視点取得能力信念に偏りがないかどうかを検討するため、人一般の感情的視点取得能力信念尺度の得点( $\omega = .89$ ,  $\alpha = .89$ ,  $\alpha$  95%CI[.85, .93])を従属変数とした 2(感情的視点取得表明)×2(パートナーの経験)の分散分析を行った。その結果、有意な差はみられなかった(Table 4.3.2.参照)。したがって、実験条件による人一般の感情的視点取得能力信念の偏りはないと判断された。

Table 4.3.2.

人一般の感情的視点取得能力信念尺度の得点を従属変数とした  
2(感情的視点取得表明)×2(パートナーの経験)の分散分析表

	<i>SS</i>	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i> 値	<i>p</i> 値	$\eta_p^2$
感情的視点取得表明	0.133	1	0.13	0.14	.71	.00
パートナーの経験	0.478	1	0.48	0.49	.49	.01
交互作用	0.006	1	0.01	0.01	.94	.00
Error	60.83	62	0.98			



### パートナーの感情的視点取得能力の評価(仮説1)

パートナーの経験および人一般の感情的視点取得能力信念が人一般の感情的視点取得能力信念を説明するかどうかを検討するため、実験操作(感情的視点取得表明・パートナーの経験)および感情的人一般の視点取得能力信念尺度の得点を説明変数、人一般の感情的視点取得能力信念尺度の得点を目的変数とした重回帰分析を行った。分析にさきがけ、感情的視点取得表明(表明あり vs 表明なし)およびパートナーの経験(類似経験 vs 非類似経験)のそれぞれをダミー変数化した。具体的には、表明あり条件および類似経験条件はそれぞれ0.5とし、表明なし条件および非類似経験条件はそれぞれ-0.5とした。これは、2値変数から交互作用項が作成される際に多重共線性が生じにくくするためであった。くわえて、人一般の感情的視点取得能力信念尺度の得点およびパートナーの感情的視点取得能力評価得点( $\omega = .86$ ,  $\alpha = .84$ ,  $\alpha$  95%IC[.77, .91])を標準化した。分析には、3要因の交互作用までが投入された。

その結果、感情的視点取得表明( $\beta = 0.60$ ,  $t = 2.77$ ,  $p = .007$ )、パートナーの経験( $\beta = 0.50$ ,  $t = 2.30$ ,  $p = .025$ )、および人一般の感情的視点取得能力信念尺度得点( $\beta = 0.32$ ,  $t = 2.30$ ,  $p = .010$ )の偏回帰係数が有意であった。表明あり条件は表明なし条件よりも、また類似経験条件は非類似経験条件よりもパートナーの感情的視点取得能力を高く評価していた。さらに、人一般の感情的視点取得能力信念尺度得点が高いほど、パートナーの感情的視点取得能力をより高く評価していた。有意な交互作用効果はみられなかった。決定係数は有意であった( $R^2 = .32$ ,  $F(7, 58) = 3.91$ ,  $p = .002$ )。

## 実験条件・IF条件におけるパートナーの感情的視点取得能力の評価

他者の感情的視点取得能力評価に他者情報が及ぼす影響についてさらに詳しく検討するため、それぞれ標準化された場合分けによるパートナーの感情的視点取得能力評価得点(実際の他者情報の条件における得点(実際の情報条件))vs もし異なる条件であった場合を想定した得点(IF情報条件))を目的変数とした階層線形モデルによる検討を行った。分析対象者によるランダム切片モデルとし、説明変数として場合分け(実験条件 = 0.5 ; IF情報条件 = -0.5)、感情的視点取得表明(表明あり条件 = 0.5 ; 表明なし条件 = -0.5)、他者情報(類似経験条件 = 0.5 ; 非類似経験条件 = -0.5)、および標準化された人一般の感情的視点取得能力信念尺度得点を投入した。さらに、これら4つの変数による4要因までの交互作用項が投入された。これらの交互作用項を投入したことによる多重共線性を生じにくくするため、すべてのダミー変数はコントラストを付けて-0.5 と 0.5 にコーディングされた。場合分けの要因は、参加者内要因であった。

分析の結果、感情的視点取得表明( $\beta = 0.43, t(58) = 2.87, p = .006$ )、他者情報( $\beta = -0.49, t(58) = 3.27, p = .002$ )、および人一般の感情的視点取得能力信念尺度得点( $\beta = 0.21, t(58) = 2.57, p = .013$ )の効果が有意であった。さらに、場合分けと他者情報の交互作用効果が有意であり( $\beta = 1.97, t(58) = 8.40, p < .001$ )、また他者情報と人一般の感情的視点取得能力信念尺度得点の交互作用効果が有意傾向であった( $\beta = 0.32, t(58) = 1.93, p = .058$ )。そこで、参加者内要因×質的な参加者間要因による交互作用である場合分けと他者情報の交互作用効果は、分散分析モデルに基づいた単純主効果の検定を行った。他者情報と人一般の感情的視点取得

能力信念尺度得点の交互作用効果については、5%水準での有意差はみられなかったこと、そして場合分けとの交互作用がみられなかったことから、事後検定は行わなかった。

場合分け×他者情報の交互作用効果についての単純主効果の検定を行った。その結果、他者情報の単純主効果については、実際の情報条件で有意傾向( $F(1, 64) = 3.07, p = .085, \eta_p^2 = .05$ )、IF情報条件で有意( $F(1, 64) = 83.93, p < .001, \eta_p^2 = .57$ )であった。場合分けの単純主効果については、類似経験条件( $F(1, 33) = 36.32, p < .001, \eta_p^2 = .52$ )および非類似経験条件( $F(1, 31) = 40.87, p < .001, \eta_p^2 = .57$ )ともに有意であった。類似経験条件において、実際の情報条件( $M = 4.51, SD = 1.29$ )はIF情報条件( $M = 3.10, SD = 1.17$ )よりも有意に高い得点を示した( $t(32) = 5.95, p < .001$ )。被類似経験条件においては、実際の情報条件( $M = 3.92, SD = 1.46$ )はIF情報条件( $M = 5.49, SD = 0.93$ )よりも有意に得点が低かった( $t(30) = 6.47, p < .001$ )。他者情報×場合分けの交互作用効果についての分析結果を Figure 4.3.2. に示した。

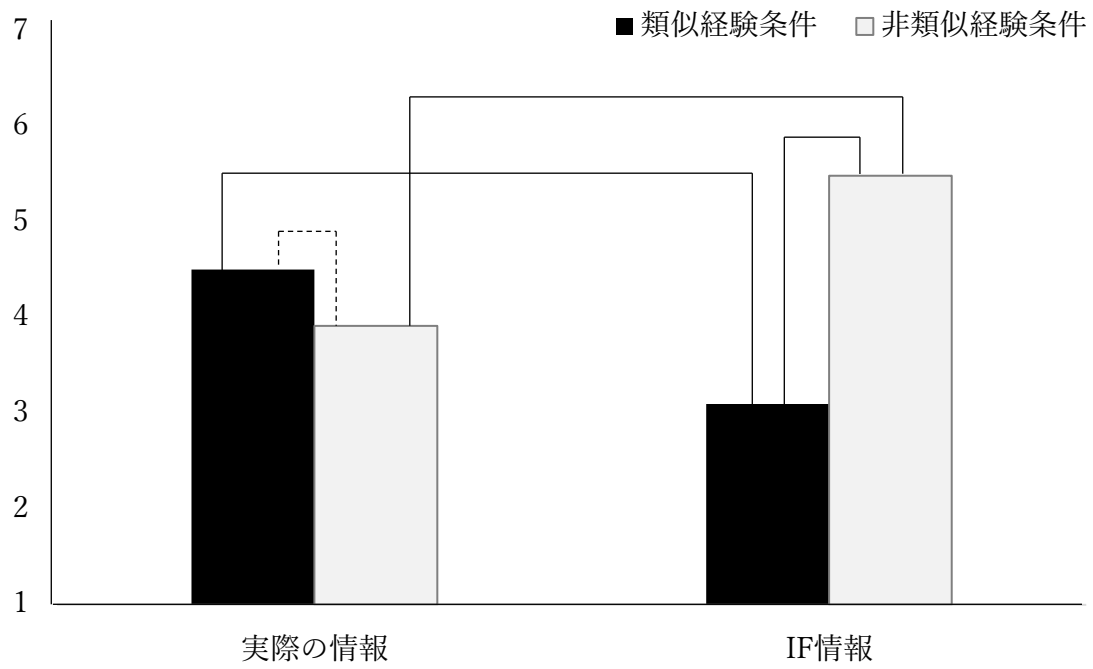


Figure 4.3.2. 他者情報×場合分けによるパートナーの感情的視点取得能力評価得点。

5%水準での有意差は実線で、10%水準での差は破線で示した。

## 被感情的視点取得の知覚(仮説 2)

感情的視点取得の表明およびパートナーの感情的視点取得能力の評価がパートナーからの感情的視点取得の知覚に影響するかどうかを検討するため、感情的視点取得の表明およびパートナーの感情的視点取得能力の評価得点を説明変数、パートナーからの感情的視点取得の知覚の程度( $r = .74, 95\%CI [.61, .83], t(64) = 8.79, p < .001$ )を目的変数とした重回帰分析を行った。先述の重回帰分析と同様に、量的変数は標準化され、また感情的視点取得の表明は多重共線性を避けるためにコントラストをつけてコーディングされた(表明あり条件 = 0.5, 表明なし条件 = -0.5)。

その結果、感情的視点取得表明( $\beta = 0.58, t = 3.31, p = .002$ )、およびパートナーの感情的視点取得能力評価得点( $\beta = 0.56, t = 6.25, p < .001$ )の偏回帰係数が有意であった。さらに、感情的視点取得表明とパートナーの感情的視点取得能力評価得点による交互作用効果が有意傾向であった( $\beta = -0.34, t = 1.86, p = .067$ )。そこで、交互作用効果について検討するため、感情的視点取得の表明の条件ごとにパートナーの感情的視点取得能力の評価と被感情的視点取得の知覚の関連を検討する単純傾斜検定を行った。その結果、表明あり条件および表明なし条件の両方において、パートナーの感情的視点取得能力評価はパートナーからの感情的視点取得の知覚と有意な正の関連を示した(順に  $\beta = 0.74, t = 6.51, p < .001$ ;  $\beta = 0.40, t = 2.84, p = .006$ )。単純傾斜検定の結果を Figure 4.3.3. に示した。

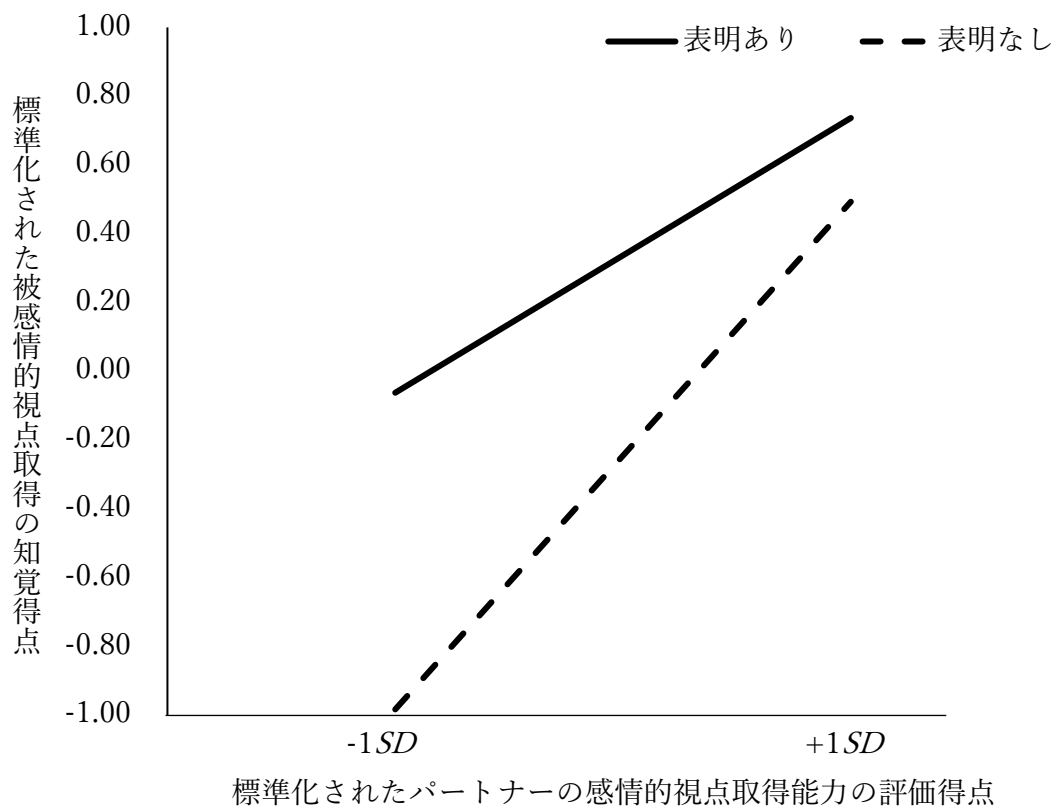


Figure 4.3.3.感情的視点取得の表明の条件ごとの標準化されたパートナーからの感情的視点取得の知覚得点と標準化されたパートナーの感情的視点取得の評価得点の関連。実線は表明あり条件を、破線は表明なし条件を示した。

### 感情的視点取得表明の効果のプロセスの検討(仮説3)

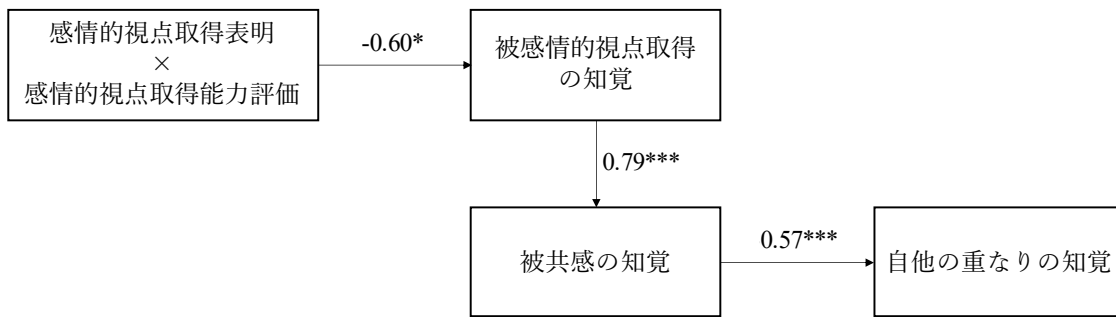
感情的視点取得表明が対人認知に及ぼす効果のプロセスを検討するため、仮説モデル (Figure 4.3.1.)についてパス解析を行った。感情的視点取得の表明とパートナーの感情的視点取得能力評価による交互作用をモデルに組み込むため、Berndsen & Wenzel(2021)を参考にモデルを修正した。すなわち、コーディングされた感情的視点取得の表明の条件(表明あり条件 = 0.5, 表明なし条件 = -0.5)と標準化されたパートナーの感情的視点取得能力評価得点による交互作用項として、これらの変数の積を用いた(以下、交互作用項とよぶ)。その結果、十分な適合度を示すモデルが得られた(Figure 4.3.4.参照)。

つぎに、媒介分析によってモデルにおける間接効果を検討した。その結果、交互作用項から被共感の知覚への直接効果はみられなかった( $\beta = 0.03, p = .88$ )。また、交互作用項および被感情的視点取得の知覚から自他の重なりへの知覚の直接効果も見られなかった(順に  $\beta = -0.05, p = .85$ ;  $\beta = -0.12, p = .48$ )。これらの結果から、モデルは完全媒介であることが示唆された。そして、有意ないし有意傾向の間接効果が得られた(Table 4.3.3.)。

ただし、得られたモデルについて、ひとつ問題があった。それは、他者情報の要因がモデルに投入されていないため、他者との類似経験があることによる自他の重なりへの知覚への効果が検討できていないことである。得られたモデルでは、被共感の知覚のみが自他の重なりへの知覚を説明していた。被共感の知覚から自他の重なりへの知覚へのパスにくわえて、類似経験があることによる自他の重なりへの知覚への独自の効果があるかどうかを確認する必要がある。そこで、標準化された自他の重なりへの知覚得点を目的変数、標準化された被

共感の知覚得点，および他者情報 (類似経験条件 = 0.5，非類似経験条件 = -0.5)を説明変数とした重回帰分析を行った。その結果，被共感の知覚の偏回帰係数は有意であったが( $\beta = 0.57, t = 5.24, p < .001$ )，他者情報の偏回帰係数は有意でなかった( $\beta = -0.03, t = 0.13, p = .90$ )。決定係数は有意であり( $R^2 = .32, F(2, 63) = 14.97, p < .001$ )，多重共線性はみられなかった(VIF = 1.11)。このことから，類似経験の有無による自他の重なる知覚への独自の効果はみられないことが示唆された。





Note:  $\chi^2(3) = 0.53, p = .91$ ; CFI = 1.00, RESEA = 0.00, SRMR = 0.01

Figure 4.3.4. 感情的視点取得表明の効果のプロセスを検討したパス解析の結果(\*  $p < .05$ ,

\*\*\*  $p < .001$ )。

Table 4.3.3.

## 感情的視点取得表明の効果のプロセスにおける間接効果

				間接効果	
表明× 能力評価	→	被感情的 視点取得の知覚	→ 被共感の知覚	-0.48	$p = .033$
		被感情的 視点取得の知覚	→ 被共感の知覚 → 自他の重なり の知覚	0.52	$p < .001$
表明× 能力評価	→	被感情的 視点取得の知覚	→ 被共感の知覚 → 自他の重なり の知覚	-0.31	$p = .051$

Note: 間接効果は、該当変数間の標準化係数の積によって算出された。

#### **(4) 考察**

研究 8 は、他者の感情的視点取得能力の評価および被感情的視点取得の知覚を説明する要因について、人一般の感情的視点取得能力信念および他者との類似経験の有無に注目して検討した。その結果、大きく 3 つのことが明らかとなった。

#### **他者の感情的視点取得能力の評価を説明する要因**

第一に、他者の感情的視点取得能力の評価は、他者からの感情的視点取得の表明、他者との類似経験、そして人一般の感情的視点取得能力信念それぞれによって影響されることが示唆された。具体的には、(a)他者からの感情的視点取得の表明があった場合には、表明がなかった場合よりも、(b)他者との類似経験があった場合には、類似経験がなかった場合よりも、そして(c)人一般の感情的視点取得能力信念が強いほど、他者の感情的視点取得能力を高く評価することが示された。したがって、仮説 1 は支持された。

#### **被感情的視点取得の知覚を説明する要因**

第二に、被感情的視点取得の知覚は、他者からの感情的視点取得の表明および他者の感情的視点取得能力の評価との交互作用効果によって説明されることが示された。具体的には、他者からの感情的視点取得の表明の有無にかかわらず、他者の感情的視点取得能力の評価と被感情的視点取得の知覚に正の関連がみられた。感情的視点取得の表明あり条件および表明なし条件の両方で他者の感情的視点取得能力の評価と被感情的視点取得の知覚に

正の関連がみられたのは予想外であったが、他者の感情的視点取得能力の評価から被感情的視点取得の知覚への単純傾斜は表明あり条件( $\beta = 0.40$ )よりも表明なし条件( $\beta = 0.74$ )の方が大きく、予測した傾向に一致する結果であった(Figure 4.3.3.参照)。したがって、仮説2は部分的に支持されたといえる。

他者からの感情的視点取得の表明あり条件でも他者の感情的視点取得能力の評価と被感情的視点取得の知覚に正の関連がみられたのは、研究7とは異なる結果であった。これは、研究7では他者からの感情的視点取得の表明と人一般の感情的視点取得能力信念によって他者の感情的視点取得能力が評価されたのに対して、研究8では、他者の感情的視点取得能力の評価が他者との類似経験の有無の影響も受けていたためだと考えられる。研究8では、他者との類似経験の有無によっても他者の感情的視点取得能力を評価することができたため、研究7で示された(Figure 4.2.2 参照)、他者からの感情的視点取得の表明があれば、他者の感情的視点取得能力は高く評価されるという関連はみられなかった。そのため、他者からの感情的視点取得の表明あり条件であっても他者の感情的視点取得能力の評価に参加者ごとの差がみられ、他者の感情的視点取得能力の評価と被感情的視点取得の知覚に正の関連が示されたと考えられる。他者からの感情的視点取得を知覚するかどうかに  
おいて、他者との類似経験の有無に関する情報は、大きな役割を有している可能性がある。

他者との類似経験の有無に関する情報が大きな役割を有している可能性は、類似経験の有無の条件ごとに、実際の実験条件および異なる実験条件(IF 条件)それぞれにおけるパートナーの感情的視点取得能力の評価についての分析の結果からも指摘できる。この分析で

は、実際の実験条件におけるパートナーの感情的視点取得能力の評価は、類似経験条件の方が非類似経験条件よりも高く、また実際とは反対の実験条件を想定した場合には(IF条件)、非類似経験条件の方が類似経験条件よりもパートナーの感情的視点取得能力を高く評価していた(Figure 4.3.2.参照)。このことは、他者との類似経験があれば、ないしはあると仮定するならば、他者の感情的視点取得能力は高く評価されやすいことを示唆している。ここで重要なのは、この分析には、他者からの感情的視点取得の表明の要因も投入されていたことである。それにも関わらず、他者からの感情的視点取得の表明は、他の変数との交互作用効果を示さなかった。したがって、他者との類似経験があれば、ないしはあると仮定するならば、他者の感情的視点取得能力は高く評価されやすい傾向は、他者からの感情的視点取得の表明の有無にかかわらずみられる可能性がある。

### 他者からの感情的視点取得の表明の効果のプロセス

第三に、他者からの感情的視点取得の表明の効果のプロセスについて検討した。その結果、他者からの感情的視点取得の表明および他者の感情的視点取得能力の評価の交互作用によって、被感情的視点取得の知覚が影響され、それによって被共感の知覚、そして自他の重なる知覚が影響されるモデルが示された。そして、このモデルは十分な適合度を示した。したがって、仮説3は支持された。仮説モデルは、研究7および研究8の両方でそのプロセスが支持され、また研究8の結果から、十分な適合度を示すことが明らかとなった。このことは、仮説モデルがおおよそ再現性を有することを示唆すると考えられる。

#### 4.4. 第四章のまとめ

第四章では、3つの研究によって(研究 6—8)、他者からの感情的視点取得の表明の効果、およびその効果のプロセスについて、3つの変数に注目した検討を行った。すなわち、他者の感情的視点取得能力の評価、被感情的視点取得の知覚、および人一般の感情的視点取得能力信念であった。第四章の検討内容と各研究の対応を Figure 4.4. に示した。

まず、研究 6 では、人一般の感情的視点取得能力信念の程度を測定する尺度を作成した。その結果、13 項目からなる人一般の感情的視点取得能力信念尺度(BAPTAS)が作成された。作成された尺度について、4つの既存尺度との関連を検討したところ、すべての既存尺度との間に予測通りの関連が示された。 $\alpha$  係数および  $\omega$  係数も十分に高い値を示していたことから、BAPTAS は十分な妥当性と信頼性を備えていると考えられた。

研究 7 では、他者からの感情的視点取得の表明の効果のプロセスについて、他者の感情的視点取得能力の評価、被感情的視点取得の知覚、および人一般の感情的視点取得能力信念に注目して検討した。その結果、大きく3つのことが明らかになった。第一に、他者の感情的視点取得能力の評価は、他者からの感情的視点取得の表明および人一般の感情的視点取得能力信念によって説明されることが示された。具体的には、他者からの感情的視点取得の表明を受けた場合、客観的視点に立ったと表明された場合に比べて、他者の感情的視点取得能力は高く評価されていた。また、客観的視点に立ったと表明された場合においては、人一般の感情的視点取得能力信念が強いほど、他者の感情的視点取得能力を高く評価することが示された。第二に、被感情的視点取得の知覚は、他者からの感情的視点取得

の表明および他者の感情的視点取得能力の評価によって説明されることが示された。具体的には、他者からの感情的視点取得の表明を受けた場合、客観的視点に立ったと表明された場合に比べて、他者からの感情的視点取得を強く知覚していた。また、客観的視点に立ったと表明された場合においては、他者の感情的視点取得能力を高く評価しているほど、その他者からの感情的視点取得を強く知覚することが示された。第三に、他者からの感情的視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果のプロセスについて、他者の感情的視点取得能力の評価および被感情的視点取得の知覚を組み込んだモデルが支持された。他者からの感情的視点取得の表明および他者の感情的視点取得能力の評価による交互作用効果によって被感情的視点取得の知覚が説明され、それによって被共感の知覚、自他の重なる知覚、および他者へのポジティブな態度が直線的に関連するモデルであった。

研究8では、他者からの感情的視点取得の表明の効果のプロセスについて、他者が類似経験を有するかどうかをくわえて検討した。すなわち、研究7で行った実験に、他者がどのような人物か(i.e., 類似経験を有するかどうか)のフィードバックを追加した検討を行った。その結果、他者の感情的視点取得能力の評価は、他者からの感情的視点取得の表明、他者の類似経験の有無、および人一般の感情的視点取得能力信念それぞれから影響されることが示された。具体的には、(a)感情的視点取得の表明があると、それが無い場合よりも、(b)類似経験を持つ他者は、類似経験のない他者よりも、そして(c)人一般の感情的視点取得能力信念が強いほど、他者の感情的視点取得能力が高く評価されることが示された。また、被感情的視点取得の知覚を説明する要因、および他者からの感情的視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果のプロセスについては、研究7と同様の結果が支持された。

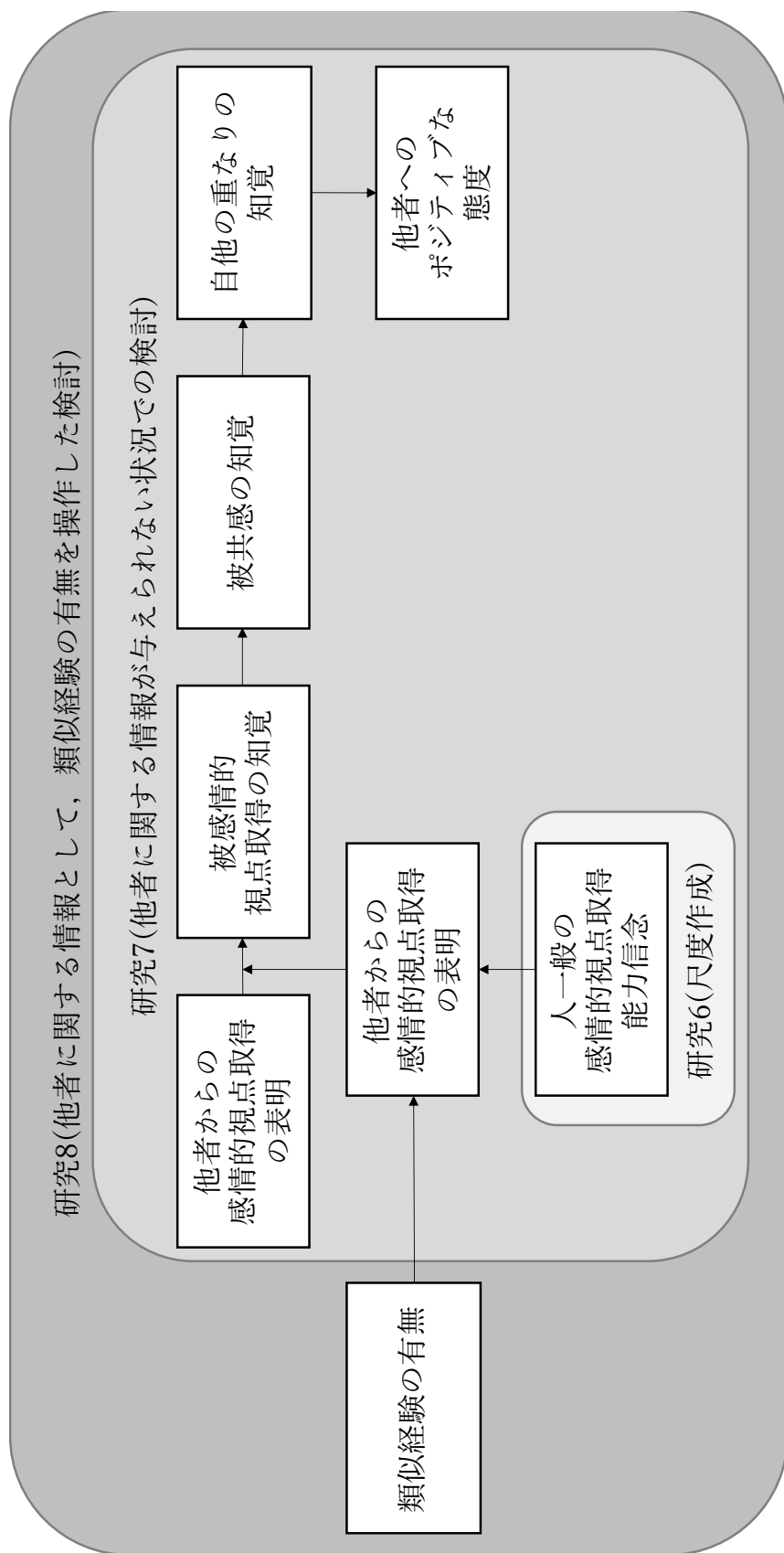


Figure 4.4. 第四章の検討内容と各研究の対応



## 第五章

### 総合考察

本論文の目的は、他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果について検討することであった。具体的には、以下の3つの目的を設定した。すなわち、(a)先行研究で示された他者からの視点取得の表明の効果、およびその効果のプロセスが再現されるのかを確認すること、(b)感情的視点取得と認知的視点取得を区別したとき、それぞれの視点取得の表明を受けることの効果を検討すること、そしてこの2つの目的を検討して得られた知見を踏まえて、(c)他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果について、その効果のプロセスを検討することであった。

本章では、全3節によって総合考察を行う。第1節では、本論文で行った8つの研究で得られた結果を、本論文の3つの目的にあわせて整理し、考察する。第2節では、第1節で整理した知見をもとに、本論文の学術的・社会的意義について考察する。第3節では、本論文の限界と、今後の展望について考察する。

## **5.1. 研究結果のまとめ**

本節では、本論文で行った8つの研究で得られた結果を、本論文の3つの目的にあわせて整理し、考察する。

### **5.1.1. 先行研究で示された結果の検討(第二章)**

第二章では、まず、他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果について、Goldstein et al.(2014)が示した結果が再現されるのかどうか検討した(研究 1)。その結果、他

者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果については、Goldstein et al.(2014)と同様の結果が再現された。すなわち、視点取得されたというフィードバックを受けた人は、視点取得されなかったことをフィードバックされた人よりも、他者からの共感および自他の重なりを強く知覚し、またその他者へのポジティブな態度が促進されていた。しかしながら、他者からの視点取得の表明が対人認知に影響する効果のプロセスについては、Goldstein et al.(2014)とは異なるモデルが支持された。Goldstein et al.(2014)は、他者からの視点取得の表明が他者へのポジティブな態度を促進する効果について、被共感の知覚および自他の重なりを知覚それぞれに媒介される多重媒介モデルを報告したのに対し、研究1では、視点取得されることが被共感の知覚を高め、それによって自他の重なりを知覚が高まり、その結果として他者への好感や関係構築意思が高まるというモデルが示された。

他者からの視点取得の表明の効果に注目した場合、Goldstein et al.(2014)が示したモデルと研究1で示されたモデルは、他者からの視点取得の表明が自他の重なりを知覚に及ぼす直接効果が示されたかどうか異なっていた。すなわち、他者からの視点取得の表明が自他の重なりを知覚に及ぼす直接効果が示されたGoldstein et al.(2014)のモデルに対して、研究1で示されたモデルでは、他者からの視点取得の表明が自他の重なりを知覚に及ぼす効果は、被共感の知覚に媒介されていた。しかしながら、Goldstein et al.(2014)が指摘する被視点取得の知覚が自他の重なりを知覚を促進するメカニズムに従った場合、研究1が示したモデルも説明できると考えられる。Goldstein et al.(2014)は、被視点取得の知覚が自他の重なりを知覚を促進するメカニズムについて、次のように説明している。ある人(被視点取得者)が他者に視点取得されたと知覚することで、被視点取得者は次のように考えると

いう。すなわち、その他者は被視点取得者に視点取得したことによって、被視点取得者の経験を心理的にシミュレーションするため、被視点取得者の経験を共有したと考え、自他の重なりを強く感じるようになるという。

このメカニズムに従えば、被共感の知覚は、被視点取得の知覚よりも自他の重なりを知覚を強く誘発させる効果を持つと考えられる。まず、本論文が定義する被共感の知覚は、他者による感情共有を含む概念である。したがって、被共感の知覚は他者との感情経験の共有であると解釈できる。さらに、本論文の研究2では、被共感経験において自他の重なりを知覚が促進されるのは、自分自身と共感者の経験・境遇・考え方・感じ方が同じだとわかったためである可能性が指摘された。被共感の知覚が自他の重なりを知覚を促進する効果については、研究3で実証的に検討されている。このことから、被共感の知覚は、他者との感情経験の共有のみならず、経験・境遇・考え方・感じ方といった様々な要素の共有を可能にすると考えられる。したがって、研究1で被共感の知覚と自他の重なりを知覚が強く関連するモデルが示されたのは、妥当な結果であったと考えられる。

### 5.1.2. 感情的視点取得と認知的視点取得を区別した検討(第三章)

感情的視点取得と認知的視点取得を区別した検討は、第三章において実施された(研究4-5)。その結果、他者からの感情的視点取得の表明と、他者からの認知的視点取得の表明は、対人認知に対して異なる効果を持つことが明らかとなった。

まず、他者からの感情的視点取得の表明および他者からの認知的視点取得の表明が被共感の知覚に及ぼす効果を検討した結果(研究4)、大きく2つの知見が得られた。第一に、

他者からの感情的視点取得の表明および他者からの認知的視点取得の表明が、それぞれ対応する視点取得をされたという知覚を生じさせることが明らかとなった。このことは、非常に重要な知見であると考えられる。Berndsen & Wenzel(2021)は、他者からの視点取得の表明を受けた際に生じる対人認知への影響は、その他者からの視点取得を知覚することに媒介されることを示している。すなわち、被視点取得の表明を受けた際に他者へのポジティブな態度を促進する効果が生じるかどうかは、視点取得の表明よりもむしろ被視点取得の知覚が生じるかどうか重要であると考えられる。この点において、被感情的視点取得の知覚および被認知的視点取得の知覚を生じさせる要因を明らかにできたことは、被視点取得研究における重要な知見だろう。

第二に、他者からの感情的視点取得および認知的視点取得のどちらの表明を受けた場合でも、それぞれの表明がない場合と比べて、被共感の知覚は促進されていた。しかしながら、被共感の尺度の理論上の中間点からの距離について検討した結果、被共感の知覚を生じさせると解釈できる効果を示したのは、他者からの感情的視点取得の表明のみであった(研究 4)。このことは、他者からの感情的視点取得の表明および他者からの認知的視点取得の表明が、それぞれ対応する視点取得をされたという知覚を生じさせることから(研究 4)、次のように解釈できる。すなわち、他者に感情的視点取得をされたと知覚することは、他者からの共感を知覚させるが、認知的視点取得をされたと知覚しても、共感されたとは知覚しないと考えられる。

被感情的視点取得の知覚のみが被共感の知覚を生じさせるという知見は、Goldstein et al.(2014)が指摘する被視点取得の知覚が被共感の知覚を生じさせるメカニズムについて、

その適用範囲を明らかにしたといえる。Goldstein et al.(2014)は、被視点取得の知覚が被共感の知覚を生じさせることについて、次のように説明している。すなわち、人は、視点取得することがターゲット人物への共感を促進することを経験的に知っているため、他者に視点取得されたとき、共感をされると知覚するという。この考えは、視点取得と共感の関連を前提に、被視点取得の知覚と被共感の知覚の関連を説明している。そして、感情的視点取得と認知的視点取得については、感情的視点取得のみが共感を促進することが指摘されている(Oswald, 1996)。したがって、Goldstein et al.(2014)が指摘するように、共感を促進する視点取得(i.e., 感情的視点取得)をされたとき、被共感の知覚が生じることが示唆されたといえる。この知見は、Goldstein et al.(2014)の指摘は、被感情的視点取得の知覚のみに適応されることを示したと考えられる。

また、他者からの感情的視点取得の表明に注目し、被共感の知覚および自他の重なる知覚に及ぼす効果を検討した結果(研究 5)、大きく 2 つの知見が得られた。第一に、他者からの感情的視点取得の表明が、被感情的視点取得の知覚を生じさせるという研究 4 で示された結果が再現された。ここで重要なのは、研究 4 と研究 5 におけるフィードバックの差異である。研究 4 では他者からの感情的視点取得の表明と他者からの認知的視点取得の表明について、それぞれの視点取得をしたかしていないかでフィードバックしていた。すなわち、研究 4 の参加者は、パートナーが参加者の視点を取って感情や思考を想像したのか、それとも自己視点のままであったのかを明確にフィードバックされていた。一方で、研究 5 では、パートナーが感情的視点取得をしたのか、それとも客観的な視点であったのかフィードバックされた。2 つの研究の結果から、他者からの感情的視点取得の表明は、

自己視点のままであるという表明と比較しても(研究 4)、また客観的視点であるという表明と比較しても、被感情的視点取得の知覚を生じさせるということである。相互作用相手がどのような視点に立っているのかが一切表明されない場合については検討できていないものの、少なくとも自己視点および客観的視点の表明と比較して、感情的視点取得の表明が被感情的視点取得を知覚させる効果をもつことが示唆されたといえるだろう。

第二に、他者からの感情的視点取得の表明が被共感の知覚および自他の重なる知覚に及ぼす効果のプロセスについて、他者からの視点取得の表明が他者へのポジティブな態度を促進するプロセス(研究 1)と同様の結果が得られた。このことから、他者からの感情的視点取得の表明は、他者からの視点取得の表明と同様の効果をもつことが示された。

### 5.1.3. 他者からの視点取得の表明の効果のプロセスの検討(第四章)

第四章では、3つの研究によって、他者からの視点取得の表明の効果のプロセスを、より詳細に検討することを試みた(研究 6—8)。具体的には、まず、他者からの感情的視点取得の表明が被感情的視点取得の知覚に及ぼす影響を調整する可能性のある個人差変数として人一般の感情的視点取得能力信念を提案し、その程度を測定する人一般の感情的視点取得能力信念尺度(BAPTAS)を作成した(研究 6)。そして、他者からの感情的視点取得の表明が他者へのポジティブな態度を促進するプロセスについて、他者の感情的視点取得能力の評価および被感情的視点取得の知覚を組み込んだモデルの構築を行った(研究 7—8)。

第四章の研究から、主に3つの知見が得られた。第一に、他者からの感情的視点取得の表明が被共感の知覚、自他の重なる知覚、そして他者へのポジティブな態度を促進する

プロセスにおいて、他者からの感情的視点取得の表明をはじめとした諸要因によって被感情的視点取得の知覚が生じることの重要性が指摘された。本論文は、まず、Goldstein et al.(2014)が示したモデルに依拠して検討し、Goldstein et al.(2014)とは異なるモデルを示した(研究 1-3)。このモデルでは、他者からの感情的視点取得の表明から被共感の知覚へのパスを想定しており、被視点取得の知覚はモデルに組み込まれていなかった。そして研究 7-8 では、Berndsen & Wenzel(2021)が示したモデルを引用し、被感情的視点取得の知覚を含むモデルの実証的検討を行った。

本論文における一連の研究の結果から提案されたモデルは、Goldstein et al.(2014)のモデルと比較して、次の点を明らかにした。Goldstein et al.(2014)は、他者の視点取得能力を高く評価した場合に限り、他者からの視点取得の知覚が、被共感の知覚および自他の重なり  
の知覚を媒介して、他者へのポジティブな態度を促進すると指摘していた。すなわち、被  
視点取得の知覚の効果は、他者の視点取得能力の評価によって調整されると考えられてい  
た。この点について、本論文が提案するモデルは、他者からの感情的視点取得の表明およ  
び他者の視点取得能力の評価によって、被感情的視点取得の知覚が説明されること、そし  
て被感情的視点取得の知覚から被共感の知覚へのパスが生じることを示した。この結果は、  
Goldstein et al.(2014)のモデルを次のように修正するものであった。すなわち、他者の視点  
取得能力の評価は被視点取得の知覚の効果調整する(Goldstein et al., 2014)のではなく、他  
者の感情的視点取得の評価(および他者からの感情的視点取得の表明)によって、被感情的  
視点取得の知覚が説明されることを明らかにした。



ただし、他者からの視点取得の表明および他者の視点取得の評価によって被視点取得の知覚が説明されることは、すでに Bermdsen & Wenzel(2021)が指摘していたことであった。しかしながら、Bermdsen & Wenzel(2021)は加害者・被害者間での許しについて検討するなかで上記の関連を指摘していた。Goldstein et al.(2014)および本論文の一連の研究が扱った変数である被共感の知覚、自他の重なる知覚、および他者へのポジティブな態度との関連の中で、被視点取得の知覚を説明する要因、および被視点取得の知覚の働きをモデル化し、実証した研究は本論文以外に見当たらない。この点で、本論文の成果は大きな意義を持つといえるだろう。

第二に、被感情的視点取得の知覚は、他者からの感情的視点取得の表明と他者の感情的視点取得能力の評価による交互作用効果によって説明されることが明らかになった(研究7-8)。具体的には、他者からの感情的視点取得の表明があった場合、被感情的視点取得の知覚は高水準であり、一方で他者からの感情的視点取得の表明がなく、客観的視点に立ったと表明された場合、他者の感情的視点取得能力を高く評価した人ほど、その他者からの感情的視点取得を知覚しやすいことが示された。とくに、他者からの(感情的・認知的)視点取得の表明が、対応する視点取得をされたと知覚させる効果は、本論文における一連の研究(研究1・4・5・7・8)で繰り返し示された(e.g., 他者からの感情的視点取得の表明は、被感情的視点取得の知覚を生じさせた)。

本論文で示された結果は、他者からの視点取得の表明があっても、その視点取得がうまくいっていないと判断されると、被視点取得の知覚は生じないという Bermdsen & Wenzel(2021)の結果とは一致しないものであった。先行研究と異なる結果が示されたのは、

他者の感情的視点取得能力を低く評価した参加者がほとんどいなかったためだと考えられる。Berndsen & Wenzel(2021)が示したのは、他者からの視点取得の表明があっても、その視点取得がうまくいっていないと判断される場合の効果であった。すなわち、他者からの視点取得の表明があり、かつ他者の感情的視点取得能力を低いと評価した場合に見られると予測される効果である。しかしながら、本論文の研究 7-8 における他者からの感情的視点取得の表明を受けた条件に、他者の感情的視点取得能力を低く評価した人はほとんどいなかった。具体的には、研究 7 および研究 8 の他者からの感情的視点取得の表明あり条件の他者の感情的視点取得能力の評価得点は、研究 7 で平均 5.18 点( $SD = 1.09$  点)、研究 8 で平均 4.61 点( $SD = 1.20$  点)であった。研究 7-8 ともに、他者の感情的視点取得能力の評価得点の取りうる値は 1-7 点であり、中点が 4 点であることから、他者からの感情的視点取得の表明を受けた人は、他者の感情的視点取得能力をおおよそ中程度から高い水準の間と評価していたと考えられる。したがって、本論文の研究 7-8 において、Berndsen & Wenzel(2021)が示したように、他者からの視点取得の表明があり、かつその視点取得がうまくいっていないと判断されることはなかったと考えられる。

ではなぜ、他者からの感情的視点取得の表明を受けた人の中に、その他者の感情的視点取得能力を低く評価した人がほとんどいなかったのか。この他者の感情的視点取得能力の評価に関する知見が、第四章の研究から得られた最後の知見である。本論文の研究では、他者の感情的視点取得能力の評価は、他者からの感情的視点取得の表明、他者との類似経験の有無、および人一般の感情的視点取得能力信念によって説明されていた。具体的には、(a)他者からの感情的視点取得の表明あると、表明のない場合よりも、(b)類似経験のある

他者は、類似経験のない他者よりも、そして(c)人一般の感情的視点取得能力信念が強いほど、それぞれ独立して他者の感情的視点取得能力の評価を促進していた。そして、これらの要因の交互作用効果はみられなかった。この結果について、研究 7—8 では、係留と調整のヒューリスティックスの観点から考察した。すなわち、他者からの感情的視点取得の表明を受けたかどうかによって、他者の感情的視点取得能力の評価の基準値が決まり、この基準点に依存しながら、他者との類似経験の有無や人一般の感情的視点取得能力信念が他者の感情的視点取得能力の評価が調整する可能性を指摘した。

ただし、他者からの感情的視点取得の表明を基準とした係留と調整のヒューリスティックスで他者の感情的視点取得能力の評価の程度を説明できるのは、本論文の研究で扱った状況のように、明確に視点取得能力が低いと判断されるような人ではない他者との相互作用に限られるかもしれない。これは、他者の感情的視点取得能力を評価する過程において、その他者に関する情報が強い効果を持つ可能性があると考えられるためである。実際の実験条件にあわせてフィードバックされた他者の類似経験の有無における他者の感情的視点取得能力の評価と、もし異なる条件のフィードバックを受けたと想定した場合の他者の感情的視点取得能力の評価を比較した結果<sup>20</sup>、他者との類似経験があることによって他者の感情的視点取得能力を高く評価することが示された。すなわち、実際に他者との類似経験ありというフィードバックを受けた人は、実際のフィードバックにおける他者の感情的視

---

<sup>20</sup> 研究 8 では、実際の実験条件にあわせてフィードバックされた他者の類似経験の有無における他者の感情的視点取得能力の評価と、もし異なる条件のフィードバックを受けたと想定した場合の他者の感情的視点取得能力の評価についての参加者内要因を場合分けと呼んだ。

点取得能力を、もし仮に反対のフィードバック(i.e., 類似経験なし)を受けたと想定した場合よりも高く評価していた。一方で、実際に他者との類似経験なしというフィードバックを受けた人は、実際のフィードバックにおける他者の感情的視点取得能力を、もし仮に反対のフィードバック(i.e., 類似経験あり)を受けたと想定した場合よりも低く評価していた。上記の結果を示した分析では、参加者内要因である場合分けと、他者からの感情的視点取得の表明の有無および人一般の感情的視点取得能力信念による交互作用効果も検討したが、これらの交互作用効果は示されなかった。この結果は、他者に関する情報が他者の感情的視点取得能力の評価に及ぼす影響は、他者からの感情的視点取得の表明があったかどうかや、個人差変数である人一般の感情的視点取得能力信念に程度によって調整されないほど、頑健な効果である可能性を示していると考えられる。

このように、他者の感情的視点取得能力を評価する際、他者に関する情報は非常に強い効果を持つ可能性がある。そのため、経済的背景の差(Goldstein et al., 2014)や、他者の想像した感情が間違っていることが明確に判断できる場合(Berndsen & Wenzel, 2021)のように、他者に関する情報のみによって、その他者の視点取得能力が評価される場合もあるだろう。本論文の研究 7 および研究 8 で示された結果は、他者からの感情的視点取得の表明を基準とした係留と調整のヒューリスティックスで説明することが妥当であると考えられるが、Goldstein et al.(2014)や Berndsen & Wenzel(2021)のように、他者の視点取得能力が低いことを明確に判断できる情報を得られる場合には、他者に関する情報を基準とした評価がなされる可能性があるだろう。

## 5.2. 本論文の意義

本論文では、他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果と、その効果のプロセスについて検討した。本節では、本論文で得られた知見の4つの学術的・社会的意義について考察する。

第一に、本論文が、Goldstein et al.(2014)の結果は再現されるかどうかを検討することからはじめ、体系的に他者からの視点取得の表明の効果を検討できたことである。Goldstein et al.(2014)は、他者に視点取得されることに注目し、その効果を検討した最初の研究であった<sup>21</sup>。視点取得は、する人とされる人が存在する概念である。それにも関わらず、ほとんどの視点取得に関する研究は、視点取得をすることの効果について検討してきた(Goldstein et al., 2014)。他者に視点取得されることについて明らかになることは、視点取得する人と視点取得された人の両方に生じる効果を、包括的に理解していくことにつながると考えられる。この点で、Goldstein et al.(2014)の研究は、大きな意義をもった研究であったといえるだろう。

しかしながら、著者の知る限り、Goldstein et al.(2014)が示した結果の再現性を検討した論文は見当たらない。Goldstein et al.(2014)には、被共感の知覚を1項目で測定していたり、被共感の知覚と自他の重なる知覚の関連が指摘されているにも関わらず(Kimmes, 2013), モデル上でその関連を想定していなかったり、他者からの視点取得の表明と被視点取得の

---

<sup>21</sup> 2者間相互作用において、一方がもう一方に視点取得する効果を検討した論文はあるが、視点取得することの効果と視点取得されることの効果は明確に区別できていなかった(Gakinsky et al., 2008)。この点で、Goldstein et al.(2014)は、他者に視点取得されることの効果を取り出して検討した最初の研究といえるだろう。

知覚を区別していなかったりといった、いくつかの問題があった。これらの問題点を解決しつつ、Goldstein et al.(2014)が示したモデルの再現性を検討し、モデルを修正した本論文の知見は、被視点取得研究に大きく寄与したといえるだろう。

上記では、Goldstein et al.(2014)の問題点のひとつとして、他者からの視点取得の表明と被視点取得の知覚を区別していなかったことを指摘した。本論文の第二の意義として、他者からの視点取得の表明を受けることと、被視点取得の知覚が生じることを区別してモデルを提案できたことがあげられる。本論文では、Goldsteni et al.(2014)が示したモデルから検討をはじめた(第二章)。したがって、第三章までは、他者からの(感情的・認知的)視点取得の表明と被(感情的・認知的)視点取得の知覚を区別してモデルに組み込んでいなかった。そこに、第四章では、Berndsen & Wenzel(2021)が示したモデルを引用し、他者からの感情的視点取得の表明と、被感情的視点取得の知覚を区別したモデルを提案した。したがって、本論文が最終的に示したモデルは、他者へのポジティブな態度という普遍的な他者評価への影響を記述した Goldstein et al.(2014)が示したモデルと、他者への許しという比較的限定された効果について検討した Berndsen & Wenzel(2021)が示したモデルを統合したものだといえる。これら2つの先行研究で得られた知見を統合し、新たなモデルを提案できたことは、被視点取得研究に大きく寄与するだろう。とくに、他者からの感情的視点取得の表明が、被感情的視点取得の知覚を生じさせるために不可欠ではないことを示したことは(研究 8)、大きな意義をもつと考えられる。この知見から、他者からの感情的視点取得の表明がなくても被感情的視点取得の知覚が生じる状況や、どのような他者との相互作用

であれば被感情的視点取得の知覚が生じるのかといった、被感情的視点取得の知覚を生じさせる要因を明らかにする研究の発展が期待できる。

第三に、他者からの視点取得の表明がもつ効果について、感情的視点取得と認知的視点取得を区別した知見が得られたことである。本論文では、他者からの感情的視点取得の表明は、被共感の知覚を促進するが、他者からの認知的視点取得の表明は、被共感の知覚を促進しないことが示された(研究 4)。そして、後続の研究の知見から、他者からの認知的視点取得の表明が被共感の知覚を促進する効果は、被感情的視点取得の知覚に媒介されており、また被共感の知覚が促進されることによって、他者へのポジティブな態度が促進されることが示された。したがって、感情的視点取得をしたという表明(i.e., 「あなたの視点にたつて、あなたの気持ちを想像しました」)は円滑な対人関係を促進する効果が期待できるが、認知的視点取得の表明(i.e., 「あなたの視点にたつて、あなたの考えを想像しました」)には、その効果が期待できないと予想できる。この知見は、他者との円滑な対人関係の構築が必要とされる場面で役立つだろう。例えば、就職や進学によって新しい集団に所属するとき、その集団の構成員とは良好な対人関係を築くことが好ましい。このとき、他者の感情に注目し、被感情的視点取得の知覚を生じさせるような表明ができれば、円滑な対人関係を築きやすくなるだろう。このように、本論文は日常的な対人関係の構築に関する示唆を有しており、社会的意義のある知見を得られたと考えられる。

第四に、実際の 2 者間相互作用における視点取得の働きについての示唆を得られたことである。すなわち、被感情的視点取得の知覚は被共感の知覚を生じさせるが、被認知的視点取得の知覚は被共感の知覚を生じさせないこと(研究 4)、そして被感情的視点取得の知

覚が被共感の知覚を生じさせ、それによって自他の重なりおよび他者へのポジティブな態度が促進されるというモデルが得られたことから(研究7-8), Galinsky et al.(2008)が示した2者間相互作用における感情的視点取得の効果を解釈できる可能性がある。Galinsky et al.(2008)は、交渉場面を想定した2者間ロールプレイにおいて、買い手が売り手に対して感情的視点取得をするように教示された共感群と、買い手が売り手に対して認知的視点取得をするように教示された視点取得群と、そしてただ役割をこなすように教示された統制群それぞれの成果について比較している<sup>22</sup>。その結果、共感群の売り手は統制群の売り手よりも、交渉過程の満足度が高かった。一方で、視点取得群の売り手と統制群の売り手には、交渉過程の満足度に差はみられなかった。また、交渉の結果として、買い手と売り手双方の利益を最大化したのは、買い手による売り手への認知的視点取得を促した視点取得群であった。

Galinsky et al.(2008)の手続きによると、買い手の感情的視点取得ないし認知的視点取得は教示によって促されたと考えられるものの、売り手による被感情的視点取得の知覚ないし被認知的視点取得の知覚については扱っていない。そのため、被感情的視点取得の知覚ないし被認知的視点取得の知覚が生じたか否かによって上記の結果が示されたのかどうかは言及できない。しかしながら、買い手からの感情的視点取得を受けていたと考えられる売り手が買い手との相互作用過程を最もポジティブに評価したことは、本論文で示された結果と同様の傾向だといえるだろう。すなわち、買い手からの感情的視点取得を受けていた

---

<sup>22</sup> Galinsky et al.(2008)による各群の命名を引用した。本論文における視点取得および共感の定義と Galinsky et al.(2008)による各群の命名は一致しないことに注意されたい。



と考えられる共感条件の売り手は、買い手からの感情的視点取得を知覚していた可能性がある。そのため、被感情的視点取得の知覚によって被共感の知覚が生じていたのかもしれない。そして、被感情的視点取得の知覚が生じることによって被共感の知覚が生じ、そして他者へのポジティブな態度を促進していくプロセスが示されたことから(研究 7-8)、共感条件の売り手は買い手へのポジティブな態度を形成し、交渉過程に満足度を感じた可能性がある。一方で、買い手からの認知的視点取得を受けていた売り手は、買い手からの認知的視点取得を知覚していたと可能性がある。そのため、被共感の知覚は生じず、交渉過程における満足度が高まらなかったのかもしれない。

上記の Galinsky et al.(2008)の解釈から考えられる可能性は、人は他者からの感情的視点取得の表明がなくとも、その他者からの感情的視点取得を知覚できるかもしれないということである。Galinsky et al.(2008)は、売り手への感情的視点取得ないし認知的視点取得をするように買い手に教示をしたが、売り手はそのことを知らされていなかった。したがって、買い手が売り手に対して感情的視点取得ないし認知的視点取得をしていることを伝えない限り、売り手は買い手による視点取得について知りえない状況であった。それにも関わらず、被感情的視点取得の知覚が生じていたと解釈できる可能性が示唆されたのは、交渉の中で買い手自らが売り手に対して感情的視点取得をしていることを伝えたか、もしくは買い手から伝えられていないにも関わらず、売り手は自身に向けられた感情的視点取得を知覚していたかである。Galinsky et al.(2008)から、これらの可能性について判断することはできないが、もし后者であった場合、本論文の示す他者からの視点取得の表明が他者へのポジティブな態度に及ぼす効果のプロセスは、他者からの視点取得に関する表明がない場合

であっても適応できる可能性がある。今後の課題として、本論文の知見が、実際の2者間相互作用過程においてどのこまで適応できるのかを検討する必要がある。

### 5.3. 本論文の限界と展望

最後に、本論文の限界および展望を述べる。まず、本論文には、方法論的な限界および理論的な限界が、主に2点あったと考えられる。具体的には、(a)本論文の一連の研究の参加者と、知見の一般化について、そして(b)他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果のプロセスに関するより詳細な検討の余地を残したことについてである。そして、本論文で得られた知見の展望を述べる。すなわち、本論文の知見が学際的に発展・活用される可能性である。

第一の限界は、本論文の一連の研究の参加者と、知見の一般化についてである。これは、本論文の方法論的な限界である。本論文の一連の研究では、都内大学に通う学生が研究参加者となっていた。そのため、研究手続きにおける相互作用相手(i.e., それぞれの研究でパートナーとして伝えられた架空の人物)は、おなじ大学生であった。これに対して、Goldstein et al.(2014)は、6つの研究を行う中で、大学生から社会人までの幅広い年齢を対象としていた。そのため、他者からの視点取得の表明を受ける話題についても、上司から不平等な扱いを受けた経験についてだったり、また学生会選挙の立候補者のインタビューであったり、さまざまな年齢・立場の人を想定した検討が行われている。今後の課題として、本論文で示された知見を様々な年齢・立場の人にあわせて検討し、その一般化可能性を確認する必要があるだろう。

第二の限界は、他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果のプロセスに関するより詳細な検討の余地を残したことである。本論文の研究2は、被共感の知覚が自他の重なる知覚を促進するという関係を確認するために行われたが、同時に、被共感の知覚に関するいくつか資料的知見が得られた。ここで得られた資料的知見を、他者からの視点取得の表明が対人認知に及ぼす効果のプロセスモデルに反映させれば、他者に視点取得されることに関する諸要因について、より詳細な説明が可能になると考えられる。たとえば、被共感経験において自他の重なる知覚が高まったのは、共感者の経験や考え方・感じ方が自分と同じようだと知ることができたからだという回答が多くみられた。このことから、被共感の知覚から自他の重なる知覚へのパスは、被共感の知覚によって他者の考え方が自分自身と似ていることを知ることによって生じる可能性が考えられる。また、被共感の知覚によってポジティブな感情が生じることから、自身にポジティブ感情を喚起させてくれた他者への返報性によって、他者へのポジティブな態度が促進される可能性があるかもしれない。他者に視点取得されることの効果を包括的に検討していくためには、これらの可能性について検討していく必要があるだろう。

次に、本論文の展望を述べる。本論文は、他者からの視点取得の表明が他者へのポジティブな態度に及ぼす効果について、体系的に検討した。その知見は、学際的に発展、活用される可能性がある。たとえば近年、人と相互作用する数多くのロボットが研究・開発され、その用途は福祉・医療・看護、エンターテインメント、接客、情報家電、警備等多岐にわたる(森・小倉・石田, 2011)。その中で、ロボットからの共感を人が知覚することに関する研究が行われている(e.g., Ztowski, Sumioka, et al., 2016)。しかしながら、これらの研

究では、ロボットの行動や外見に関して、どのような要素がロボットから人への共感を知覚させるかを検討しているものの、被視点取得の知覚や被共感の知覚といった心理学的な理論に基づいた研究はほとんどない。このような研究分野において本論文の知見を活用できれば、ロボットからの被共感の知覚について、理論的な示唆を与えるかもしれない。また、人とロボットとの関連における視点取得の表明、被視点取得の知覚、そして被共感の知覚に関する知見を蓄積していくことで、本論文の知見は人同士の相互作用にのみ適用されるのか、それとも人以外(e.g., 上記であげたロボットや、犬や猫といった愛玩動物)との相互作用にも適用可能なかを明らかにできるだろう。

このように、本論文の知見は、ロボットの研究・開発といった心理学以外の分野での応用も期待できる。人に被共感を知覚させるロボットの研究・開発が進むことは、独居による孤独感を軽減したり、接客業などで用いれば少子高齢化に伴い労働力不足を解決したりすることにも繋がるだろう(高松, 2019)。本論文の知見は、前節 5.2.で述べたような心理学研究への寄与のみでなく、人との相互作用が想定される多くの研究分野にすると考えられる。

## 引用文献

- Aron, A., Aron, E. N. & Smollan, D.(1992). Inclusion of other in the self scale and the structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 596-612.
- Batson, C. D., Batson, J. G., Griffitt, C. A., Barrientos, S., Brandt, R., Sprengelmeyer, P. & Bayly, M. J.(1989). Negative-state relief and empathy-altruism hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 922-933.
- Batson, C. D., Sager, K., Garst, E., Kang, M., Rubchinsky, K. & Dawson, K.(1997). Is empathy-induced due to self-other merging? *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 495-509.
- Baron-Cohen, S., Leslie, A. M., & Frith, U.(1985). Does the autistic child have a “theory of mind” ? *Cognition*, 21, 37-46.  
[https://doi.org/10.1016/0010-0277\(85\)90022-8](https://doi.org/10.1016/0010-0277(85)90022-8).
- Berndsen, M., & Wenzel, M.(2021). Offenders’ claims of taking the victims’ perspective can promote forgiveness, or backfire! The moderating role of correctly voicing the victims’ emotions in collective apologies. *European Journal of Social Psychology*, 51, 5-22.  
<https://doi.org/10.1002/ejsp.2710>
- Davis, M. H.(1994). *Empathy: A social psychological approach*. Madison, Wis. : Brown & Benchmark Publishers. (デイビス, M. H. 菊池章夫(訳)(1999). 共感の社会心理学:人間関係の基礎 川島書店)

Davis, M. H., Conklin, L., Smith, A. & Luce, C.(1996). Effect of perspective taking on the cognitive representation of persons: A merging of self and other. *Journal of Personality and Social Psychology, 70*, 713-726.

榎本淳子(1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, 47, 180-190.

Galinsky, A. D., Maddux, W. W., Gilin, D. & White, J. B.(2008). Why it pays to get inside the head of your opponent: the differential effects of perspective taking and empathy in negotiations. *Journal of Personality and Social Psychology, 78*, 708-724.

Galinsky, A. D., & Moskowitz, G. B. (2000). Perspective-taking: Decreasing stereotype expression, stereotype accessibility, and in-group favoritism. *Journal of Personality and Social Psychology, 78*, 708–724.  
<https://doi.org/10.1037/0022-3514.78.4.708>

Goldstein, N. J., Vezich, I. S. & Shapiro, J. R.(2014). Perceived perspective taking: When others walk in our shoes. *Journal of Personality and Social Psychology, 106*, 941-960.

葉山大地・植村みゆき・萩原俊彦・大内晶子・及川千都子・鈴木高志・櫻井茂男(2008). 感性プロセス尺度作成の試み *Tsukuba Psychological Research, 36*, 39-48.

日道俊之・小山内秀和・後藤崇志・藤田弥世・河村悠太・Davis, M. H.・野村理朗(2017). 日本語版対人反応性指標の作成, 心理学研究, 88, 61-71.  
<https://doi.org/10.4992/jjpsy.88.15218>

平賀充記(2021). リモート強制された大学生たちの偽らざる本音——オンラインが当然の環

境で育った世代の新常識—— 東洋経済 ONLINE 4月25日, Retrieved from

<https://toyokeizai.net/articles/-/424730> (2021年9月10日)

本間優子・内山伊知郎(2013). 役割（視点）取得能力に関する研究のレビュー：道徳性発達

理論と多次元共感理論からの検討 新潟青陵学会誌, 6, 97-105.

<http://doi.org/10.32147/00001357>

堀井俊章・槌谷笑子(1995). 最早期記憶と対人信頼感との関係について 性格心理学研究,

3, 27-36.

Kay, A. C., & Jost, J. T. (2003). Complementary Justice: Effects of "Poor but Happy" and "Poor but

Honest" Stereotype Exemplars on System Justification and Implicit Activation of the Justice

Motive. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85(5), 823–837.

<https://doi.org/10.1037/0022-3514.85.5.823>

Kimmes, J.(2013). *Self-other overlap as a mediator between dyadic empathy and relationship*

*satisfaction* (Unpublishurd master's Thesis). Purdue University.

Lei, Z., Yin, D., & Zhang, H.(2015). Should reviewers stand in the shoes of review readers? The role of

perspective taking in online reviews. *SIGHCI 2015 Proceedings*, 15, Retrieved from

<https://aisel.aisnet.org/sighci2015/15> (September 10, 2021)

Maner, J. K., Luce, C. L., Neuberg, S. L., Cialdini, R. B., Brown, S., & Sagarin, B. J. (2002). The Effects

of Perspective Taking on Motivations for Helping: Still No Evidence for Altruism. *Personality and*

Social Psychology Bulletin, 28(11), 1601–1610.

<https://doi.org/10.1177/014616702237586>

水本篤・竹内理(2008). 研究論文における効果量の報告のために—基礎的概念と注意点—  
英語教育研究, 31, 57-66.

門地里絵・鈴木直人(2000). 状況からみた安堵感の因子構造 心理学研究, 71, 42-50.

<https://doi.org/10.4992/jjpsy.71.42>

森善一・小倉昭隆・石田真之(2011). 人の行動に基づくコンパニオンロボットの行動生成  
日本完成工学会論文誌, 10, 409-415.

<https://doi.org/10.5057/jjske.10.409>

諸井克英(1991). 改訂 UCLA 孤独感尺度の次元性の検討 人文論集, 42, 23-51.

小塩真司・阿部晋吾・カトリーノ ピノ(2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory(TITI-  
J)作成の試み パーソナリティ研究, 21, 40-52.

Oswald, P. A.(1996). The effects of cognitive and affective perspective taking on empathic concern and  
altruistic helping. *The Journal of Social Psychology*, 136, 613-623.

Richardson, D. R., Green, L. R., & Lago, T. (1998). The relationship between perspective-taking and  
nonaggressive responding in the face of an attack. *Journal of Personality*, 66, 235–256.

<https://doi.org/10.1111/1467-6494.00011>

Stotland, E.(1969). *Exploratory investigations of empathy*. In L. Berkowitz(Ed.), *Advances in  
experimental social psychology* (Vol. 4, pp.271-313). New York: Academic Press.

高松淳(2019). ヒトとロボットの協調 日本ロボット学会誌, 37, 293-296.



田中伸明(2006). 共感的理解の伝達を意図するカウンセラーの応答の特徴について カウンセリング研究, 39, 113-123.

登張真穂(2003). 青年期の共感性の発達：多角的視点による検討 発達心理学研究, 14, 136-148.

<https://doi.org/10.11201/jjdp.14.136>

登張真穂(2000). 多角的視点に基づく共感性研究の展望 性格心理学研究, 9, 36-51.

相馬正史・都築誉史(2014). 意思決定におけるバイアス矯正の研究動向 立教大学心理学研究, 56, 45-58.

<http://doi.org/10.14992/00009017>

鈴木有美・木野和代(2008). 多次元共感性尺度(MES)の作成 教育心理学研究, 56, 487-497.

[https://doi.org/10.5926/jjep1953.56.4\\_487](https://doi.org/10.5926/jjep1953.56.4_487)

鈴木雄大・坂本真士(2021). 被共感における対人認知および感情喚起についての調査 日本大学心理学研究, 42, 7-16.

鈴木雄大・山川樹・坂本真士(2020a). 共感された出来事の評価と被共感の知覚の関連 パーソナリティ研究, 29, 5-7.

鈴木雄大・山川樹・坂本真士(2020b). 被情動的視点取得の知覚が被共感の知覚および自他の重なる知覚に及ぼす影響 日本大学心理学研究, 41, 14-24.

鈴木雄大・田中知恵(2020). 被視点取得の知覚, 感情と思考の伝達および被視点取得欲求が対人認知に及ぼす影響 明治学院大学大学院心理学研究科紀要, 25, 15-27.

高橋幸子(2013). 対人ストレスを身近な他者に相談する過程の検討 カウンセリング研究,

46, 1-10.

[https://doi.org/10.11544/cou.46.1\\_1](https://doi.org/10.11544/cou.46.1_1)

山本翔太 (2007). 共感経験と被共感経験の関連 立教大学臨床心理学研究, 1, 53-63.

Złotowski, J., Sumioka, H., Nishio, S., Glas, D., Bartneck, C. & Ishiguro, H. (2016). Appearance of a

robot affects the impact of its behaviour on perceived trustworthiness and empathy. *Paladyn,*

*Journal of Behavioral Robotics*, 7, 55-66.

<https://doi.org/10.1515/pjbr-2016-0005>

## 謝辞

本学位論文の執筆にあたり、多くの方々にご指導とご協力をいただきました。

指導教員であり本論文の主査である坂本真土先生(日本大学)には、厚く熱い指導を賜りました。どれだけ感謝の言葉を並べても到底足りません。深くお礼申し上げます。坂本先生のもとで本論文を執筆できたことは、生涯の宝となりました。そして、副査をお引受けくださった岡隆先生、羽生和紀先生(いずれも日本大学)、ご多忙な中、丁寧にご指導していただきありがとうございます。心より感謝申し上げます。

山川樹先生(東北文化学園大学)には、本論文の構想時点からのご助言、ご指導のみならず、本当に多くのことを受け賜りました。心からの感謝を申し上げます。また、博士前期課程での指導教員の田中知恵先生(明治学院大学心理学)、には、研究1において多くのご指導をいただきました。本当にありがとうございました。

岡田和久先生、菊島勝也先生、河野千佳先生、斎藤慶典先生、津川律子先生、内藤佳津雄先生、松浦隆信先生、望月正哉先生、山口義枝先生、横田正夫先生、依田麻子先生、狩野武道先生(いずれも日本大学)、巖島行雄先生(人間環境大学)と、日本大学の先生方からは、研究会をはじめとした場で多くのご教授を賜ったことに加え、調査の実施や実験参加者の募集にもご協力頂きました。厚くお礼申し上げます。

亀山晶子先生(国際医療福祉大学)、芳賀道匡先生(静岡福祉大学)、村中昌紀先生(埼玉工業大学)、日頃から格別のご高配を賜り、誠にありがとうございました。素晴らしい先輩方に囲まれ、大変ありがたく思っています。

一緒に研究プロジェクトを実施したり，実験刺激の作成に協力してくださったりし一緒に研究プロジェクトを実施したり，実験刺激の作成に協力してくださったりした歴代の日本大学文理学部坂本ゼミ生の皆様，皆様と一緒になければ実現できなかった研究がいくつもありました。大変ありがたく思っています。

日本大学文理学部心理学科事務室の皆様には，本論文執筆のみならず，普段の研究研究生活において度々お世話になりました。ありがとうございました。

最後に，これまで実施してきた実験及び調査に参加してくださった皆様，そしてこれまで励まし支えてくださった全ての皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。

# 付録

## 付録 A 研究 3 で使用したシナリオ

### 実験群(共感的反応を受ける群)

今日の授業では、会話について考えるそうだ。授業の一環で、近くに座っている人と雑談をするように言われた。先生の指示に従って、隣に座っていた人とペアを組んだ。

お互いに、顔を見たことはあるようだ。しかし、名前はわからなかったので、自己紹介をした。Aさんという同性の人だ。

会話をするにあたって、まず私が話し手で、Aさんが聞き手となった。何を話すか少し悩んだが、最近のうれしかったことを話すことにした。私は、「このあいだ、バイトで先輩とお客さんにほめられたんです。最近は失敗も多くてちょっとへこんでたんですが、ほめられたのがうれしくて。がんばろうって思いました。」と話した。

それを聞いたAさんは、「バイトでほめられたんですね。すごいと思います。」と笑顔で返してくれた。

### 対照群(共感的反応を受けない群)

今日の授業では、会話について考えるそうだ。授業の一環で、近くに座っている人と雑談をするように言われた。先生の指示に従って、隣に座っていた人とペアを組んだ。

お互いに、顔を見たことはあるようだ。しかし、名前はわからなかったので、自己紹介をした。Aさんという同性の人だ。

会話をするにあたって、まず私が話し手で、Aさんが聞き手となった。何を話すか少し悩んだが、最近のうれしかったことを話すことにした。私は、「このあいだ、バイトで先輩とお客さんにほめられたんです。最近は失敗も多くてちょっとへこんでたんですが、ほめられたのがうれしくて。がんばろうって思いました。」と話した。

それを聞いたAさんは、「ああ、そうなんですか。」と言っていた。

## 付録 B 研究 3 で使用した質問票における被共感の知覚尺度

読んでいただいた文章の場面について回答してください。以下の項目について、Aさんはどの程度あてはまると思いますか。あてはまる数字に○を付けてください。

	全くあてはまらない	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	とてもよくあてはまる
1, あなたに共感していた。		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
2, あなたと同じ気持ちになっていた。		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
3, あなたの話聞きいても、 特になにも感じていなかった。		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
4, あなたに対してポジティブな気持ちを感じていた。		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
5, あなたの気持ちを共有できた。		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	

## 付録 C 研究 6 で使用した被共感経験尺度(山本, 2007)の被共有経験 13

### 項目

以下の項目では、あなたのこれまでの経験についてお聞きします。  
それぞれの項目をよく読み、それぞれの項目の内容をあなたが経験している程度として、  
もっとも当てはまる回答に○を付けてください。

	まったく ない		どちらとも いえない			いつも そうだ	
1. 不安を感じていることを伝えたと き、相手がその不安を同じように感 じ取ってくれたことがある。	1	2	3	4	5	6	7
2. 自分が悲しんでいるときに、人がそ の悲しさを感じとってくれたという 経験をしたことがある。	1	2	3	4	5	6	7
3. 自分が満足を感じているときに、人 がその満足感をわかってくれたこと がある。	1	2	3	4	5	6	7
4. 自分のドキドキした気持ちを他の人 が 同じように感じとってくれたことが ある。	1	2	3	4	5	6	7
5. 自分が喜んでいるときに、他の人が その気持ちを感じとって一緒に嬉し い気持ちになってくれたことがあ る。	1	2	3	4	5	6	7
6. 自分が腹を立てているときに、人が その怒りを感じとってくれたという 経験をしたことがある。	1	2	3	4	5	6	7



7.	自分が何かを期待しているときに、他の人もそのわくわくした気持ちと同じように感じとってくれていたことがある。	1	2	3	4	5	6	7
8.	自分が何かに苦しんでいるときに、相手も自分と同じような気持ちになってくれていたことがある。	1	2	3	4	5	6	7
9.	自分が爽快な気分になっているときに、相手がその清々しさを感じとろうとしてくれて、おなじような気持ちになってくれたことがある。	1	2	3	4	5	6	7
10.	自分が何かにがっかりした気分であるときに、相手がその失望した気持ちを感じてくれたという経験がある。	1	2	3	4	5	6	7
11.	何かができなくて劣等感を感じているときに、人が自分の気持ちをわかってくれたことがある。	1	2	3	4	5	6	7
12.	自分がホッとした気持ちでいると、相手も同じように安堵した気持ちになってくれたという経験がある。	1	2	3	4	5	6	7
13.	自分が孤独を感じているときに、相手がその孤独な気持ちをわかってくれたことがある。	1	2	3	4	5	6	7

## 付録 D 研究 6 で使用した共感性プロセス尺度(葉山他, 2008)の視点取

### 得水準 5 項目

以下の項目では、あなた自身についてお聞きします。

項目をよく読み、あなたにもっとも当てはまる回答に○を付けてください。

	まったく当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらともいえない	やや当てはまる	とても当てはまる
1. 他者をよく理解するために、相手の立場になって考えようとする。	1	2	3	4	5
2. 相手の立場に立って、その人の感じている不安を理解するようにしている。	1	2	3	4	5
3. 相手が悲しんでいるときに、相手の立場に立って理解しようとするほうである。	1	2	3	4	5
4. なぜ相手が笑っているか、その人の気持ちに立って理解するようにしている。	1	2	3	4	5
5. 相手の視点にたって、その人が感じている楽しさを理解するようにしている。	1	2	3	4	5

## 付録 E 研究 6 で使用した対人信頼性尺度(堀井・植谷, 1995)

以下の項目は、あなたの人間観を尋ねるものです。自分の人間観に最も近いと思う番号に○印をつけてください。

	そう 思わない	やや そう 思わない	どちら とも いえない	やや そう 思う	そう 思う
1. 人は、基本的には正直である。	1	2	3	4	5
2. 人は、多少良くないことをやっても 自分の利益を得ようとする。	1	2	3	4	5
3. 人は、頼りにできる人がわずかしかない。	1	2	3	4	5
4. 人は、ほかの人の親切に下心を感じ、 気を付けている。	1	2	3	4	5
5. 人は、ふつう清く正しい人生を送る。	1	2	3	4	5
6. 人は、成功するためにうそをつく。	1	2	3	4	5
7. 人は、近ごろだれも知らないところで 多くの罪を犯している。	1	2	3	4	5
8. 人は、ふつうほかの人と誠実にかかわっている。	1	2	3	4	5
9. 人は、だれかに利用されるかもしれないと思い、 気を付けている。	1	2	3	4	5
10. 人は、ほかの人を信用しないほうが 安全であると思っている。	1	2	3	4	5
11. 人は、ほかの人に対して、信用してもよいと いうことがはっきりわかるまでは、 用心深くしている。	1	2	3	4	5
12. 人は、口先ではうまいことを言っても、 結局は自分の幸せに一番関心がある。	1	2	3	4	5
13. 人は、ほかの人を援助することを 内心ではいやがっている。	1	2	3	4	5
14. 人は、自分がするといったことは実行する。	1	2	3	4	5
15. 人は、チャンスがあれば税金をごまかす。	1	2	3	4	5

- |                                     |   |   |   |   |   |
|-------------------------------------|---|---|---|---|---|
| 16. 人は、他人の権利を認めるよりも、<br>自分の権利を主張する。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 17. 人は、やっかいなめにあわないために、<br>うそをつく。    | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

付録 F 研究 6 で使用した改訂版 UCLA 孤独感尺度日本語版(ULS-J;  
森井, 1991)

1 から 20 までの文章に述べられているそれぞれのことがらを、日頃あなたはどれくらい  
感じていますか。

	け っ し て 感 じ な い	感 じ な い	ど ち ら か と い え ば 感 じ る	ど ち ら か と い え ば 感 じ る	た び た び 感 じ る
1. 私は自分の周囲の人たちと調子よくいっている。	1	2	3	4	
2. 私は、人とのつきあいが無い。	1	2	3	4	
3. 私には、頼りにできる人がだれもいない。	1	2	3	4	
4. 私は、ひとりぼっちではない。	1	2	3	4	
5. 私は、親しい仲間たちのなかでかくことのできない存在である。	1	2	3	4	
6. 渡井は、自分の周囲の人たちと共通点が多い。	1	2	3	4	
7. 私は、今、だれとも親しくしていない。	1	2	3	4	
8. 私の興味や考えは、私の周囲の人たちとはちがう。	1	2	3	4	
9. 私は、外出好きの人間である。	1	2	3	4	
10. 私には、親密感の持てる人たちがいる。	1	2	3	4	
11. 私は、無視されている。	1	2	3	4	
12. 私の社会的なつながりはうわべだけのものである。	1	2	3	4	
13. 私をよく知っている人はだれもいない。	1	2	3	4	
14. 私は、他の人たちから孤立している。	1	2	3	4	
15. 私は、望むときにはいつでも、人とつきあうことができる。	1	2	3	4	

16.	私には、私を本当に 理解してくれる人たちがいる。	1	2	3	4
17.	私は、大変引っ込み思案なので みじめである。	1	2	3	4
18.	私には、知人はいるが、 私と同じ考えの人はいない。	1	2	3	4
19.	私には、話しかけることの できる人たちがいる。	1	2	3	4
20.	私には、頼りにできる人たちがいる。	1	2	3	4

## 付録 G 研究 7 でフェーズ 2 開始時に送信されたメール文面の例

注) 参加者および条件ごとに異なる部分は、中括弧と下線[ ]で示した。また、[各条件にあわせた教示文]は、メール文面の例の下部に示した。

[参加者イニシャル]さま

大変お世話になっております。日本大学大学院 文学研究科心理学専攻の鈴木雄大 (1018D03) です。先日ご回答いただいた研究について、[参加者イニシャル]さまの担当となりました。どうぞよろしくお願いいたします。

先日は、研究課題「Covid-19 (新型コロナウイルス) による大学生の生活への影響に関する調査」にご参加いただきありがとうございます。この度は、先日ご回答いただいたフェーズ 1 に続き、フェーズ 2 のご案内をしたく連絡いたしました。

まず、あなたの参加者 ID をお知らせいたします。

参加者 ID : [4桁の参加者 ID]

この参加者 ID はフェーズ 2 の回答ページにてご入力いただきます。ご入力の際は、間違いのないようにお願いいたします。

先ほど、あなたのパートナー (以後、W.Y.さんと呼びます) に、あなたがお書きになったエッセイ (2020 年度以降の講義がオンライン化されたことによって苦勞したことや不満を感じたことについて) を読んでいただきました。その際に、W.Y.さんにインタビューを行い、いくつかの質問に回答していただいています。そのうちの一部を含む、W.Y.さんについての情報を以下に記載いたしましたので、ご確認ください。なお、以下

に記載した内容は、あなたが本メールを十分によく読んだかどうかの確認として、後ほど回答していただきます。メールを読み返すこともできますので、十分に確認してください。W.Y.さんについての情報を確認しましたら、その下に記載された URL からフェーズ2回答フォームにアクセスし、いくつかの質問についてご回答ください。

本メールを受け取りましたら、できるだけお早めに（なるべく当日中、おそくとも2日以内）にご回答をお願いいたします。フェーズ2への回答が確認でき次第、謝礼についてのインフォメーションをお送りいたします。以下、W.Y.さんについての情報です。

W.Y.さんは、あなたと同性の人物でした。

W.Y.さんにインタビューしたところ、次のように仰っていました。

[各条件にあわせた教示文]

上記の内容を確認しましたら、こちらの URL から回答をお願いいたします。

フェーズ2回答フォームの URL

よろしく願いいたします。

鈴木雄大



[各条件にあわせた教示文]

**表明あり条件** あなたに記述してもらったエッセイを読むとき、あなたの視点に立って、気持ちを想像しながら読むことができたそうです。

**表明なし条件** あなたに記述してもらったエッセイを客観的な視点で読めたそうです。

## 付録 H 研究 8 でフェーズ 2 開始時に送信されたメール文面の例

注) 参加者および条件ごとに異なる部分は、中括弧と下線[ ]で示した。また、付録 G と同様に、各条件の操作にあたる教示文はメール文面の例の下部に示した。

[参加者イニシャル]さま

大変お世話になっております。日本大学大学院 文学研究科心理学専攻の鈴木雄大 (1018D03) です。先日ご回答いただいた研究について、[参加者イニシャル]さまの担当となりました。どうぞよろしく願いいたします。

先日は、研究課題「Covid-19 (新型コロナウイルス) による大学生の生活への影響に関する調査」にご参加いただきありがとうございます。この度は、先日ご回答いただいたフェーズ 1 に続き、フェーズ 2 のご案内をしたく連絡いたしました。

まず、あなたの参加者 ID をお知らせいたします。

参加者 ID : [4桁の参加者 ID]

この参加者 ID はフェーズ 2 の回答ページにてご入力いただきます。ご入力の際は、間違いのないようお願いいたします。

先ほど、あなたのパートナー (以後、W.Y.さんと呼びます) に、あなたがお書きになったエッセイ (2020 年度の講義がオンライン化されたことによって苦勞したことや不満を感じたことについて) を読んでいただきました。その際に、W.Y.さんにインタビューを行い、いくつかの質問に回答していただいています。そのうちの一部を含む、W.Y.さんについての情報を以下に記載いたしましたので、ご確認ください。なお、以下に記載した内容

は、あなたが本メールを十分によく読んだかどうかの確認として、後ほど回答していただきます。メールを読み返すこともできますので、十分に確認してください。W.Y.さんについての情報を確認しましたら、その下に記載された URL からフェーズ 2 回答フォームにアクセスし、いくつかの質問についてご回答ください。

本メールを受け取りましたら、できるだけお早めに（なるべく当日中、おそくとも 2 日以内）にご回答をお願いいたします。フェーズ 2 への回答が確認でき次第、謝礼についてのインフォメーションをお送りいたします。以下、W.Y.さんについての情報です。

W.Y.さんは、あなたと同性の人物でした。

あなたの記述したエッセイを読んだ W.Y.さんにインタビューしたところ、次のように仰っていました。

[感情的視点取得の表明を操作する教示文]

また、W.Y.さんは、あなたが記述したエッセイの内容と似たような経験をされたかどうか、インタビューしました。

[他者情報を操作する教示文]

上記の内容を確認しましたら、こちらの URL から回答をお願いいたします。

[条件にあわせたフェーズ 2 回答フォームの URL]

よろしくお願いいたします。

鈴木雄大

[感情的視点取得の表明を操作する教示文]

**表明あり条件** あなたに記述してもらったエッセイを読むとき、あなたの視点に立って、気持ちを想像しながら読むことができたそうです。

**表明なし条件** あなたに記述してもらったエッセイを客観的な視点で読めたそうです。

[他者情報を操作する教示文]

**類似経験条件** W.Y.さんも、あなたと同じように、講義のオンライン化を経験したそうです。

**非類似経験条件** W.Y.さんは、実習の多い医療系の大学に通っており、4月以降もほとんどの授業が対面で行われていたため、オンライン授業はほとんど経験しなかったと言っていました。